

靈界物語 第三二卷 海洋萬里 未の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍点が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第三二卷』愛善世界社

1999(平成11)年11月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onidodo.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 しんりん 森林の都 みやこ

第一章 ばんぶつどうげん 萬物同言 （八九二）

第二章 まうじうくわいぎ 猛獸會議 （八九三）

第三章 兔の言霊うさぎことたま〔八九四〕

第四章 鰐の言霊わにことたま〔八九五〕

第五章 琉球の光りゅうきゅうひかり〔八九六〕

第六章 獅子粉塵ししふんじん〔八九七〕

第二篇 北の森林きたしんりん

第七章 試金玉しきんぎよく〔八九八〕

第八章 三人娘さんにんむすめ〔八九九〕

第九章 岩窟女がんくつをんな〔九〇〇〕

第一〇章 暗黒殿あんこくでん〔九〇一〕

第十一章 人の裘ひとかほころも〔九〇二〕

第十二章 鰐の橋わにはし〔九〇三〕

第十三章 平等愛びんびつあい〔九〇四〕

第一四章 山上の祝さんじやう いはひ〔九〇五〕

第三篇 瑞雲ずゐ うん あいたい翳たい

第一五章 萬歳樂ばんざいらく〔九〇六〕

第一六章 回顧くわいこの歌うた〔九〇七〕

第一七章 悔悟くわいこの歌うた〔九〇八〕

第一八章 龍國たつくにわけ別わけ〔九〇九〕

第一九章 輕石かるいしぐるま車くるま〔九一〇〕

第二〇章 瑞みづの言こと靈たま〔九一一〕

第二一章 奉答ほうたふか歌うた〔九一二〕

第四篇 天祥地瑞てんしやうちずゐ

第二章 橋架（九一三）

第三章 老婆心切（九一四）

第四章 冷氷（九一五）

~~~~~

序文

本巻は伊豆國湯ヶ島温泉湯本館の狩野川に向へる特別建物を給せられ、折柄の大洪水にて、激潭飛沫の聲ゴウゴウと騒がしく、遂には新館へ引移り、漸くにして編み上げました。日数は三ケ日に亘り、急速度を以て、例の如く無事に脱稿したのも、全く神明の加護と信じます。

時に天聲社より便りあり、大本の幹部たりし某々二三氏より、靈界物語はくだらないから、印刷發行停止され度しとの申込みありたりと。實に御尤もなる要求である。現代の文明とか云ふ學問を詰込みたる人士の耳には、馬鹿らしくて、氣

に容らぬのは當然でありませう。されど本教の大精神のある所を、普く世に紹介するには、物語の方法に依らなくては、餘り立派な學究的な書物は、一般の人々に諒解しがたきを以て、止むを得ず、神様から親切に御示し下さるので、決して瑞月が頭腦而己の産物ではありませぬ。只私は惟神の儘に従ふより外に道なく、如何なる妨害も壓迫も恐れず口述し、且つ世に廣く發表する考へであります。

大正十一年八月二十四日 舊七月二日

於 伊豆湯ヶ島

言靈學應用の主要を説示し、且つ神の平等愛は洽く禽獸蟲魚に至る迄均霑し給ふ事を、具體的に現はし、三五教の教主言依別命、國依別命が琉球の玉の靈光によりて、アマゾン河および南北の大森林に入りて舍身の大活動中、靈光に照らされて、漸くその效を奏し、一行十八人アルゼンチン（ウツ）の都へ首尾よく凱旋し、神素盞鳴尊に親しく拜顔し、國依別は尊の末女なる末子姫と結婚の約成立したる際、例の高姫が清濁二本の靈魂上の見地より、極力妨害運動を開始せる面白き顛末を述べてあります。雙方ともに眞心の發動にて、其間に、毫末も私心私欲の混入することなく、唯々世を思ひ神の道を思ふの餘り、種々意見の相違を來したる次第は明かに現はれて居ります。惟神靈幸倍坐世。

大正十一年八月二十四日 舊七月二日

於 伊豆湯ヶ島



第一篇 森林の都

第一章 萬物同言（八九二）

國くには治はる立た大神ちのかみが 再ふたび地ち上じやうに現あらはれて

至し仁じん至し愛あいの五み六ろく七しち神しん 眞しん善ぜん美びなる神かみの世よを

堅かき磐は常とき磐はに樹たて給たまふ 其その經けい綸りんの神しん寶ぼうと

尊そん重ちゆうされし珍うづ寶たから 金こん剛がう不ふ壊ゑの如に意い寶ぼう珠しゆ

紫むら色さきの靈れい玉ぎよくや 黄こ金がねの玉たまを三あ五なの

神かみの聖せい地ちに納をめつ 時とき待まちたまふ折を柄りに

錦にしきの宮みやの黒くろ姫ひめが 保ほく管わんなしたる黄わう金こんの

珍つづの寶たからを紛ふん失しつし 日ひの出で神かみと自じ稱しやうする

系統ひつぽうの身魂みたま高姫たかひめに  
追放つるはうされて黒姫くろひめは

龍宮りゅうぐう洲しまなるオセアニア  
一つの洲しまに打渡うちわたり

玉たまの所在ありかを探たづねむと  
進すすみ行くこそ憐あはれなれ

アルプス教けうを開ひらきたる  
鷹依たかより姫ひめも高姫たかひめの

嫌疑けんぎを受うけて止やむを得えず  
龍國たつくに別わけを伴ともなひて

浪路なみぢを遙はるかに浮うかびつつ  
數多あまたの島しまを搜索そうさくし

心筑こころつくし紫むらさの果はて迄まで  
驅かけ巡めぐりつつ探さがせども

行方ゆくへは更さらに白波しらなみの  
舟漕ふねこぎ渡わたりやうやうに

そば立たつ波なみも高砂たかさごの  
旭あさひもテルの港みなとまで

テリススタンヤカーリンス  
二人ふたりを加くはへて四人よにんづれ連れ

漸々やうやう此處こゝに安着あんちやくし  
テル國くに街道かいだうをスタスタと

南みなみに向むかつて行進かうしんし  
蛸取たことり村むらを乗越のりこえて

アリナの瀧たきの其そのほとり  
鏡かがみの池いけの岩窟がんくつに

一行いっかう四人よにんは居きよを構かまへ  
あらぬ知識ちしきを搾しぼり出だし

テルの國をば振出しに  
夜晝なしにヒルの國

足許さへもカルの國  
ブラジル國の果て迄も

鏡の池の神靈に  
玉と名のつく物あらば

惜しまず隠さず獻り  
宏大無邊の神徳を

早く受けよと宣傳の  
其效空しからずして

鏡の池の聖場は  
種々様々の厄雜玉

山の如くに積まれける  
さはさりながら一として

鷹依姫の求め居る  
黄金の玉の神寶は

容易に現はれ來らずて  
テ、カー二人は張詰めし

心の箍もいつしかに  
緩みて厭氣はさしにけり

あゝ惟神々々  
神の心に叶はぬか

一日も早く此國を  
後に見捨ててハルの國

清き靈地を選擇し  
ふたたび玉の収集に

着手せばやと鷹依姫の  
教司に獻策し

いろいろ雑多と村肝の  
心こころを悩なやます折柄をりからに

テーナの里さとの酋長しゅうちやうが  
家の秘藏ひざうの金玉きんぎよくを

御輿みこしに乗のせて獻たてまつり  
神かみの御前みまへに三五あななひの

心こころの誠まことを捧ささげける  
鷹依たかよりひめ姫ひめの一行いっかうは

忽たちまち玉たまを取とり出いだし  
夜よるに紛まぎれてアリナ山やま

驅かけ登のぼりつつウツの國くに  
荒野あらのヶ原がはらに遁走とんざうし

神かみの化身けしんに散々さんざんと  
不言ふげん實行じつかうの懲戒いましめを

受うけていよいよ改心かいしんし  
一行いっかう四人よにんは荒野原あらの

東ひがしへ指さして進すすみ行いく  
アルの港みなとを船出ふなでして

百ももの艱なやみに遇あひながら  
ゼムの港みなとに漂着へつちやくし

天祥山てんしやうざんに立向たちむかひ  
モールバンドの危き害がいをば

救すくひてチンの港みなとより  
岩樟船いはくすふねを造つくりあげ

アマゾン河がはを溯さかのぼり  
時雨しぐれの森もりに潛ひそみたる

八岐大蛇やまたをろちや醜鬼しこおにを  
言向ことむけ和やはし三五あななひの

神の恵を照らさむと

心をきはめて進み行く。

目の届かぬ許り川幅廣く、うす濁りのした水底の深き大激流、飛沫を飛ばし、何物の制壓をも恐れざる勢を以て、自由自在に奔流するアマゾン河の河口に、鷹依姫の一行は、帆に風を孕ませ漸くに安着しぬ。

此處には水陸兩棲動物のモールバンドと云ふ怪物がすべての猛獸の王として霸を利かして居る。象の體を十四五許り集めた様な太さの長き圖體をなし、爬蟲族の様に四本の足の先に水掻きあり、爪の長さ七八尺にして、劍の如く光り且つ尖つて居る。頭部は鰐の如く、口は非常に大きく、鹿のやうな角を生し、角の尖より何時も煙のやうなものを噴出してゐる。目は常に血走り、尻は蜥蜴の尾の如く、必要に應じ四五十間迄伸ばす事が出来る。さうして尾の先には鋭利な兩刃の劍の如き凶器を持つてゐる。此モールバンドに對しては、如何なる大蛇も猛獸も恐れ戦き、森林深く姿を隠して、モールバンドの害を免れむとして居る。

又此アマゾン河には長大なる蛇數多棲息し、或時は森林に或時は水底に潛んで

獸を呑み且つ人々の此地點に迷ひ來る者あらば、先を争うて出で來り呑み喰はむと待ち構へ居るなり。

又外にエルバンドと云ふ、鱔でもなく大蛇でもなく、鱗は鐵の如く固く、龍の如き鬚を生じ、四本の足ある動物あり。エルバンドの頭は玉の如く丸く、其目は比較的小さい。エルバンドは其丸い頭部を必要に應じ、細く長く伸ばし、動物の血を吸ひ生き居る怪物なり。

モールバンドは猛獸を取り喰ふにも、男性的に敵をグツと睨めつけ、尻尾を打ち振り、尾端の劍を以て敵を叩きつけ、切り殺し、其後に自分の腹に入れて了ふ。

又エルバンドは之に反し、其働きは極めて女性的で、動物の寝てゐる隙を考へ、柔かき蛸のやうな頭を、どこ迄も細く長く延長し、動物の肛門に舌の先や口の先を當てがひ、生血を搾る恐ろしき動物なり。只モールバンドにしてもエルバンドにしても、彼の最も恐るる敵は、アマゾン河の畔に棲息してゐる巨大なる鱔の群ばかりなりといふ。

鷹依姫一行は、かかる怪物の棲息するアマゾン河の河口に辿り着き、危険刻々

に身に迫り来る爲に、船を乗り捨て、アマゾン河の南岸に上陸し、時雨の森に向つて宣傳歌をうたひながら、龍國別、テーリスタン、カーリンスを伴ひ、樹蔭を縫ひて、西へ西へと進み行く。

宇宙の森羅万象は一として、陰陽の水火によつて形成されざる物はない。従つて神人は云ふも更なり、禽獸蟲魚、山川草木に至る迄、何れも言靈の水火を有し、言語を發せざるものはないのである。中臣の袂にも「草の片葉をも言止めて云々の文句あり、古の人は凡て禽獸草木の言語迄も能く諒解したるものなり。

又禽獸は人語を解し、人は又禽獸草木の言葉を能く解する事を得たり。されど世は追々と降り、人の心は佞け曲り、遂に罪惡の塊となり、一切の語を解する能はずる迄、不便極まる人間と墮落し了せたるなり。又同じ人間の中に於ても、國々所々言語の相違するは、第一國魂神の靈魂の關係及風土寒暑の關係に依るものなるが、之を一一聞分け其意を悟る事が出来ぬまでに人間の耳が鈍り來りぬ。幸に言靈學を體得する時は、別に英語とか佛蘭西語、露西亞語などと、せせこましい語學を研究せなくとも、其聲音の色竝に抑揚頓挫等にて悟り得らるる筈なり。従

つて禽獸蟲魚山川草木の言葉も、容易に解し得べきものなり。

例へば無生機物たる三味線を引き鳴らして、いろいろの音律を發し、淨瑠璃、唄などに合はして物を言はしむるに、聞き慣れたる耳には、其音の何を語り居るやを辨別し得るが如し。其他縦笛、横笛、笙、ひちりき、太鼓、鼓に至るまで、僅かに五音、或は七八音を以て、能く其用を達する如く、禽獸蟲魚等の聲音は、其數少しと雖も、我耳を清くして聞く時は、禽獸草木の聲を明かに悟る事が出來得る。例へば、喇叭は僅にタチツテトの五音を以て數多の軍隊を動かす、三味線はパピポポ、タチツテトの十音を以て一切を語り、牛はマミムメモ、馬は八ヒフヘホ、猫はナニヌネノ、犬はワヅウエヲと云ふやうに、各特定の言葉を以て之を補自分の意思を完全に表示し、尚及ばざる所は、目を働かせ體の形容を以て之を補ひ、且つ聲の抑揚頓挫にて、其意思を明かに表示するものなり。

日本人は圓滿清朗なる七十五音を完全に使用し得る高等人種である。之れ全く國魂の秀れたる所以にして、人種として又優等なる所以である。人種に依つては二十四五聲或は三十聲内外より言語を使用し得ざるものあり。而して其聲音は拗



音、濁音、鼻音、半濁音、獸畜音等が混入してゐる。されど神と同じく七十五聲を使用し得る人種も今は全く心の耳塞がり、心の眼閉ぢたれば、到底神諭にある如く、一を聞いて十を悟るが如き、鋭敏なる心の耳目を缺き、百言聞いて僅に一二言を悟り得る位の程度まで耳目活用の能率が低下し、他の動物と殆ど選ぶ所なき迄に到れるなり。實に天地經綸の司宰者たる人として浩歎すべきの至りならずや。

鷹依姫、龍國別、テ、カーの四人は此森林に進み虎、熊、獅子、狼、大蛇、鷲、狐、兔、其外一切の動物の聲音を聞き、能く其意を諒解し、茲に猛獸を役して森の王となり、モールバンド、エルバンドの征服に従事する事となりぬ。併し乍ら古の人は現代の如く、餘り小ざかしき圓滑な辭令を用ゐず、又數萬言を竝べて喋々喃々する必要もなし。それ故アとウとの息にて禽獸草木と能く其意思を交換する事を得たりしなり。

併し乍ら現代人は、到底簡單なる言語にて其意思を諒解する丈の能力なし。故に此口述も現代人の耳に諒解し易からしむる爲、大蛇、熊、鹿、虎、狼、狐、兔、

其他の鳥類に至るまで、現代の人間の言語を以て話したる如く譯して口述せむとす。古事記にも大己貴命、氣多の岬にて因幡の白兔に出會ひ、いろいろと問答し給ふ神文がある如く、鳥獸草木の聲音と雖も、眞の神國魂に返りなば、よく諒解し得らるるものなり。

禽獸草木は今日に至る迄、臃げながら人語を解するに、人間として禽獸草木の聲音を聞く事を得ざるは、實に萬物の靈長たる權威はいづこにありや。斯かる不完全なる五感を以て、いかでか、神の生宮として萬有に安息を與へ、天地經綸の司宰者たる其職責を全うする事を得む。思へば思へば實に遺憾の極みなり。

口述者は外國語を學びし事なく、又横文字を一字も解し得ない。されど各國人の談話を傍に在りて、耳をすませて聞く時は、其意の何たるかを、言靈の原則上、諒解し得らるるなり。此物語も亦古代の土人の言語を所々に羅列し、或は現代の外國語を使用したる所もあり。併し今日の世界の語學は、言靈學上其原則を亂しある爲に、現代人の言語は諒解し難き點多々あり。如何なる國の言語と雖も、今の禽獸草木の如く言靈の原則を誤らざるに於ては、世界共通的に通ずべきが言靈

の妙用、宇宙の眞理なり。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・八・二二 舊六・三〇 松村眞澄録)

## 第二章 猛獸會議 (八九三)

鷹依姫、龍國別の一行は宣傳歌をうたひ乍ら、數百萬年の祕密の籠りたる南岸の森林に進み入る。併し乍ら人跡なき此森林も、思ひの外雜草少く、空はあらゆる大木に蔽はれて、日月の光を見る事甚だ稀であつた。

一本の大木と云へば周圍百丈餘りもあり、高さ數百丈に及び、樹上には猩猩、狻猊、野猿の類群をなし、果物を常食として可なりに安心な生活をつづけ、其種族を益々繁殖させ、至る所に猿の叫び聲は耳をつんざく許り怪しく聞えて居る。二三尺許りの大蜥蜴は時々一行が路を遮り、開闢以來見た事もなき人の姿を見て、驚いて逃げ隠るるもあり、中には飛付き來るもあり、其他異様の爬蟲族、先

を争うて逃げ隠るる音、ザワザワと谷川の水流の如くに聞え来る。此時白毛の兔の一群、大なるは現代の牛の如きもの、ノソノソと一行の前に宣傳歌を尋ねて来り、兩足を前に行儀よく竝べて涙を流し乍ら、

兔「私は此森林に神代の昔より永住致しまする兔の長でムいます。此通り數多の種族を引連れ、あなた様一行の御降りる月の大神様より御示しに預り、ここに謹んでお迎へに参りました。あなたは三五教の宣傳使鷹依姫様、龍國別様の御一行でムいませう。何卒この森林を御踏査下さいまして、吾々の安逸に一生を送り得らるる様、御守りの程偏に願ひ上げ奉ります」

と慇懃に頼み入るにぞ、龍國別は、

「ヤア始めて御目にかかります。あなたは此森林に長らく御住居なさると聞きましたが、大變に險呑な所でムいますなア」

「ハイ御存じの通り、此時雨の森は、其昔吾々共の種族が月の大神様より千代の棲處として與へられたものでムいますが、アダム、エバの靈より發生したる八岐の大蛇の一族を始め惡鬼惡狐の子孫益々跋扈して、遂にはモールバンドやエルバ

ンドの如き怪獸と成り變り、吾々一同のものを餌食と致し、今は殆ど亡ぼされて了ひ、此數百里の大森林の棲處に於て、實に數千頭の影を止むるのみ、實に吾々は悲惨な生活をつづけ、戦々兢兢として、一時の間も安樂に生活を送る事が出来ないのでムいます。加ふるに、虎、狼、獅子、熊、大蛇、鷲などの連中が、常世の國のロツキー山方面より、常世會議のありし後、此森林に逃げ來り、吾等が種族を餌食と致し、暴虐無道の其振舞、實に名状す可らざる慘状でムいます。何卒あなた方の御神力を以て此森林の惡獸、惡蛇、惡鳥を言向和し、動物一切相和し相親しみ、天與の恩恵を永遠に楽しむ様、お執りなしを偏に希ひ奉ります」 〓 兔

は月神を祭る民族の意 〓

「委細承知致した。然らば、是より其方は吾々の先導になつて、第一に猛獸の棲處へ案内致せ。惟神の神法を以て、彼等を善に導き、惡を悔い改めしめ、此森林をして忽ち天國の樂園と化せしめむ。あゝ面白し面白し……母上様、妙なことになつて參りました。サア兔殿、案内召されよ」

「ハイ、早速の御承知、吾々一族は實に蘇生の思ひを致します」

と云ひ乍ら、大兔は數多の團體を率ゐ、鷹依姫一行の前後を警護しつつ森林深く進み行く。

數多の兔に送られて、鷹依姫一行は天を封じて樹てる森林の中を、意氣揚々と半日許り進み行く。此處には稍展開された樹木のなき空地がある。殆ど十里四方の間は餘り太き樹木もなく、針葉樹の小高き丘四方を包み、恰も青垣山の屏風を引廻せし如き安全地帯である。

兔の一族は僅に此地帯を永住處となして生活を續けてゐる。謂はば兔の都である。其殆ど中心に、聖地に於ける桶伏山の如き美はしき岩石を以て自然に造られたる靈場があり、そこには兔の最も尊敬する月の大神の宮が儼然として建てられてある。

此清き宮山を繞る清鮮の水を湛へた廣き湖の邊には、大小無數の鰐わには武人の群ぐんが棲息し、鰐と兔の兩族は互に相提携して天與の恩恵を樂んでゐる。つまつまり此鰐は森林の持主たる兔の眷屬とも云ふべきものにして、兔の國の軍隊の如き用務に従事してゐるのである。

モールバンド、エルバンドの怪獸は兔を食する事を最も好み、日夜其事のみに精神を傾注して居る。されど兔は最早此安全地帯に集まりし事とて、巨大なる肉體を有するモールバンドは、數多の密生したる樹木に遮られて、ここに侵入するを得なくなつて了つた。如何にエルバンドと雖も、アマゾン河の岸より首を伸ばし、ここ迄届かす事は到底出来ない。それ故止むを得ず、餘り好まざる肉ながら虎、狼、熊、獅子等を捕喰ひ、僅かに其餓を凌ぎつつあるのである。

或時モールバンドはエルバンドを使者として、猛獸の集まる森林の都、獅子の巢窟に向つて使ひせしめ、ここに談判を開始する事となつた。其談判の要領は左の通りである。

獅子王「あなたはモールバンド様の御使者エルバンド様、能くこそ御入來下さいました。就いては今日の御用の趣、何卒詳さに御話し下さいませ」

エルバンド「吾々今日使者として獅子王の都へ参りしは、餘の儀では御座らぬ。吾統領のモールバンド様、アマゾン河に數多の眷族を御連れ遊ばし、兔を捉へて常食となし給ふ。吾々も亦、兔を以て最上の美味と致して居るもの、然るに此頃

は兔の影も見せ申さず、甚以て吾々一族は困窮致して居る次第で御座います。就いては獅子王殿に一つの談判があつて、ワザワザここに使者として、エルバンド出張仕りました。其理由とする所は、獅子王の手を以て、熊、虎、狼を使ひ、兔の都に侵入し、彼等を生捕にし、日に數百の兔をモールバンド様に御献上ありたし。然らざれば熊、鹿、虎、狼、止むを得ざれば、獅子の一族をも、手當り次第捕喰ふべしとの嚴命で御座いますれば、速かに否やの御返答を承はりたう御座います」

「これはこれは、何事かと思へば、思ひもよらぬ御仰せ、吾々一族は虎、狼、熊、獅子の區別なく、日夜モールバンド様の部下に捉へられ、日に幾百となく生命を斷たれ、捕喰はれ、實に困憊の極に達して居ります。就ては吾々四足一族は茲に大軍隊を組織し、北岸の森林の同志と相謀り、川を差挾んでモールバンド、エルバンドの軍隊を一匹も残らず殲滅し呉れむと日夜肝膽を碎き、今や協議の眞最中で御座れば、早速に此返答は致し難し。御返事は、追つてアマゾン河の岸に使者を遣はし、御答へ申さむ。此場は一先づ御歸りあらむ事を希望致します」



「然らば是非に及ばぬ。一時も早く協議を遂げ、御返事あらむことを希望致しま  
す」

と云ひ捨て、長大なる巨軀を蛭の如く伸縮させ、のそりのそりと獅子王の都を後  
に、アマゾン河のモールバンドの本陣と聞えたる寢覺の淵を指して歸り行く。  
あとに獅子王は數多の四つ足族を獅子の都に召集し、一大會議を開催する事と  
なりぬ。

獅子王はエルバンドの使者の歸つた後、直ちに使獅子を森林の各處に派遣し、  
熊王、狼王、虎の王、大蛇の頭、鷲の王などを代表者として召集し、獅子王の館  
に於て大會議を開く事となつた。日ならずして各獸の代表者は集まり来る。

山桃の林の下に大會議は開かれた。獅子王は先づ開會の挨拶をなし終つて、  
「モールバンドの使者の齎した申込みに對し、各自の意見を吐露し、最善の方法  
を協議されむ事を望む」

と云ひ乍ら、諄々として一伍一什の經緯を物語れば、茲に熊王は進み出て、手に  
唾し憤然として雄猛びし、巨大なる目を睜りつつ、

□ 皆様、如何で御座いませう。吾々四つ足族は、今日迄互に反噬を逞しうし、優勝劣敗、弱肉強食の戦闘を續けて参りました。處が仁愛深き獅子王様の御威勢と御盡力に依り、互に其範圍を犯さず、熊は熊の團體、狼は狼、豹は豹、大蛇は大蛇、虎は虎と各部落を作り、此森林は漸く無事太平に治まり、辛うじて猿を捕り、兔を捕獲し、吾々獸族は漸く其生命を保つて來たのである。然るに此頃モールバンド、エルバンドの一族、アマゾン河より這ひ上り來り、吾々が部落を犯す事一再ならず、吾種族は夜も枕を高くし安眠する事も出來ない慘状で御座います。然るに何ぞや、惡虐益々甚だしく、日に數百頭の兔を貢せざれば、吾々が種族を捕り喰ふべしとの酷烈なる要求、どうして是が吾々として應じられませうか。吾々は假令種族全滅の厄に遭ふとも、撓まず屈せず一戦を試み、勝敗を決せむ覺悟で御座る。皆様の御考へは如何で御座いますか」

と息も荒々しく述べ立つる。狼王は直ちに口を開き、

□ 熊王様の御意見、實に御尤も至極では御座いますが、どう考へても強者に對する吾々の如き弱者として、戦ふなどとは思ひも寄らぬ拙劣なる策では御座いま

すまいか。常世會議に於て吾祖先は翼をそがれ、最早空中飛行の自由を失ひし吾々四つ足族、如何に獅子奮迅の勢にて攻撃致すとも、暴虎馮河の勇あるとも、豺狼の奸策を弄するとも、到底及び難き議論だと考へます。若かず彼が要求を容れ部下を驅使して兔を捕獲し、モールバンドに日々これを貢ぎ、吾等一族の大難を免れるが、第一の策かと考へます。勝敗の數分かり切つたる此戰鬥に従事するは策の得たるものではありません。皆様如何で御座いませうか」

と首を傾け、前足を腕の如くに組みながら、心配げに述べ立てる。

虎王は腕を組み、髭に露をもたせ、巨眼をクワツツと見開き、言葉も重々しく、  
「吾々の考ふる所に依れば、如何に弱肉強食を恣にするモールバンドなればとて、吾々の種族を殲滅することは出来ずまい。吾々も天地の神の水火を以て生れ、神の精靈の宿りしものなれば、如何に惡虐無道のモールバンドなればとて、妄りに暴威を逞しうし、此森林を吾物顔に占領する事は到底不可能でせう。要するに彼等が如何なる事を申込み來るとも虎耳狼風と聞流し、相手にならず、打棄ておく方が獅子（志士）の本分で御座らう。……熊王殿、豹王殿、大蛇の頭殿、諸君

の御意見は如何で御座りますか」

大蛇の頭「吾々如何に剽悍決死の勇ありとも、モールバンドの一族、完全無缺の

武器を備へ攻来るに於ては到底敵する事は出来ずまい。飽く迄も豺狼の欲を逞

しうし、獅子奮迅の勢を以て猛虎の如く攻め来る敵軍、何程準備は「熊」なく整

ふとも、到底防戦する「豺」も覺束なき吾々の境遇、なまじひに強者に向つて弓

を引くよりは、モールバンドの命に従ひ、兔の都に攻めのぼり、残らずこれを捕

獲し、モールバンドの前に貢物として捧げなば、彼が歡心を買ひ且つ同情を得、

吾等の種族を捕喰ふことを免じて呉れるでせう。弱を以て強に當るは吾々の「虎」

ざる所、一刻も早く兔の都に進撃し、彼等を悉く捕獲して貢物となし、吾等種族

の安全を保つに「鹿」ず、議長獅子王殿、御意見如何がで御座るか」

と詰めよる。獅子王は暫し首を傾け「獅」案にくれてゐたが、やがて頭を擡げ、

大きく唸り乍ら、

「左様で御座る。到底勝算なき敵に向つて戦を挑み、部下の者共を亡されむより

は、弱小なる兔の都に攻め入り彼等を引「虎」へ、戦の危害を除くに若かず。

【鹿】らば諸【窘】と共に時を移さず一族を引率し、兔の都を繞る四邊の山より一齊に攻め入り、【鬼虎】堂々として湖を渡り、兔の王を降服せしめ、一族が犠牲に供さむ」

と憤然として宣示する。一同は獅子王の宣示に返す言葉もなく、直に軍備を整へ數多の部下を引率し、兔の都を指して進撃することとなりぬ。

兔王は斯かる敵軍の襲來せむとは神ならぬ身の知る由もなく、鷹依姫、龍國別、テー、カーの四人の賓客に珍しき物を響應し、數多の部下を集めて舞ひ踊り狂ひつつ四人の旅情を慰めむと全力を盡し居たりき。

(大正一一・八・二二 舊六・三〇 松村眞澄録)

### 第三章 兔の言靈 (八九四)

兔の都にては、一族此處に集まり來り、形ばかりの月の大神の宮の前に、芭蕉

の葉を數多敷き竝べて筵となし、バナナ、林檎、梨、山桃、苺などの果物を數多  
竝べて、鷹依姫の一行を神の如くに敬ひつ、茲に歡迎の宴會を開きたり。  
兔の王は立上がり、恰も天上より天津神の降臨せし如く打喜び、吾等を救ふ王  
者は現れたりと、歌をうたつて祝意を表しぬ。もとより兔の言語なれば、其眞意  
は判然と分り兼ねれども、其動作形容表情と言葉の抑揚頓挫に依つて、大體の意  
味は解さる。

其歌を譯すれば左の如し。

昔の昔の其昔 天に輝く月の大神様の  
恵の露に露ひて アマゾン河の北南  
廣袤千里の森林を 吾等が千代の棲處ぞと  
依さし給ひて永久に 與へ給ひし樂園地  
天津御空の星の如 濱の眞砂の數の如  
吾等が種族は日に月に 生めよ榮えよ育てよと

神かみの恵めぐみの言ことの葉はは

彌いや益ます々ますに幸さちはひて

時しぐれ雨れの森もりを吾われ々われが

玉たまの命いのちの繫つなぎ所しよと

喜よろこび暮くらす折をり柄からに

天あだる足るの彦ひこや胞え場ば姫ひめの

醜しこの魂たまより現あられし

八や岐また大を蛇ろちの成なれの果はて

アあダだムむの靈みたまを受うけつぎし

大を蛇ろちの魂たまはモもーるルるバんド

エえバばの靈みたまを受うけつぎし

惡あく狐この靈みたまはエえルるバんド

さおも恐おそろしるしき惡わる神がみと

生うまれか變かはりてアあマまゾんの

河かはのか上み下しも隈くまもなく

數あまた多たのし子そん孫を生うみうみて

蟠わたかまりつつ吾われ々われが

種しゆぞく族を彼かれ等らがえ餌じ食じきとし

旦あしたにご五ひやく百ゆふ夕べにご五ひやく百に

日ひ々びにせ千んと兔とをと捕とりく喰くらひ

吾われ等らはかな悲ししき今いまのみ身よ

千ち代よのす棲み處かをう失しひし

兔とぞく族いちどう一や同や止むむを得えず

仁じん慈じのふ深かきわ鱈にぞく族に

固かたくま守もられ青あ垣が山やまを

四よ方もにめ繞くらす此この島しまに

清きよけうきみ湖を隔へてつつ

僅わづかにせい生を保たちけり。

さはさりながら吾々は

此湖をうち渡り

鰐の子供に守られて

青垣山を打越えて

さも香しき餌食をば

探ね求めつ行く度に

モールバンドは来らねど

さも恐ろしき獅子熊や

虎狼は云ふも更

醜の大蛇や秃鷲に

貴き命を奪はれて

日々に減り行く吾種族

心淋しき折柄に

天津御空の雲わけて

神の使の神人が

天の河原に船浮べ

アマゾン河の河口に

降り給ひて悠々と

貴き歌をうたはせつ

上り來ませる嬉しさよ

吾等が救ひの神とます

天津御空の月の神

汝が命を遣はして

此苦みを救はむと

降させ給ひしものならむ

思へば思へば有難し

恵の露は草の葉に

浮びて月の御姿



宿らせ給ふたふとさよ  
あゝ惟神々々かむながらかむながら

神の御靈の幸はひて  
此月島は永久にこのつきしまとこしへ

神の守りの彌深く  
榮え榮えて瑞御靈さか さか いやふか みづみたま

神素盞鳴大神の  
惠も開く教の花めぐみ ひら のり はな

紅緑こき交せて  
吾等が赤き心根をくれなゐどり われら あか こころね

神の御前に表白し  
救はせ給へ神司かみ みまへ へうはく すく たま かむつかさ

鷹依姫よ龍國別よ  
御供の神と仕へますたかよりひめ たつくにわけ みとも かみ つか

テーリスタンヤカーリンス  
此四柱の御前にこのよはしら おんまへ

兔一同代表し  
謹み敬ひ願ぎまつるうさぎいちどう だいへう つつし おやま ね

旭は照るとも曇るとも  
月は盈つとも虧くるともあさひ て くも つき み か

假令大地は沈むとも  
モールバンドは猛くともたとへ だいち しづ もーるバンド たけ

虎狼や獅子熊の  
醜の猛びは烈しともとらおほかみ しし くま しこ たけ はげ

なぞや恐れむ吾々は  
救ひの神を得たりけりなぞ おそ われわれ すく かみ ね

守りの王を得たりけり  
喜び勇めわが子供まも わう え 喜び いさ こども

これより後は永久に  
月の社と諸共に

盡きせぬ千代の喜びを  
味はひまつり神國の

其樂しみを味はひて  
此世を造り給ひたる

國治立大神は  
すべての罪を赦しまし

百の災打拂ひ  
此世を洗ひ清めます

神素盞鳴大神の  
御稜威を尊み敬ひて

此世のあらむ極まで  
朝な夕なに神恩を

稱へ奉らむ惟神  
御靈幸はひましませよ

と歌ひ了り、兔の王は四人の前に平伏し、

「誠に不調法な不完全な歌をうたひ、舞曲を演じまして、さぞお困り遊ばしたで

御座いませう」

と耳を打振り打振り、さも慇懃に挨拶をする。鷹依姫は立上り、兔の群に向つて、手を拍ち體を揺り、面白可笑しき身振りしながら、うたひ始めた。

豊葦原の瑞穂國

波に浮べる五大洲

何れの山も海河も

皆大神の御水火より

生れ出でたるものぞかし  
神の宮なる人の身は

云ふも更なり鳥獸  
魚蟲草木に至るまで

國治立大神や  
金勝要大神の

御水火に依りて世の中に  
現れ出でしものなれば

神の御目より見給へば  
何れも尊き貴の御子

恵に隔てあるべきや  
天津日光は人の身も

木草の上も鳥獸  
蟲族までもおし竝べて

光り輝き給ふなり  
天地の間に人となり

獸となりて生るるも  
皆大神の御心ぞ

神の慈眼に見給へば  
尊き卑きの區別なし

吾も神の子汝も又  
神の尊き貴の御子

御子と御子とは睦び合ひ  
弱きを助け強きをば

なだめすかして睦まじく

此世を渡り祖神の

大慈悲心に酬ゆべし

モールバンドは云ふも更

虎狼や獅子熊の

猛き獸に至るまで

神の授けし言靈の

恵の水火の幸はひば

服従ひ來らむ事あらむ

あゝ惟神々々

神の御子と生れたる

汝の一族免ども

天津神たち國津神

國魂神の御恵を

朝な夕なに嬉しみて

清き此世を送りつつ

凡ての曲に打勝ちて

月の御神の依さします

汝が天職を盡すべし

われも一度は村肝の

心曇りて豹狼の

獸に劣らぬ醜の道

朝な夕なに辿りたる

人の衣を被りたる

モールバンドとなりたれど

尊き神の御光りに

照らされ今は執着の

雲霧晴れて惟神

神かみの身み魂たまとなりなりにけり  
 三千さんぜん世界せかいの梅うめの花はな  
 一度いちどに開ひらく時とき來きたり  
 神かみの仕しく組みか白しら波なみの  
 上うへ漕こぎ渡わたり漸やつやうに  
 高たかさ砂さ島じまの土つちを踏ふみ  
 アリナアリナの瀧たきに身みを淨きよめ  
 再ふたび玉たまの執し着ぢやくに  
 心こころを濁にごり曇くもらせつ  
 慈じ愛あいの答こたに叩たたかれて  
 漸やつやく神かみに立たち歸かへり  
 大おほ海うな原ばらを乗のり切きりて  
 廣くわう袤ぼう千せん里り果はてしなき  
 やつと此こ處こまで着つきにけり  
 廣くわう袤ぼう千せん里り果はてしなき  
 時しぐれ雨もりの森もりの此この靈れい地ち  
 いや永とこ久しへに鎮しづまりて  
 汝なれが一族いちぞく云いふも更さら  
 虎とら狼ほかみや獅し子くま熊の  
 大をろ蛇ち猩やう々じやう禿はげ鷲わしの  
 醜しこの魔ま神がみを言こと靈たまの  
 清きよき御み水い火きに服まつ従ろはせ  
 モールバモールバンドンドに至いたる迄まで  
 惡あく虐ぎやく無む道だうの行おこなひを  
 改あらためしめて神かみ國くにの  
 五み六ろく七しちの神かみ世よを建けん設せつし  
 所あ在ら生ゆる物いき親ものししたみて  
 常とこ世よの春はるを樂たのまむ

あゝ惟神々々かむながらかむながら 御靈幸はひましまして

鷹依姫を始めとしたかよりひめ はじ 龍國別やテー、カーのたつくにわけ

神の司を悉くかみ つかさ ことごと 皇大神の御心にすめおほかみ みこころ

叶はせ給へ天津神かな たま あまつかみ 百千萬の神等のもちよろづ かみたち

御前に祈り奉るみまへ いの たてまつ 旭は照るとも曇るともあさひ て くも

月は盈つとも虧くるともつき み か 高砂島は亡ぶともたかさごしま ほろ

アマゾン河は涸くともがは がわ 時雨の森は焼けるともしぐれ もり や

神に従ふ眞心はかみ したが まこころ 幾千代迄も變らまじいくちよまで かは

あゝ惟神々々かむながらかむながら 神の御靈の幸はひてかみ みたま さち

これらの兔のおとなしくうさぎ 服従ひまつりし其如くまつろ そのごと

猛獸毒蛇を始めとしまうじゅうどくじや はじ モールバンドやエルバンド

其外百の獸をばそのほかもも けもの 尊き神の言靈にたふと かみ ことたま

言向け和せ給へかしことむ やは たま 黄金の玉は見えずともこがね たま み

神に受け受けたる吾魂はかみ う わがたま 金剛不壞の如意寶珠こんがうふゑ によいほつしゆ

紫玉むらさきたまか黄金わうごんの 玉たまの如ごとくに照てり渡わたる

此この御威徳ごゐとくをどこ迄までも 發揮はつきし奉まつりて御惠みめぐみの

露つゆおく間まなく禽獸きんじうの 上うへに注そそがせ給たまへかし

神かみの惠めぐみに目醒めざめたる 鷹たか依より姫ひめの此願このねがひ

完うま美らに委曲つばらに聞きし召めせ あゝ惟かむ神な々々ながらかむながら

御靈みたま幸さちはひましませよ

と歌うたひ終をはりて座ざに着つけば、兔うさぎの王わうを始はじめとし、湖みづうみより此言靈歌このことたまうたを聞きいて喜よひこび勇いさみ  
集あつまり來きたれる鰐わにの群むれは、嬉うれしげに耳みみを澄すませて聞きき終をはり感かん謝しゃするのみ。

(大正一一・八・二二 舊六・三〇 松村眞澄録)

第四章 鰐わにの言靈ことたま (八九五)

し且つ歌ふ。  
鰐の頭はツカツカと四人の前に現れ來り、さも嬉しげに頭を垂れ感謝の意を表

仰げば尊し天地の神の恵は目のあたり

天の河原に棹さしてアマゾン河の河口に

降り給ひし神の御子鰐の一族喜びて

赤き心を捧げつつ茲に現はれ參る來り

祝ぎ仕へ奉るあゝ惟神々々

尊き神の御恵吾等が上に降りけり

吾等のすさむ魂も一度に開く木の花の

薫るが如く榮えけり鷹依姫の神様よ

龍國別の神様よはるばる此處に天降りまし

吾等が王と仕へたる兔の君の鎮まれる

靈地に現れ給ひしは天地の神の御恵みか



譬方なき喜びに  
この湖水を包みたる

青垣山の草木迄  
色美しく生々と

甦りたる如き思ひなり  
吾等は月の大神の

貴の御子なる兔族  
尊み敬ひ朝夕に

心を盡し身を盡し  
モールバンドやエルバンド

虎狼や獅子熊の  
襲ひ來れる災禍を

防ぎて守る永の年  
さはさりながら吾々は

神の御水火を受けながら  
昔の罪の消えやらず

げに淺閒しき此境遇  
如何に心を盡すとも

神の御水火の言靈を  
照らす事さへ白波の

中に漂ふ悲しさに  
月日を送る甲斐もなく

これの湖邊を棲處とし  
十里四方の靈地をば

僅に守る計りなり  
さはさりながら吾々が

これの湖邊に棲む間は  
如何なる猛き獸類も

容易ようついに犯をかし得えざるべし あゝさりながらさりながら

猛獸まうじうどくじや毒蛇うまと生うれたる 彼のかれ身魂みたまは憐あはれにも

神かみの御子みこにて御子みこならず 優勝いうしよつれつぱい劣敗つみ罪重かさね

弱肉じやくにく強食きやうじやく日につきに 行おこなひ續つづけ生命せいめいを

僅わづかに保たもてる憐あはれさよ あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

神かみの御靈みたまの幸さちはひて 天あめが下したなる生物いきものは

互たがひに愛あいし助たすけ合あひ 争あらそひ猛たけぶ事こともなく

神かみの惠めぐみを平等びびうてうに 受うけて身魂みたまを磨みがき上あげ

賤いやしき殻からを脱ぬぎすてて 再ふたび魂たまは天國てんごくの

神かみの御許みもとに立歸たちかへり 萬よろづの物ものの長をさとして

權威けんゐのこもる言靈ことたまを 自由じいう自在じざいに使用しようする

神かみとなさしめ給たまへかし 鷹たか依より姫ひめの神司かむつかさ

龍國たつくに別のわけ御前おんまへに 鱈わに族ぞく一いち同どうを代だい表へうし

清きよく磨みがきし言靈ことたまの 惠めぐみの光ひかりに天地あめつちの

すべての生物救ひませ  
あゝ惟神々々  
神の司の御前に  
誠の限りを現して  
慎み敬ひ願ぎ奉る

と唄ひ終り、堅牢なる甲を以て包まれたる長大なる身體を左右に揺りながら、満足の意を表し、數多の鰐と共に前後左右に舞ひ踊り、歡迎の意を示したり。龍國別は立上り、兔と鰐の愛らしき群に向つて、さも嬉しげに歌をうたふ。

天地の水火をうけつぎて  
生れ出でたる神司

三五教の宣傳使  
鷹依姫の體を借り

肉の宮をば建造し  
生れ出でたる神司

龍國別は今此處に  
大空傳ひ照り渡る

月大神の宮の前  
貴の神徳拜しつ

兔や鰐のともがらに  
稜威の言靈宣り上げて

心の丈を宣べ傳ふ

あゝ惟神々々

神の恵を蒙りて

稜威の聖地と聞えたる

綾の高天に聳り立つ

錦の宮を後にして

黄金の玉の所在をば

探ねむものと高砂の

島に渡りていろいと

心の駒のはやるまに

醜の企みを立てながら

再び神の御聲に

眼をさまして美はしき

元津身魂となりけり

神の恵は隈もなく

青人草は云ふも更

鳥獸や魚に蟲

草木の片葉に至るまで

恵の露を垂れ給ふ

公平無私の神心

漸う悟り今茲に

現はれ來る吾々は

知らず識らずに大神の

仕組の絲に操られ

進み來りし者ならむ

誠の神の御使と

定められたる四人連れ

今は汝が親となり

兄あにともなりて天地あめつちの 神かみの恵めぐみをこまやかに

時雨しぐれの森もりの果はてまでも 隈くまなく廣ひろめ御恵みめぐみの

雨降あめふり注そそぐ樂園らくゑんと 堅磐かきはときは常磐まもに守まもるべし

あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々 神かみの御靈みたまに生うまれたる

兔うさぎや鰐わにの一族いちぞくよ 必かならず歎なげく事こと勿なれ

吾等われら四人よにんの神人しんじんが 此こゝに現あらはれ來きた上うへは

モールバンドは云いふも更さら 如何いかなる猛たけき獸類けだものも

神かみの恵めぐみの御水みいき火いきより 生うまれ出いでたる言靈ことたまに

言向ことむけ和やはし敵てきもなく 争あらそひもなく永とこしへ久へに

平和へいわの森もりとなさしめむ あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

神かみの御水みいき火いきに生うまれたる 吾等われらを始はじめ汝なれが群むれ

假令たとへてんち天地たへんちは變かはるとも 尊たふとき深ふかき御恵みめぐみを

一日ひとひも忘わすれず朝夕あさゆふに 神かみの御前みまへにひれ伏ふして

其神德そのしんとくを稱たたへかし 神かみは吾等われらと俱ともにあり

神は汝らの身を守る

神の恵に開かれし

天が下なる生物は

假令如何なる曲者も

いかでか恐るる事あらむ

心を清め身を浄め

神のまにまに眞心を

盡せよ盡せ諸々よ

龍國別が改めて

汝等が群に宣り傳ふ

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

テーリスタンは面白き歌をうたつて興を添ふ。

鷹依姫や龍國別の

教の司の御後に

カーリンスと諸共に

廣袤千里の荒野原

草を分けつつ進み來て

アルの港に安着し

大海原を船に乗り

渡つて來る折柄に

俄に烈しき荒風に

浪立ち狂ひ鷹依姫は

眞逆様に海中へ ザンプとばかり陥りて

姿見えなくなつて来た 孝心深き龍國別は

吾身を忘れて海中に 飛込み姿を失ひぬ

テ、カー二人は驚いて 最早叶はぬ百年目

殉死なさむと意を決し 一イ二ウ三ツで飛込めば

後白浪に呑まれつつ 龍宮海を探険と

思ふた事的外れ 龜の背中に乗せられて

ゼムの港に漂着し 天祥山に立向ひ

モールバンドに出會し 吾言靈の神力に

「オツトドツコイ」こら違つた 鷹依姫の言靈に

言向け和し荒男 二人の命を救ひつつ

天祥山の谷を越え 果てしも知らぬ荒野原

涼しき風に送られて チンの港に安着し

船を造りてアマゾンの 河口さして進み来る

音に聞えしモールバンド  
エルバンドの此處彼處

怪しき頭を擡げつつ  
吾等一行の顔を見て

何が怖いかならねども  
水勢強き河の瀬に

姿を隠し失せにける  
あゝ惟神々々

神の恵を蒙りて  
教司の神力に

恐れ戦き逃げたるか  
何は兔もあれアマゾンの

河の岸をば攀上り  
此森中に來て見れば

幾千年とも限りなき  
年の老いたる兔の王

數多の眷族引きつれて  
吾等一行を慇懃に

迎へに來たる嬉しさよ  
廣袤千里の森林の

その中心に斯の如  
聖き靈地のあらむとは

夢にも悟り得ざりしが  
豈計らむや天傳ふ

空に輝く月の神  
形計りの宮居をば  
此靈場に鎮祭し

清けき水を繞らせる



兔うさぎの王わうの一族いちぞくが 朝あさな夕ゆふなに眞心まごころを

捧ささげて祈いのるゆかしさよ あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

神かみの宮居みやゐと生うまれたる 人ひとは尚なほさら更かみ神かみの道みち

清きよく守まもりて天地あめつちの 深ふかき恵めぐみを感かん謝しやしつ

皇すめ大神おほかみの御心みこころに 叶かなへ奉まつらであるべきや

いよいよ茲ここに三五あななひの 神かみの司つかさと現あらはれて

假令たとへけもの獸いと云いひながら 其源そのなもとを尋たづぬれば

何いづれも同おなじ神かみの御子みこ 救すくひまつらでおくべきか

兔うさぎの群むれよ鰐わにの群むれ 必かならず心こころを惱なやめまじ

鷹たか依より姫ひめの一行いっかうが 現あらはれ來きたりし上うへからは

如何いかなる魔神まがみの災わざはひも 旭あさひに露つゆの消きゆる如ごと

拂はらひ清きよめて禍わざはひの 根ねを絶たち神かみの御惠みめぐみの

露つゆに露つるほふ花園はなぞのと 開ひらき守まもらむ惟かむながら神かみ

神かみの御稜威みいづを嬉うれしみて これの聖地せいちを能よく守まもれ

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましませよ』みたまさち

とうたひ終り、社の前に端坐し、神恩を感謝し、且つ一時も早く此森林の災を除  
き、再び綾の聖地に歸し給へと祈願なしける。惟神靈幸倍坐世。かむながらたまちはへませ

(大正一一・八・二二 舊六・三〇 松村眞澄録)

## 第五章 琉球の光りゅうきゅう ひかり (八九六)

カーリンスは三人の宣傳使の歌を聞き、吾も亦歌をうたひ、兔、鰐の一族に對  
し、巾を利かさねばなるまいと思つたか、直に立上り、妙な手附をして踊りなが  
ら、歌ひ始むる。

此處は名に負ふハルの國ここのこ な おふ ハるのくに

アマゾン河に沿ひて樹てるがは そ た

大森林の時雨の森と人も言ふ モールバンドやエルバンド

其外百の獣たち 堅城鐵壁千代の棲處と

天日に怖ぢず地に憚らず 月の光に恐れず

自由自在に 咆哮怒號の魔窟ヶ原

優勝劣敗 弱肉強食の修羅の巷を

數百萬年の昔より 世界の祕密國として

汝が一族に 與へられたる此森よ

森の主は兔の王と 誇りし夢も何時しか消えて

今は惡魔の 棲處と成り果てぬ

變れば變る現世の 例に洩れぬ兔の身の上

鱶一族の淋しき生活 廣袤千里の森林に

十里四方の地點を選び 要害堅固の鐵城と

頼みて暮す靈場も 今は危くなりけり

八岐の大蛇醜狐 曲鬼共の靈の裔

激浪<sup>げきろう</sup>猛<sup>たけ</sup>る奔流<sup>ほんりゅう</sup>の深<sup>ふか</sup>き河瀨<sup>かはせ</sup>に身<sup>み</sup>を潛<sup>ひそ</sup>め

汝<sup>なれ</sup>が一族<sup>いちぞく</sup>悉<sup>ことごと</sup>く命<sup>いのち</sup>の綱<sup>つな</sup>の餌食<sup>えじき</sup>にし

根絶<sup>こんぜつ</sup>せむと附<sup>つ</sup>け狙<sup>ねら</sup>ふモールバンドやエルバンド

斯<sup>か</sup>かる仇敵<sup>かたき</sup>のある中<sup>なか</sup>に虎狼<sup>とらおほかみ</sup>や獅子<sup>しし</sup>に熊<sup>くま</sup>

大蛇<sup>をろち</sup>禿<sup>はげ</sup>驚<sup>わし</sup>猿<sup>さる</sup>の群<sup>むれ</sup>汝<sup>なれ</sup>が一族<sup>いちぞく</sup>狙<sup>ねら</sup>ひつつ

眼<sup>まなこ</sup>を配<sup>くば</sup>る時<sup>とき</sup>もあれ國<sup>くに</sup>治立<sup>はるたち</sup>大神<sup>のおほかみ</sup>の

守<sup>まも</sup>り給<sup>たま</sup>へる三五<sup>あななひ</sup>の神<sup>かみ</sup>の司<sup>つかさ</sup>鷹<sup>たか</sup>依<sup>より</sup>姫<sup>ひめ</sup>を始<sup>はじ</sup>めとし

龍<sup>たつ</sup>國<sup>くに</sup>別<sup>に</sup>の宣<sup>せん</sup>傳<sup>でん</sup>使<sup>し</sup>テーリスタンやカーリンス

四<sup>よ</sup>人<sup>たり</sup>の貴<sup>うづ</sup>の神<sup>かみ</sup>の子<sup>こ</sup>が救<sup>すく</sup>ひの神<sup>かみ</sup>と現<sup>あら</sup>はれて

此<sup>こ</sup>處<sup>こ</sup>まで降<sup>くだ</sup>り來<sup>きた</sup>りしは枯<sup>かれ</sup>木<sup>き</sup>に花<sup>はな</sup>の咲<sup>さ</sup>きしが如<sup>ごと</sup>く

大<sup>たい</sup>旱<sup>かん</sup>に雨<sup>あめ</sup>を得<sup>え</sup>たるが如<sup>ごと</sup>くなるべし勇<sup>いさ</sup>み喜<sup>よろこ</sup>べ免<sup>まひ</sup>よ鰐<sup>わに</sup>よ

吾<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>は是<sup>これ</sup>よりハルの國<sup>くに</sup>アマゾン河<sup>が</sup>の森<sup>しん</sup>林<sup>りん</sup>を

神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>に言<sup>こと</sup>向<sup>む</sup>け和<sup>やは</sup>し尚<sup>なほ</sup>も進<sup>すす</sup>んで珍<sup>うづ</sup>の國<sup>くに</sup>

旭<sup>あさひ</sup>のテルヤヒルの國<sup>くに</sup>カルの國<sup>くに</sup>まで天<sup>あま</sup>降<sup>くだ</sup>り

八岐大蛇の一族を  
言向け和し神の世の

畏き清き政事  
布き施すは目のあたり

假令悪神アマゾンの  
河底深く潜むとも

猛き獸の徒に  
汝が群をば攻むるとも

吾等が此處に來りし限り  
ビクともさせぬ神力を

固く信じて朝夕に  
喜び勇み神の前

瑞の御靈と現れませる  
月の御神の御前は

云ふも更なり國魂の  
神と現れます龍世の姫を

厚く祀れよ敬へよ  
吾も神の子亦汝も

同じく神の御子なれば  
何の隔てのあるべきや

神は萬物一切に  
平等愛を垂れ給ふ

あゝ惟神々々  
兔の都に現はれて

心も固き鰐の群  
集まり守る聖場に

三五教の神の國  
堅磐常磐に限りなく

基を建つる頼もしさ あゝ惟神々々

神の恵を嬉しみて 兔や鰐の群等よ

喜び勇め神の前 森の笏の響くまで

歌へよ祈れ神の恩 あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

是より鷹依姫外三人は數多の兔を使嗾し、兔の都の王となつて、殆ど一年の日

子を此別世界に楽しく面白く送りたり。

或夜、月皎々と光りを湖面に投ぐる折しも、四方の丘の上より、一齊に「ウー

ウー」と咆哮怒號突喊の聲、耳も引裂くるばかり聞え來りぬ。兔の王は驚きて鷹

依姫の前に走り來り、

「鷹依姫様に申し上げます。只今四方の山々を取圍み、虎、狼、獅子、大蛇、熊王、

數多の一族を呼び集め、雲霞のごとく此靈地を占領し、吾等が部下を捉へむと勢

猛く攻め寄せました。鰐の頭は數多の着族を呼びあつめ、死力を盡して鬪つて居

るでは御座いませうが、何を云つても目に餘る大軍、容易に撃退することは不可  
能なれば、何とか御神力を以て彼等寄せ来る魔軍を言向け和し給はむ事を、偏に  
一族に代り御願ひ申上げます」

と慌ただしく息を喘ませ頼み入る。鷹依姫はウツラウツラ眠りつつありしが、忽ち  
身を起し、月の大神を祀りたる最も高き地點に登り、四邊をキツと見詰むれば、  
四方を包みし青垣山の彼方此方に炬火の光煌々と輝き、咆哮怒號の聲、萬雷の一  
時に聞ゆる如く、物凄さ刻々に激烈となり来る。

鷹依姫は直に拍手しながら天津祝詞を奏上し、天地に向つて言靈を宣り上げた  
り。

天津神等八百萬

國津神等八百萬

國魂神を始めとし

取分け此世を造らしし

國治立大御神

豊國姫大御神

天照らしませ大御神

神素盞鳴大神の

貴の御前に三五の神の司と任けられし

鷹依姫が眞心をこめて祈りを捧げます

あゝ大神よ大神よ高砂島のハルの國

アマゾン河の兩岸に幾萬年の星霜を

重ねて樹てる大森林中に尊き此靈地

千代の棲處と定めつつ身魂も清く美はしき

兔の群や鰐の群いや永久に棲居して

神の恵を喜びつつ天傳ひます月の神

朝な夕なに伏し拜み天地の恵を感謝する

尊き心を憐みて寄せ來る魔神を大神の

稜威の御水火に吹き拂ひ安全地帯となし給へ

あゝ惟神々々神の恵に包まれし

兔の都の此聖地千代も八千代も永久に

曲津の神の一指だも觸るる事なく恙なく



常世の春のいつまでも

喜び勇みの花咲かせ

これの聖地を元として

時雨の森に棲ひたる

猛き獣や大蛇まで

神の恵に漏るるなく

救はせ給へ惟神

神の御前に願ぎ奉る

旭は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

敵の勢猛くとも

神より受けし言靈の

吾等四人が御稜威をば

天津御空の日の如く

照らさせ給ひて功績を

千代に八千代に永久に

建てさせ給へよ惟神

神の御前にひれ伏して

言靈稱へ奉る

斯く歌ふ折しも、西南の隅に當つて、屏風山脈の最高地点、帽子ヶ嶽の方面より、二つの火光、サーチライトの如く輝き来り、四方を圍みし魔軍は光りに打たれて聲を秘め、爪を隠し、牙を縮め、眼を塞ぎ、大地にカツパとひれ伏して、震

ひ戦<sup>きの</sup>き居<sup>ゐ</sup>たりける。

龍國<sup>たつくに</sup>別<sup>わけ</sup>は立<sup>たちあ</sup>上<sup>が</sup>り、火光<sup>くわくわう</sup>に向<sup>むか</sup>つて再<sup>さい</sup>拜<sup>はい</sup>し、拍<sup>はく</sup>手<sup>しゅ</sup>しながら歌<sup>うた</sup>ふ。

青垣<sup>あそがき</sup>山<sup>やま</sup>を繞<sup>めぐ</sup>らせる これの聖<sup>せい</sup>地<sup>ち</sup>に永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>に

棲<sup>すま</sup>ひなれたる兔<sup>うさぎ</sup>の子<sup>こ</sup>等<sup>ら</sup>が 魔<sup>ま</sup>神<sup>が</sup>の災<sup>わざは</sup>遁<sup>はめ</sup>れむと

朝<sup>あさ</sup>な夕<sup>ゆふ</sup>なに月<sup>つき</sup>の神<sup>かみ</sup> 齋<sup>いつ</sup>きまつりて誠<sup>まご</sup>心<sup>ころ</sup>の

限<sup>かぎ</sup>りを盡<sup>つく</sup>し仕<sup>つか</sup>へ居<sup>ゐ</sup>る 其<sup>その</sup>誠<sup>まご</sup>心<sup>ころ</sup>に同<sup>どう</sup>情<sup>じやう</sup>し

八<sup>や</sup>尋<sup>ひろ</sup>の鰐<sup>わに</sup>は湖<sup>うみ</sup>の邊<sup>べ</sup>に 集<sup>あつ</sup>まり來<sup>きた</sup>りて夜<sup>よる</sup>晝<sup>ひる</sup>の

區<sup>く</sup>別<sup>べつ</sup>も知<sup>し</sup>らず聖<sup>せい</sup>場<sup>ぢやう</sup>を 守<sup>まも</sup>り居<sup>ゐ</sup>るこそ畏<sup>かしこ</sup>けれ

時<sup>とき</sup>しもあれや三<sup>あ</sup>五<sup>な</sup>の 道<sup>みち</sup>を傳<sup>つた</sup>ふる神<sup>かむづ</sup>司<sup>かさ</sup>

自<sup>おの</sup>轉<sup>ころ</sup>倒<sup>じま</sup>島<sup>ま</sup>を後<sup>あと</sup>にして 現<sup>あら</sup>はれ來<sup>きた</sup>る吾<sup>われ</sup>々<sup>われ</sup>が

一<sup>いつ</sup>行<sup>かう</sup>四<sup>よ</sup>人<sup>にん</sup>は恙<sup>つつが</sup>なく 神<sup>かみ</sup>の仕<sup>し</sup>組<sup>ぐみ</sup>の經<sup>たて</sup>絲<sup>いと</sup>に

引<sup>ひ</sup>かれて此<sup>こ</sup>處<sup>こ</sup>に來<sup>き</sup>て見<sup>み</sup>れば 兔<sup>うさぎ</sup>の都<sup>みやこ</sup>は永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>に

八<sup>や</sup>尋<sup>ひろ</sup>の鰐<sup>わに</sup>に守<sup>まも</sup>られて 天<sup>てん</sup>國<sup>こく</sup>淨<sup>じやう</sup>土<sup>とど</sup>を目<sup>ま</sup>のあたり

見るが如くに榮えけり  
 見るが如くに榮えけり  
 神の恵と嬉しみて  
 神の恵と嬉しみて  
 禽獸蟲魚の端までも  
 禽獸蟲魚の端までも  
 信仰ひまつりて王となり  
 信仰ひまつりて王となり  
 神の恵を間配りつ  
 神の恵を間配りつ  
 山を踏み越え攻め来る  
 山を踏み越え攻め来る  
 大蛇の靈諸共に  
 大蛇の靈諸共に  
 免や鰐の一族を  
 免や鰐の一族を  
 其災害を遁れむと  
 其災害を遁れむと  
 稜威の祝詞を奏上し  
 稜威の祝詞を奏上し  
 然るに又もや四方の山  
 然るに又もや四方の山  
 雲霞の如く攻め來り  
 雲霞の如く攻め來り  
 息まき來る物凄さ  
 息まき來る物凄さ  
 心の限りを盡しつ  
 心の限りを盡しつ  
 吾等はここに大神の  
 吾等はここに大神の  
 恵み給へる御心を  
 恵み給へる御心を  
 免や鰐の一族に  
 免や鰐の一族に  
 守る折しも青垣の  
 守る折しも青垣の  
 虎狼や獅子熊や  
 虎狼や獅子熊や  
 これの靈地を蹂躪し  
 これの靈地を蹂躪し  
 滅亡させむと迫り來る  
 滅亡させむと迫り來る  
 朝な夕なに言靈の  
 朝な夕なに言靈の  
 漸く無事に來りけり  
 漸く無事に來りけり  
 此聖場を奪はむと  
 此聖場を奪はむと  
 吾等四人は村肝の  
 吾等四人は村肝の  
 暗祈黙禱やや暫し  
 暗祈黙禱やや暫し

勤むる折しも西北の

空を隔てし屏風山

帽子ヶ嶽の頂上より

琉と球との靈光は

電火の如く輝きて

魔神の咆哮一時に

跡形もなく止みにけり

あゝ惟神々々

如何なる神の御救ひか

如何なる人の救援か

げに有難き今日の宵

龍國別は謹みて

皇大神の御前に

心を清め身を淨め

遙に感謝し奉る

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

斯く感謝の言靈を宣り上げ、再び月の大神の神前に向つて拍手を終り、兔の王に一先づ安堵すべき事を宣示した。兔の王は喜び勇んで此旨を部下に傳達せり。

鱈の頭此處に現はれ來り、大に勇みて、斯く天祐の現はれ來る限りは、吾等は湖邊に陣を取り、虎、狼、獅子、熊、大

蛇の群、假令幾百萬襲ひ來るとも、これの湖水は一步も渡らせじ、御安心あれ兔の王よ」

と勇み立ち、帽子ケ嶽より輝き來る靈光に向つて感謝し、一同は歡聲を擧げて天祐を祝し、其夜は無事に明かす事とはなりぬ。

(大正一一・八・二二 舊六・三〇 松村眞澄録)

## 第六章 獅子粉塵(八九七)

兔の王の側近く仕へたる左守の位置にある大兔は、立上つて感謝の意を表し、  
又もやうたひ始むる。

□ 暗夜を照らす琉の玉 吾等を救ふ球の玉  
二つの玉は大空の 月日の如く輝きぬ

青くしほみし吾々のあを 曇りし顔も忽ちにくも かほ たちま  
 二つの玉の御威光にふた たま ごみくわう 喜び榮え輝きぬよろこ さか かがや  
 あゝ惟神々々かむながらかむながら 神の救ひか神人のかみ すく しんじん  
 吾等を救ふ真心のわれら すく まごころ 魂の光の現はれかたま ひかり あら  
 南と北に立竝ぶみなみ きた たちなら 屏風ヶ峰の山脈にびやうぶがみね やまなみ  
 雲を壓して聳え立つくも あつ そび た 帽子ヶ嶽の頂上よりぼうしがだけ ちやうじやう  
 瑞の御霊の神司みづ みたま かむつかさ 言依別の大教主ことよりわけ だいけうしゆ  
 國依別の眞人がくによりわけ まさびと 琉と球との神力をりう きう しんりき  
 發揮し給ひて吾々がはつき たま われわれ 此苦しみを詳さにこのくる まづ  
 救ひ給ひし事の由すく たま こと よし 月大神の御前につきおほかみ おんまへ  
 額づく折しも示されぬぬか をり しめ いよいよ吾等は天地のわれら あめつち  
 神の教を相守りかみ をしへ あひまも 互に他をば犯さずにたがひ た をか  
 睦び親しみ皇神のむつ した すめかみ 大慈大悲の御心にだいじ だいひ みごころ  
 叶へまつらであるべきやかな 皇大神の任けのまにすめおほかみ ま

百の艱みを凌ぎつつ

心の岩戸を打開けて

遙々此處に來りまし

吾等が救ひの神となり

百の艱みを科戸邊の

風に隈なく吹拂ひ

アマゾン河の急流に

流し給ひし有難さ

神徳高き鷹依姫の

貴の命の神司

龍國別を始めとし

心の色もさやさやに

テーリスタンの眞人よ

森に茂れる雑草を

カーリンスなる神司

茲に四柱竝ばして

時雨の森の中心地

十里四方の靈場に

降り給ひて湖の

清き泉の御教を

開き給へる尊さよ

あゝ惟神々々

神の御徳を蒙りて

吾等も早く執着の

衣を脱いで天津國

神の御側に參る詣で

幸ある人と生れ來て

青人草は云ふも更

禽獸蟲魚の端までも

三五教の御教に

漏れなく落ちなく救ひ上げ 功を樹てて神の子と

清く仕へむ惟神 神の御前に願ぎまつる

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も現し世は 直日に見直し聞直し

宣り直しませ天津神 國魂神の御前に

兔一同を代表し 救ひの御手の一時も

早く降らせ給ひまし 獸とおちし身魂をば

救はせ給へ惟神 神かけ祈り奉る

旭は照るとも曇るとも 假令天地は變るとも

月は盈つとも虧くるとも おのが身魂のある限り

皇大神や世の爲に 心を清めて三五の

大道に仕へ奉りなむ 救はせ給へ天津神

恵み給へよ國津神

國魂神の龍世姫



御前みまへに願ねがひ奉たてまつる　あゝ惟かむながらかむながら神々々  
御靈みたま幸さちはひましませよ〃

斯かかる所ところへ兔うさぎの一群いちぐん、鰐わにの背せに乗のせられ、氣息きそくえんえん奄々として歸かへり來きたるあり。見みれば四五しごの兔うさぎは手てを咬かまれ、傷きずつけられ、腹はらをえぐられ、殆ほとんど瀕ひんし死しの状じやう態たいに陥おちいれり。之これを見みるより龍國たつくにわけ別たちまは忽そち側そばに寄より添そひ、天あまの數かず歌うたを聲こゑ高たかく歌うたひ上あげながら、右みぎの手てを伸のべて各かくじ自その傷きず所しよを撫なでさすり、懇ねんごろに勞いたはり且かつ天あまつ津つ祝のり詞とを奏そうじやう上し、一刻こくも早はやく傷きず所しよの痛いたみを止とどめさせ給たまへと、暗あん祈き默もく禱たうを續つづけたるに、不ふ思し議ぎなるかな、神しん德とく忽たちまち現あらはれて四五しごの兔うさぎは一いつ齊せいに痛いたみ鎮しづまり、疵きず口ぐちは見みる間まに癒いえにける。兔うさぎは跪ひざまづいて、龍國たつくにわけ別かんしやに感い謝へうの意いを表なみだ涙なを流ながして俯うつ伏ぶせり。

兔うさぎの王わうは一いち同どうに向むかひ、一いつ刻こくも早はやく遭さう難なんの顛てん末まつを言ごん上じやうせよと迫せまれば、其その中なかにて最もつとも大だいなる兔うさぎは、兔王うさぎわうに向むかひ、前まへ膝ひざをつき、詳つづさに戰せん況きやうを物もの語がたる。

申まをすも詮せんなき事ことながら

吾われ々われは一行いつかう五十ごじふの兄きやう弟だと共ともに

ターリスの峰を越え 獅子王の棲處近き

アラスの森に進まむと 峻しき坂を登る折しも

俄に聞ゆる猛獸隊の唸り聲 驚破一大事と

四邊の木蔭に身を忍び 様子を窺ふ時もあれ

現はれ出でたる熊の群 吾等が一隊に向つて

勢猛く攻め來り 強力に任せて

或は生首引きぬき 手足をもぎ取り

或は捕虜となし 山のあなたに引立てて行く

吾等はもとより 強力なる熊の群に向つて

對抗するの力もなく 負傷をしながらも逃げまはる

今や吾等は 熊の爪牙にかかりて 眩きばかりの靈光

亡びむとする時しもあれ 鏡の如く射照らし給へば

帽子ヶ嶽の方面より 熊の一隊も眼眩みて忽ちに

流石強力無雙の 熊の一隊も眼眩みて忽ちに

其場に倒れて伏しました 此機を窺ひ吾々一隊のもの共は

命カラガラ湖の 畔に漸く逃げ歸り

湖邊を守る鰐共に 救はれ此處に歸りました

此戦況を王様に 完全に委曲に申上げ

敵に向つて膺懲の 戦を起し悪神の

心を改め以後は必ず無謀の戦を 起さざらしめむ事の用意を

遊ばされたしと 心計りは張弓の

思ひ迫つて歸りました しかるに尊や有難や

日頃尊み仕へたる 三五教の神司

龍國別の神様に 危き命を助けられ

痛みも忽ち全快し これ程尊い嬉しこと

又と世界にありませうか あゝ惟神々々

神の恵を目のあたり 授かりました吾々は

是より月の大神に 感謝の祝詞を奏上し

兔うさぎの都みやこの靈地れいちをば 堅磐かきはと常磐きはに守まもりませう

鷹たか依より姫ひめの神かみ様さまよ 龍國たつくに別わけの神かみ様さまよ

其外そのほか二人ふたりの神かむつ司かさ 千代ちよに八千代やちよに此里このさとに

鎮しづまりまして吾々われわれの 身魂みたまを守まもり給たまへかし

海うみより深ふかき大恩たいおんを 感謝かんしゃしまつり行末ゆくすゑの

守まもりを茲ここに願ねぎまつる あゝ惟かむながら神かむながら々々

御靈みたま幸さちはひましませよ 〴〵

と嬉うれし涙なみだを流ながしながら、心こころの底そこより神恩しんおんを感謝かんしゃし、且かつ龍國たつくに別わけの親切しんせつを打喜うちよろこび、親おやの如ごとくに慕したひける。

雲霞うんかの如ごとく押し寄よせたる猛獸まうじうの一隊いったいは、琉りうと球きうとの靈光れいこうに照てらされ、命いのちカラガ  
ラアラスの森もりの獅子王ししわうが陣屋ぢんやへ、轉こけつ輶まるびつ歸かへり行く。

獅子王ししわうは此度このたびの兔うさぎの都みやこ攻こめに對たいし、勝利しょうりは如何いかにと首くびを伸のばして待まちゐたり。

かかる所へ速力早き秃鷲は、三丈ばかりの翼をひるげ、空中を翔つて矢の如く獅子王の前に翔せ歸り來る。獅子王は早くも之を認めて、  
「汝は秃鷲の王ならずや。今日の一戦、味方の勝敗詳さに語れ！」  
と待ちかねし如く慌しく問ひかくる。秃鷲は羽搏きしながら、さも恨めしげに獅子王に向つて戦鬪の模様を陳辨する。

「狼の王は青垣山の南より 熊王北より進みより」

虎王西より突進し 豺王は東の谷間より

大蛇は巽乾より 鷲の一隊良や

坤に陣を取り 兔の都を十重二十重

包みて一度に鬨の聲 ドツと擧げつつ進む折

湖邊に潛む數萬の 鰐は忽ち立上り

波を踊らせ水を吹き 其勢は中々に

近寄り難く見えけるが 獅子奮迅の勢を

發揮はつきしながら驀まつしべら地に 命いのちを的まとに攻せめよつて

漸やうやく兔うさぎの部いちぶ隊たい 四十しじふ有五いうごを捕ほく獲わくして

ヤツト一ひと息いきそれよりは 尚なほも進すすんで湖みづうみを

一瀉いつしや千里せんりに打うち渡わたり 月つきの聖せい地ちに立たち向むかひ

兔うさぎの王わうを捕ほり虜よとなし 愈いよいよ目も的くてき達たつせむと

伊いた猛けり狂くるふ折をり柄からに 帽ぼう子しヶ嶽がだけの頂ちやうじやう上より

不ふ思し議ぎの靈れい光くわう現あらはれて 吾われ等らの軍いくさを射いて照てらせば

眼まなこはくらみ手てはしびれ 足あしわななきで進すすみ得えず

命いのちカラガラ青あを垣がきの 山やまを再ふたび攀よぢ登のぼり

東とう西せい南なん北ぼく一いち時ときに 恨うらみを吞のんで引ひ返かへし

味み方かたは四よ方もに散さん亂らんし 熊くま王わう虎とら王わう狼おほ王かみわう

大を蛇ろちの王わうの行ゆく方へさへ 今いまに至いたりて判はん明めいせず

無む念ねんながらも只ただ一いつ機つき 空くう中ちゆう翔かけりてやうやうに

報はう告こく旁かた歸がなへりし』と

語れば獅子王腕を組み  
 悲憤の涙にくれけるが  
 どころもなしに宣傳歌  
 風のまにまに響き來る  
 其聲聞くより獅子王は  
 頭を抱へ目を塞ぎ  
 忽ち其場にドツと伏し  
 悶え苦しみ居たりける  
 あゝ惟神々々  
 御靈幸はひまませよ。

(大正一一・八・二二 舊六・三〇 松村眞澄録)

第二篇 北の森林

第七章 試金玉 (八九八)

金剛不壞の如意寶珠

紫色の寶玉や

黄金の玉を紛失し

心いらちて高姫が

鷹依姫や黒姫は

言ふも更なり傍人に

向つて怒り八當り

玉の在處を探らむと

海洋萬里を乗越えて

探し廻れど影さへも

なみの上をば徘徊ひつ

再び聖地に立歸り

八尋の殿に黒姫と

麻邇の寶珠の玉しらべ

これ又案に相違して

面を膨らせ泡をふき

言依別の教主奴が

三つの寶や麻邇の玉

盗み隠して聖地をば

後に見すてて高砂の

島に渡りしものなりと

思ひつめたる一心の

心猿意馬の狂ふまで

春彦、常彦伴ひて

高砂島に打渡り

テルの島國振出しに

鏡の池に立寄りて

架橋御殿に侵入し



減らず口のみ竝べ立て

皇大神の戒めを

受けてやかたを飛び出し

アリナの山を乗り越えて

アルゼンチンの大野原

木の花姫の化身なる

日の出姫に廻り會ひ

いよいよ茲に悔悟して

荒野をわたり河を越え

夜を日についでアル港

ここより船に身を任せ

ゼムの港に上陸し

天祥山を乗り越えて

チンの港に辿りつき

鷹依姫の一行を

救はむものと真心の

駒に鞭うち進み行く

アマゾン河に來て見れば

半濁流は滔々と

目さへ届かぬ廣河を

勢猛く流れ居る

波のまにまにモールバンド

怪しき頭を擡げつつ

吾物顔に荒び居る

流石の高姫仰天し

アマゾン河の北岸に

命からがら辿りつき

天津祝詞を奏上し

宣傳歌をば歌ひつつ 森林深く進み入る

遠き神代の物語 いよいよここに述べ立つる

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ。

高姫は常彦、春彦、ヨブと共に漸くアマゾン河の大森林、時雨の森の北の林に

安着せり。此處は東西殆ど三百里、南北四百里位の際限もなき大森林なり。

高姫は此森林に鷹依姫の一行が迷ひ居るものと深く信じ、一日も早く救ひ出さ

むものと、鬱蒼たる樹木の間に右にくぐり左に抜け、草を分け、身を没する許り

の笹原をくぐり、時々猛獸に脅かされ、毒蛇に追はれ、稍廣き樹木稀なる原野に

出ることを得たり。

世界第一の大森林のこととて名も知れぬ大木、風を含んでごうごうと吼え猛り、

見慣れぬ美はしき果物は所々に稔りつつあり。一行は樹木まばらなる此原野に酷

熱の太陽の光を浴びながら物珍しげに日光浴を恣にせり。

此時前方より得も言はれぬ美はしき一人の女、悠悠として高姫一行が前に進み来る訝かしさ。四人は顔を見合せて、妖怪變化の出現ならむと、腹帯を締め肝を据ゑて、女の近寄るを待ち居たる。

女は聲しとやかに高姫の前に来り、お辭儀しながら、少しく顔を赤らめ、

「エ、一寸お尋ね致しますが、あなたは三五教の宣傳使、玉搜しの高姫様一行では御座いませぬか？ 玉が御入用ならば金剛不壞の如意寶珠、紫色の玉、黄金の

玉、麻邇の寶珠は、數限りなく妾の館に遠き神代の昔より、神政成就の寶として數多蓄へて御座いますれば、どうぞ、御檢めの上御受け取り下さいませれば、實

に有難き仕合せに存じ奉ります」

一旦玉の執着をはなれたる高姫は、又もや此言葉を聞いて持病再發したるもの如く、目を丸くし、顔を妙に緊張させながら、

「エ、何と仰せられます。金剛不壞の如意寶珠は世界に一つよりなきものと存じて居りますが、貴女の御宅にはそれ程澤山に御持ちですか。ソリヤ大方

僞玉では御座いませぬか？ 金剛不壞の如意寶珠と云へば世界に一つよりなき筈

で御座いますが……」

と半信半疑の目を見張り、あわよくば此玉を得て歸らむとの野心にみたされながら、心欣々として尋ね返した。美人は打笑ひ、

「ホ、ホ、ホ、高姫様貴女は妾の申す事をお疑ひ遊ばすので御座いますか？ 論

より證據、妾が宅へお出で下さいませれば、お分りになるでせう。如意の寶珠は只一個とのみ思召すのは、失禮な申分ながら、井中の蛙大海を知らざる譬も同様

で御座います。マア一寸妾の宅までお出で下さいまして、お查べなさいませ」

「ナンと妙なことを仰せられます。さうして又昔から人の來たことのない此森林に貴女が住んで居られるとは合點が參らぬぢやありませんか？ 何神様かの化身

では御座いますまいか？ 人間の住むべき場所ぢや御座いますまい」

「ホ、ホ、ホ、此森林に人間が住めない道理がどこに御座いませう。現に三五教の宣傳使、鷹依姫さまの一行が御住居になつてゐるぢやありませんか？」

「ア、其鷹依姫、龍國別一行の在處を捜すべく、それが第一の目的で御座います。玉などは最早斷念して居ります。併し乍ら貴女のお宅に其尊い玉があつて、私に

受取れとの事なれば、別に否みは致しませぬ。そんなら参りませう。どうぞ御宅まで案内して下さい」

「一寸待つて下さいませ。つい其處に妾の住家が御座いますれば、俄にお越し下さいますと餘り散らかつて居りますので濟みませぬ。どうぞ此處でゆるゆると休んでみて下さい。其中に又お迎へに参ります。又鷹依姫様一行の在處を御探ねならば、妾が存じてみますから、ゆつくりと妾が案内致します。此廣い森を五年や十年當所もなく御探ねになつたつて、分る道理がありませんから……」

「何から何まで御親切なる御言葉、神様のなさることは抜け目のないもので……あなたにお目にかかるも神様のお引合せです。

ほのぼのと出て行けど心淋しく思ふなよ

力になる人用意がしてあるぞよ

とお筆に出て居る。一分一厘神様の御言葉は違ひはありませぬワイ。これが違うたら神は此世に居らぬぞよと仰有るのだから、斯んな大丈夫なことは御座いませぬ。オホ、、、」

「暫く御免蒙ります。後してお迎へに……」  
と云ひながら、足早にあたりの森林に消ゆるが如く姿をかくしける。

高姫は後見送つてニコニコ顔、

「コレ常さま、春さま、ヨブさまえ、神さまと云ふ方はエライ力で御座いませう  
がなア。此様な東西南北果てしもなき大森林の中で、あんな美しき女に出會ふと  
は夢にも思はなかつたでせう。私でさへもこんな事があらうとは思はなんだので  
すよ。ついては改心位結構なものは御座いますまい。自轉倒島に居つた時に、金  
剛不壞の一つの玉に現をぬかし、此寶がなければ神政成就は出来ない、又高姫が  
之を使用せなくては、神政成就は駄目だと思ひつめて、いろいろと心を碎きまし  
たが、神様は有難い。苦勞艱難を十分にさせておいて、こんな所で思ひがけなく  
如意寶珠の玉を下さるとは、何と有難いことぢや御座いませぬか。それだから魂  
を研いて改心なされと申すのだよ。コレ常さま、春さま、ヨブさまよ、お前は結  
構なお神徳を頂いて萬劫末代名の残る御用が出来ますぞえ。これも全く日の出神  
の……オツトドツコイ、モウ日の出神は云はぬ筈だつた……神さま、うっかりと

申しました、どうぞお許し下さいませ……高姫についてお出でたればこそ、こんな御用が出来ますぞえ。何を云うても變性男子の御系統……オツトドツコイ、之も云ふ筈ぢやなかつたが餘りの嬉しさに、ツイこぼれました。ホ、ホ、ホ、ホ、」

常彦「其玉が澤山手に入るからは、何程日の出神の生宮と仰有らうが、變性男子の系統と申されようが、差支はないぢやありませんか。正々堂々と玉を携へて歸り、さすがは日の出神の生宮ぢや、變性男子の系統のなさることは、マアざつとこの通りだ。皆さま、へん濟みませぬナ……と云ふやうな顔して歸つた所で、誰が何と云ふ者が御座いませうか。神さまだつて、これ丈の御用をあそばした高姫様に、少々のおち位あつたとて、御咎め遊ばす道理も御座いますまい。イヤもう結構な事が到來致しました。お供に出て來た私さへ、餘り嬉して嬉しうて、手が舞ひ、足が踊りますワイ。アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、」

と何が嬉しいのやら、手を拍つて踊りまはる其可笑しさ。春彦は餘りすぐれぬ顔付にて、

「モシモシ高姫さま、常彦さま、チツト御用心なされませや。あなたは又もや玉

に執着心が出て来たやうな鹽梅ですよ。今来た女は眞の人間だと思つて居られま  
すか。どうも私には腑におちぬ點が御座いますワ。能く能く見れば、あの娘の耳  
が時々ビリビリと動いたぢやありませんか。人間の耳は不随意筋ですから、動く  
道理はありません。獸に限つて随意筋が發達して、耳を手のやうに動かすもので  
す。コリヤうつかりはして居られますまい」

高姫「人間の分際として、神さまの事が分るものですか。春さまは春さまらしい  
してゐなさい……なア、ヨブさま、あなたはどう思ひますか、あの御方を……」

ヨブ「左様ですなア。吾々にはちつとも見當が取れませぬ」

高姫「ア、さうだらう。さうだらう、そこが正直な所だ。耳が動くの動かぬの、  
怪しいの怪しくないの、頭から疑つてかかつては神様の御仕組は分りませぬワイ。  
お前は餘程伶俐な方だと思つたが、私の目はヤツパリ違ひませぬワイ、才

ホ、ホ、ホ、」

春彦「そらさうかは知りませぬが、如何しても私には合點の蟲が承認ませぬよ。  
よう考へて御覽なさい。こんな森林にあんな美しい女が住居して居る道理はない



ぢや御座いませぬか。そして又金剛不壞の如意寶珠の如き結構な寶が幾つもあつて、それを貰うてくれと云ふのが、それが第一理由が分らぬぢや御座いませぬか。又しても執着心を起して失敗なされましたら、今度は取返しが出来ませぬぞ。どうぞ胸に手を當ててトツクリと御思案なされませや」

高姫「コレ春さま、お前は年が若いから、何も知りさうな事がない。マア此高姫のすることを黙つて見て居なさい。年の効は豆の粉、豆の粉は黄ナ粉だ。浮世の波にさらはれて、千軍萬馬の功を経た心の鏡の光明に映つた以上は、どうして間違ふ氣遣ひが御座いませうかい。細工は流々仕上げを御覽じ、そんな分らぬ事を言ふと、たつた今アフンと致さねばなりませんませぬぞや。……コレ常彦、ヨブの兩人

さま、私の言ふことが違ひますかな」

ヨブ「違ふか違はぬか、そんなこと如何して分りませう」

高姫「お前もみかけによらぬ先の見えぬ御方ぢやなア。大概分りさうなものぢやないか。藪を見たら筍が生えて居る、池を見たら魚が住んで居る、果樹を見たら、コラ甘い果物がなつて居る位の事が分らねば、宣傳使になつて人を助けることは

出来ませぬぞえ。お筆先には一を聞いて十を悟る身魂でないと、まさかの時の間に合はぬぞよと御示しになつてゐるぢやありませんか」

ヨブ「さうだと云つて正直に告白してゐるのですよ。不可解の事を分つたとは申されませぬ、又斷然分らぬとも云へぬぢやありませんか。否定と肯定とのまん中に立つて御返事をしたので御座います。お氣に障りましたら、眞平御免下さいませ」

高姫「エ、仕方のない御人足だな……コレコレ常彦、お前は餘程伶俐さうな顔付だ。お前の考へは間違ひなからう、どう思ひますかなア」

常彦「誰が何と云つても、私は高姫さまの仰有ることを眞と信じます。乍併あの娘の言つたことは實地に當らねば、愚鈍な私、確かな御返答は出来ませぬ」

高姫「扱も扱も困つた分らずや計り寄つたものだな。世界に此事を分ける者一人ありたら物事は立派に成就するものなれど、餘り身魂が曇り切り居るから、神も誠に骨が折れるぞよ……と大神様が仰有つた。思へば思へば大神様の御心がおいとしいわいのう……それはさうと、何故早くあの娘さまは出て來ないだらうか。

餘り廣い座敷で御掃除に暇が要るのではなからうか

春彦 「高姫さまの天眼通で御覽になつたら、あの娘が何をしてゐる位は分らにや

なりますまい」

高姫 「千騎一騎の此場合、神政成就の御寶が手に入るか入らぬかと云ふ時に、そんな小理屈を言うておくれなや。さうだから大勢は入らぬ、大勢居ると邪魔が入りて物事は成就致さぬと御示しになつて居るぞえ」

春彦 「そんなら私はこれからお暇申して歸りませうか」

高姫 「肝腎の御用は一人ありたら勤まるのだから、勝手になさりませ」

ヨブ 「今の御言葉によれば、一人ありたらよいとの事、そんなら私も春彦さまと

一緒に暇致しませうか、御邪魔をしては濟みませぬからなア」

高姫 「コレ氣の早い、そら何を言はつしやるのだ。ヨブさまに歸つてくれとは申

しませぬぞえ。春さまだとて、別に私が邪魔になると言つたのぢやない。神様の

御言葉を参考の爲に話して聞かした丈の事だよ。つまり誠のお道は大勢よりは一

人の方が御用が出来よいものだと云ふ神様の御示しを話した丈ですから、今とな

つて、さう悪氣をまはして貰つちや困りますワ。千騎一騎の此場合、如意寶珠の玉を何程欲に持つたとて、一人に三つ位より持てるものでない。そして四人居れば、三十二の玉が手に入るぢやありませんか。あゝ斯うなると少しガラクタ人間でもよいから伴れて來るのだつたに、世の中は思ふやうに行かぬものだなア春彦「アハ、何とお口の達者な事、兔も角御手際拜見の上、お詫を致しませう」

常彦は口を尖らし、

「コリヤ春彦、變性男子の御系統に、何と云ふ御無禮な事を申すか。日の出神の生宮ぢやぞよ」

春彦「ハイ恐れ入りました。乍併どうぞ不調法のないやうに、皆さま御願申しませう」

高姫「オホ、あのマア疑の深い事ワイのう」

斯く話す折しも、以前の娘、美々しき盛装をこらし、二人の侍女を従へて、悠悠と此方に向ひ進み來る。

第八章 三人娘(八九九)

高姫は、以前の美人が二人の侍女を伴ひ悠々として此方に向つて進み来るを、百閒許りこちらから嬉しげに打眺め、夢に牡丹餅でも食つた様な嬉しさうな顔をつき出してゐる。其スタイルのどことなく間の抜けた可笑しさに、吹出す許り思はるるを、ジツと怵へて春彦は女を指し、

「アレ御覽なさい……一人かと思へば三人も魔性の女が耳をピラピラさせ乍らやつて来るぢやありませんか……高姫さま、あれでも御信用になりますかなア」

高姫は最早玉と聞いて、再び心を曇らしてゐる。

「コレ春さま、失禮なことを云ふものぢやありませんか。あれ程能う目につく耳が動いてるか動いとらぬか、能く御覽なさい。動く様に見えるのはお前の目の玉

が動くから、向方の耳が動くやうに見えるのだよ』

「私の目が動くのならば、誰の【耳】も【體】も一緒に動きさうなものぢやありませんか。よくお前さま、氣をつけて目をあけてミ、見なさい。アフィンと致してあいた【口】がすばまらぬ様な事があつたら、後で何程後悔したと云つても悔んでも後の祭り、折角高い【鼻】がめしやげて了ひますぞや。私が今何程御意見しても【齒】節は立ちますまい。私の云ふ事は一々【足】と申うて御座るから、何と云つても、【手】ごたへはせぬのも道理ぢや。併し乍ら人にあの【拇指】は【小指】の意見も聞かず、時雨の森でバカを見たとき、後【指】をさされぬやうになされませ。【背】中に【腹】は替へられませぬぞえ。後で【臍】をかむやうな事のないやうに、【胸】をさはやかにし、【腹】を据ゑて【乳】と考へなされ。【股】後で叱言をおつしやつても、【尻】まへんワ、【けつ】喰へ觀音ですよ」

「黙つて聞いて居れば、蚤か蝨の様に體中を這ひまはし、何【屁】理窟を垂れな

さるのぢや。【糞】が呆れますぞえ」

「アーア、【腹】が春彦だ。【小便】ぢやないが、【シ、シリ】もせぬ癖に、エ

ラさうに仰有つて今にアフンとなさる御方が、どこやらに一人ありさうだ。アー  
ア又もや例の病がおこつたのかなア」

「喧しい！」

と制し止むる時しもあれ、三人の女は早くも此處に近寄り來り、叮嚀に會釋しながら、

「高姫様、永らく御待たせ致しました。私はあなたの御名に能く似た高子姫と申す者、此侍女は一人はお月、一人はお朝と申します。どうぞ御見知りおかれまして末永く御交際をお願致します」

春彦小聲で、

「それやつて來たぞ！ だまされな！」

と拍子をつけて、小聲で囁いてゐる。高姫は春彦をグツと睨めつけながら、俄に顔色を和げ、高子姫に向つて、

「これはこれは、始めて御名を承はりました。マアマア實に御優しい御立派な御姿ですこと！」

「イエイエどうしてどうして、さう御譽め下さつては、お恥づかしう御座います。山家育ちの山時鳥、ホーホケキヨの片言まじり、何も知らない未通娘で御座りますれば、どうぞ宜しく御指導を御願致します」

春彦はそばより、

「何と言つても、海千山千河千の経験を経た高姫さまですから、大丈夫ですよ、アハ、ハ、ハ。其三千年の劫を経た高姫さまをチヨ口まかす娘さまは、ドテライ偉い變つた變な見當の取れぬ仕方のない御方で御座いませう。オツトドツコイ眉毛に唾をつけ、おけつの毛に氣をつけて、高姫さまの後から従いて参りませうかい」

高姫目を怒らし、口を尖らし、齒のぬけた口から唾を吐き出しながら、  
「コレ春彦さま、さうズケズケと淑女に向つて、失禮な事を云ふことがありますかい。モウシ高子姫さま、斯様な動物がついて居りますので、寔に妾も頭を悩めます。どうぞお氣を悪くせぬやうにして下さいませ」

春彦「ハイハイ、誠に以て失禮千萬、どうぞ寒狐に見直し、大狐に宣直し、大空は「高倉」でも、「月日」をかくす、雲さへ拂へば吾々の魂は「朝日」の豊榮昇



る様な勢になつて來ます……コレ高さま、オツトドツコイ高姫さま、だまされなさるな。常世の城で八百八十八柱の八王の神や八頭、立派な御方が寄り合つて、泥田圃の大失敗も鑑が出て居りますぞや。コレコレ高倉稻荷さま、月日、旭明神さま、化けた所で此春さまが承知をしませぬぞえ。何と恐れ入りましたかなア……隠されぬ證據と云ふのは、お前の二つの耳だ。お尻に白い尻尾が下つて居りますぞえ。こんな深い森林までだましに來るとは……（淨瑠璃文句）そりや聞えませぬ胴欲ぢや、欲に呆けた高姫さまを、高子の姫と現はれて、心曳かうとなさるのか、金剛不壞の如意寶珠、玉と云うたら目の玉を、グルグルまはす癖のある、高姫さまにありもせぬ、如意の寶珠をやらうとは、馬鹿になさるも程がある。此春彦が天眼通、一目睨んで查べたら、メツタに間違ひありません、高倉稻荷の白狐さま、月日旭の明神さま、早く尻尾を出しなされ」

高姫「コレコレ又しても失禮なことを仰有るのかいなア。高倉稻荷さまや月日旭の明神さまは、此高砂島へは御座らつしやる筈はありませぬぞや。常世の國の大江山に御住ひ遊ばされ、間の國を境として、自轉倒島へ御渡り遊ばす方ぢや程に、

見違みちがひをするも程ほどがある。黙だまつてゐなさい！」

春彦はるひこ「そんなら、黙だまつて御手前おてまへ拜見はいけんと、出でかけませうかなア……ヨブさま、常つねさ

ま、お前まへは如何どう考かんがへるか、一寸ちよつと否定ひてい肯定こうてい如何いかんを聞きかして下くださいな」

常彦つねひこ「否定ひていも肯定こうていもありませぬワイ。ゴテゴテ言いひなさるな」

ヨブ「何なんと云いつても合點がてんの往ゆかぬ事ことですワイ」

高子たかこ「何なんと御疑おうたがひ遊あそばしませ。何なんよりも事實じじつが證明しょうめい致しますよ」

高姫たかひめ「左様さやうならば御伴おともを致いたします……コレコレ春彦はるひこ、常彦つねひこ、ヨブさま、おとなし

うして従ついて來くるのだよ。何なんも言いつちやなりません。人民じんみんがゴテゴテ言いつたつ

て、神かみの仕組しぐみが分わかるものぢやありません。黙だまつて居ゐる方ほうが、どれ程ほど賢かしこう見みえるか

分わからぬぞえ」

とイラツクやうな聲こゑでたしなめながら、三人さんにんの後あとに従したがひ、水みづのたまつたシクシク

原はらを足あしの裏うらをひやし、

「ア、氣分きぶんがよい、久しぶりでお水みづにありついた。これと云いふのも神様かみさまの水みづも漏も

らさぬ御仕組おしぐみ、瑞みづの御靈みたまの御神徳ごしんとくだよ。足あしで踏ふむのも勿體もったいないけれど、ここを通とほ

らねば行くことが出来ませぬから、どうぞ神様許して下さいませや」  
と肩を四角に欹て、尻をプリンプリンとふりながら、三人の後に従ひ、勇み進んでついて行く。

此處には大變に廣い河が飛沫を飛ばしてゴーゴーと音を立てて流れてゐる。三人の娘は、尻をまくり、兔が飛ぶ様に高い石の頭を狙つて、向方へ瞬く間に渡つて了つた。高姫もわれ遅れじと尻ひきめくり、

「コレコレ皆さま、氣をつけなされ。此石はよく迂りますよ」  
と後向く途端に背中に負つた石地藏の重みで自分から迂つて激流におち込み、浮きつ沈みつ、足を上にして苦み悶え、矢を射る如くに流れ行く。

「コリヤ大變」  
と春彦は忽ち赤裸となり、

「オイ常彦、ヨブ、俺の着物を預つてくれ！」  
と云ひながら、渦まく波にザンブと飛込み、急流を泳いで、浮きつ沈みつ高姫に追いつき、漸くにして岩上に救ひ上げた。高姫は幸ひに餘り水も吞まず、氣も取

り失つては居ない。

春彦 「高姫さま、危ない事で御座いましたなア。それだから私が怪しいと云つて止めたぢやありませんか。是からチツト吾々の云ふ事も聞いて貰はなくちやなりませぬぞや」

「お前がありや、こりや、なけりや、こりや、こりや、善い事もあれば悪い事もある。サア早く行きますせう」

「どこへ急いで行くのですか」

「きまつた事だ。早く高子姫さまの御宅へ行かねば、さぞ御待兼ねだらうから……」

「ハテさて困つた事だなア。こんな目に遭つてもまだ目が醒めないのですか」

「神界の御仕組が分りますかい」

と云ひながら、川ぶちの森林を、上へ上へと傳ひのぼり、最前はまつた飛石の前迄走り來り、

高姫 「ヤア常彦、ヨブさま、待たせました。サア行きますせう」

常彦 「兔も角、御無事で御目出度う御座います」

ヨブ 「マア是で私も安心しました」

高姫 「コレ常さま、ヨブさま、お前等二人は、水臭い、なぜ私の危難を救はなかつたのだ。斯うなると始終口答へする春彦の方が餘程爲になる。まさかの時に間に合ふ者はメツタにないと、神様が仰有るが、いかにも其通りだよ」

常彦 「あなたは神さまだから、メツタに水に溺れて死になさると云ふやうなことはないと思つて安心してゐたのですよ。人民が神様を助けようなんて、そんなことが如何して出来ますか」

ヨブ 「餘り勿體なうて、寄りつく譯にも行きませず、吾々の爲に千座の置戸を負うて下さるのだと思ひましたから、チツト暗祈黙禱してゐました」

高姫 「生神がこんな谷川位にはまつて弱るやうな事はないが、併し乍ら、人民として案じて私を助けに來た春彦の心は、實に美はしいものだ。神は人間の眞心を

喜ぶのだからなア」

春彦 「高姫さま、春彦でも又間に合ふ事がありませうがな」

高姫 「棒千切れも、三年田の中にすておけば肥しになる。腐れ繩にも取りえと

いふ比喩の通り、あんな者が斯んな手柄をすると云ふ神様のお筆先の實地正眞のおかげをお前は頂いたのだ。サア神様へ御禮を申しなさい。こんな結構な御用をさして頂いてお前は餘程果報者だよ。これから高姫の云ふ事を一つも背かず聞きなされや。さうでない和高姫が又お前の代りに犠牲にならねばならぬから、チツト心得て下されよ。あんな若い女の方が、何ともなしに渉れる石の飛び越えを、迂ると云ふ様な道理がない。これも全く神様がお前の罪の贖ひに、私を迂りおとし、お前を飛込ませ、惟神的にお前の楔を遊ばしたのだから、決して、高姫を助けてやつたなどと思つちやなりませんぞや」

三人一度に顔を見合せ、目を丸くし、口を尖らせ、高姫の言に呆れてゐる。高子姫、お月、お朝の三女は、岸の向方に停立し、白き細き手を差出し、「早く来れ」と差招いてゐる。高姫は一步步指の先に力を入れながら糞垂れ腰になつて、怖相に向ふ岸へと渡りつき、太き息をつきながら……惟神靈幸倍坐世……と二三回繰返し、渡り来れる一行と共に、三人の女の後に従ひ、得意の鼻を蠢かしつつ心欣々従いて行く。

(大正一一・八・二二 舊六・三〇 松村眞澄録)

第九章 岩窟女(一九〇〇)

三人の娘の後から高姫は期する所あるものの如く、體をゆすり、どことなく春駒の勇んだやうに、シヤンシヤンとして従いて行く。常彦、ヨブの二人はせう事なさに従いて行くといふ様な足元で、莽々と草の生え茂つた中を、一歩々々探る様にしてゐる。春彦は殿をつとめながら、何となく心の底より可笑しくなり、

時雨の森に現はれた 魔性の女にだまされて

欲の熊高姫さまが 又も持病を再發し

金剛不壞の如意寶珠 數限りなく吾宿に

隠してあるから出ておいで お氣に入るのがあつたなら

いくらなりとも上げませうと 茨に餅のなるやうな

甘い話を聞かされて 心の中はうはの空

我欲の雲にとざされて 一寸先は眞の暗

【旭】が出てるが分らない 【月日】の姿も目につかぬ

【高倉】暗の高姫が ドツコイ一杯喰はされて

又も吠え面かわくだらう あゝ惟神々々

なぜにこれ程高姫の 心がグラグラするのだらう

勢込んであの通り 玉ぢや玉ぢやと勇み立ち

狐の穴につれ込まれ コレコレまうし高姫さま

如意の寶珠はこれですと さらに出したる玉手箱

開いて見ればこはいかに 如意の寶珠と思ひきや

狸の鞆丸八疊敷 オツ【たま】げたよ【たま】げたよ

コリヤ【たま】らぬと尻からげ 一目散にかけ出して

底ひも知れぬ谷川へ ドンブリコンと墜落し



水の泡程泡をふき アフンとするに違ひない

それを見るのが春彦は 氣の毒さまでたまらない

あれほど意見をしたけれど 玉にかけたら魂を

奪はれ切つた高姫は 口角泡をば飛ばしつ

神の仕組は人民の 容喙致す事でない

神の仕組は神が知る お前の様な人民が

神の仕組をゴテゴテと 横槍入れるこたならぬ

だまつてムれとはねつけて ありもせないに寶玉を

手に握らむと進み行く 猿猴が水に映つたる

月の影をば掴むやうに 水に溺れてブルブルと

泡を吹いては八當り 二百十日に吹きまくる

風ぢやなけれど吾々は 【蕎麥】の迷惑思ひやる

そばに見てゐる俺達も 高姫さまの吹く【粟】を

【黍】がよいとは思やせぬ 狐の七化け、ド狸、豆狸

八化けと更に知らずして 玉を手に入れ其上に

鷹依姫の在處をば 知らして貰ふと暗雲に

糠よるこびの氣の毒さ 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

如意の寶珠の寶玉は 高砂島にあるものか

言依別の大教主 初稚姫や玉能姫

二人の身魂にコツソリと 離れの島にかくさせて

誰も在處は分らない とは云ふものの自轉倒の

どつかの島に隠しある 其事だけは確ぢやと

錦の宮の空助が 私に話してをつたぞや

お氣の毒なは高姫ぢや もうよい加減に諦めて

玉の執着捨てなさい お前が玉に執着し

心を曇らすものだから こんな苦勞をせにやならぬ

日の出神の生宮か 系統の身魂か知らねども

俺は愛想がつきて来た

改心したかと思や又

又もや慢心あと戻り

改慢心をくり返し

神さまだとして氣の毒ぢや

こんな身魂を元のやうに

研き直すは大變だ

俺が神さまであつたなら

遠くの昔に棄ててをる

ホントにホントに氣が長い

尊き神の思召し

誠に感じ入りました

先へ出て行く三人は

高倉稻荷を始めとし

月日、旭の明神だ

神が姿を現はして

高姫さまの改心を

試してござるも知らずして

従いて行くのか情ない

あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして

高姫さまの執着を

一日も早く晴らしませ

私も眞に困ります

あんな御方の供をして

居るものならば何時迄も

自轉倒島へは歸れない

鷹依姫の一行は

アマゾン河の南岸

兔の王にかしづかれ

尊き靈地を守りつつ

高姫さまの到るのを

待つてゐるのに違ひない

早く改心させてたべ

高姫一人の爲ならず

常彦、春彦、ヨブの爲

神かけ念じ奉る

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ひながら、後より厭々ついて行く。

高子姫は草路を分けつつ、此森林に見た事もない大岩石十町四面許り、洋館の

如くに屹立し、岩の面には白苔が所斑に生えてゐる。そして岩の凹所には小さき

樹木の割には年を寄つて、植木のやうな面白き枝振り、彼方此方に點々として

生えてゐる。其下の方に縦一丈横八尺許りの眞四角な穴が穿たれ、入口には頑丈

な岩の戸が閉てられてあつた。高子姫は高姫に向ひ、

「これが妾の住家で御座います。どうぞ皆さま、御遠慮なしに御這入り下さいま

せ。お茶なつと差上げますから、ゆるゆる御休息下され。鷹依姫様にも御面會下さらば、眞に有難う存じます」

高姫は餘り立派なる岩窟の入口に肝をつぶし舌を巻きながら、

「これはこれは思ひがけなき立派な御住居、此岩窟は何時築造になりましたか。斯様な森林内に立派な館が立つて居らうとは夢にも知りませなんだ」

高子「何分此邊は大蛇や悪獸の跋扈甚だしく、夜分は斯様な處でなければ、到底安眠する事も出来ませぬので、天然の岩山を幸ひ、掘り付けまして、漸く此頃仕上つたばかりで御座います。貴女が始めてお客さまとして、御這入り下さるかと思へば、實に光榮に存じます」

春彦「モシモシ高姫さま、確りせぬと出られぬやうな目に會はされますよ。決して這入つちや可けません。ここは立派な岩窟の様に見えて居つても、シクシク原の泥田圃で御座いますよ。チト確りなさらぬか」

高子「ホ、ホ、ホ、」

高姫「コレ春！お前はどうかしてゐるぢやないか。曲津に憑依されて結構な御

用をゴテゴテと邪魔する事計り考へてゐるのだなア」

春彦「アイタ、アイタ、俄に足が引きつって來ました。どうやら化石しさうになつ

て來たぞ。モシ高姫さま、鎮魂をして下さいな。こんな所で石佛になつちや堪り

ませぬからなア」

「それ見なさい。餘り御神業の邪魔計りするものだから、神罰が立所に當つて其

通り固められて了つたのだ。マア暫くそこに門番を勤めて居なさい。此高姫は常

彦、ヨブの二人と共に奥殿に案内され結構な玉を拜見し、其都合に依つて頂戴し

て來る考へだから、それ迄お前はそこに立番してゐる方がよからうぞ。又しても

ゴテゴテ差出られると、御主人の御機嫌を損ね、折角見せて貰へる玉まで拜む事

が出来ない様になつちや困るから……あゝ神様といふ御方は何とした氣の利いた

お方だらう。實はお前を連れて、此館へ這入るのは眞平だと思つてゐた所、都合

よく神様が御繰合せをして下さつた。慢心致すと、にじりとも出來ぬやうになる

ぞよと、お筆先に出て居りませうがな。チト改心なされ。左様なら、春さま御苦

勞……」

と云ひ捨て、高子姫に手をひかれ岩窟内に潜り入らうとする。春彦は聲を限りに、  
高姫さま、シツカリしなさい、違ひますよ。オイ常彦、ヨブの兩人、俺の言ふ  
事を聞いて高姫さまを引止めて呉れ。大變な目に遭はねばならないぞ。俺はかう  
見えても、天眼通が利いて居るのだから………  
高姫「エ、喧しい、體も動かぬ癖に、天眼通もあつたものかい………サア常彦、ヨ  
ブ参りませう」  
と三人の女に手を曳かれ、奥深く進み入る。後に春彦は呆然として三人の後姿を  
眺め、

「ハテ困つた明盲ばかりだなア。高姫さまも是ではサツパリ駄目だワイ」  
(大正一一・八・二二 舊六・三〇 松村眞澄録)

第一〇章 暗黒殿 (九〇一)

外から見た割とは非常に廣い岩窟と見え、二間幅の隧道が高く穿たれて居る。

そこを二三丁許り雄大なる岩窟に呆れつつ、三人の後に従つて行く。

高子「ここが妾の住居で御座います。どうぞ御遠慮なく御上り下さいませ」

高姫「ハイ有難う。何とマア綺麗な青疊を敷きつめ、立派な壁掛がかかつて居り

ますなア。どうしてマア此不便な土地に、こんな立派な行届いたことが出来たで

せう。熱心と云ふものは怖いものですね。こんな固い岩を穿つて、こんな館を拵

へるには、随分時日が掛つたでせうな」

「ハイ、私の生れた時から、私の父がそろそろ開掘にかかりました。丁度今年で

五十六億萬年になりますよ、ホ、ホ、ホ、」

「何と仰有る。お前さまが生れた時に掘りかけた此岩窟、五十六億萬年とは、チ

ト勘定が合はぬぢやありませんか。お前さまの年はまだ十七八才の花の蕾ぢやな

いか」

「イエイエ、私はそんな若い女では御座いませぬよ。芝居の役者ぢやないが、ど

ないにでも女と云ふものは化けられますからなア。顔の皺に白粉を一杯埋めて、



其上そのうへに鬢びんつけ脂あぶらをコテコテと蠟ろうのやうにぬり、其上そのうへに又また白粉おしろいを白壁しろかべのやうにぬつて一寸ちよつと紅べにをあしらひ、白髪しらがには黒くろい汁じゆをぬつて、此この通り若わかく見みせて居ゐるのですよ。ここは陸あげの龍宮りうぐうで、妾わらわは乙姫おとひめで御座ございます。そして私わたくしの夫日をつとひの出神でのかみは奥おくに高野たかいびきをかいて休やすんで居をります。いつも貴女あなたの御肉體おにくたいを借用しやくよう致しますさうで御座ございます、随分ずぶん貴女あなたも御困おこまりでせう。私は貴女あなたの家來けらいの黒姫くろひめさまの體内たいないをチヨイチヨイ拜借はいしやく致いたす龍宮りうぐうの乙姫おとひめで御座ございます。龍宮りうぐうの乙姫おとひめはいつ見みても若わかい顔かほをして居ゐると、世せ界いの人間にんげんが思おもつて居をりますが、此この通り化ばけて居ゐるのですからなア。お前まへさまも大おほ化物ばけものの容器いれものだから、随分ずぶんおめかしやうによつては若わかく見みえますよ。ホ、ホ、ホ、ホ、

何なんと合點がてんの行いかぬ事ことを仰有おつしやるぢやありませんか。チト私わたくしは合點がてんが往ゆきませぬがなア

「そらさうでせう。此處ここは五里夢中郷ごりむちうきやうといふ暗黒世界あんこくせかいの中心地點ちうしんちてん、高姫村たかひめむらの黒姫くろひめ御殿ごてんと名なが付ついて居ゐる怪體けたいな處ところですよ」

「貴女あなたは私わたしをこんな所ところへうまくだまし込んで、玉たまをやらうなぞと云いつたのは、何なにか一つひとつの企たくみがあるのでせう」



まだ本當の改心は致すまい。何と云つても常世姫の身魂の繼承だから、しぶといのも無理はないわいのう」

高姫「如意寶珠の玉を見せると云つただやありませぬか。そんな婆顔をして「だま」さうと思つたつて、「だま」されもおどろかされも致しませぬよ。サアこれから高姫が岩窟退治の幕開きだ。……オイ常彦、ヨブの兩人、何をおぢおぢと慄うてゐるのか、千騎一騎の此場合、チツト氣を付けなされ」

常彦「高姫さま、此草つ原で貴女何を一人、喋くつて居るのですか」

「お前も餘程好い呆け人足だなア。此立派な岩窟がお前の目にはつかぬのか」  
ヨブ「高姫さま、向ふの森蔭にモールバンドのやうな怪獸が此方を向いて睨んで居ますよ。チトしつかりして下さい」

「お前こそしつかりして呉れなくちや困るぢやないか。そんなとぼけた事、千騎一騎の場合になつて、云うてるやうなことではどうなりませう。何の爲にお前をはるばる連れて來たのだい。こんな時に足手纏ひにならうとは、如何な高姫も思はなかつた。……オイオイ高子姫と吐す化物婆ア、早く金剛不壞の如意寶珠を出

して来ないか。日の出神を僞ると、八萬地獄へ落として、水責火責の成敗にあはしてやるぞよ。三千世界の救主を何と心得て居るか！

高子「オホ、玉が見たければ、自轉倒島の附近の小島を捜しなさい。さうして麻邇の寶は雄島雌島にかくしてあるぞえ。早く鷹依姫に廻り會ふて、麻邇の寶珠の御用を天晴れ勤め上げ、スツパリ改心致して、玉照彦、玉照姫様に心の底から御仕へ致し、我情我慢を出さぬ様にしなさいよ」

「おいて下さい、お前さま等に意見を受けずとも、チャンと此高姫が胸にあるのだ。雄島雌島に隠してあるなんぞと、そんな馬鹿を云ふものでない。何奴も此奴も云ひ合はした様に、麻邇の寶珠は、雄島雌島に隠してあると異口同音に言ひくさる。そんな古い文句はモウ聞きあいた。サア約束通り、玉がなければ許してやるから、鷹依姫に面會さしたがよからうぞ。それをゴテゴテ言ふならば、此高姫も千騎一騎の活動だ」

高子姫は白髪はくはつの醜みにくき婆ばアさまの姿すがたになつた儘まま、

高姫さま、こちらへ御座ござらつしやれ。鷹依たかよりひめ姫、龍國たつくにわけ別、テーリスタン、カーリ

ンスの四人の御方に面會させてあげませう」

と先に立つて岩窟を右に廻り左に廻り、うす暗い奥の方まで連れて行く。

高子「サア高姫さま、ここに四人共居られます。ゆつくり御話し下さいませ」

見ればガラスの如く透き通った隔ての中に、鷹依姫を始め一同は兔と鰐に取巻かれ、嬉しさうに果物の酒を飲んだり、唄つたり、踊つたり、愉快さうに戯れて居る。高姫は之を見るより、隔てのガラスのあるとは知らず、

「コレ鷹依姫さま、何の事だい。千騎一騎の此場合、お前さまは氣樂さうに、こんな魔神の岩窟に這入つて、兔や鰐を相手に酒を飲んで、踊り狂うて居るといふ事がありますかいな。私はお前の後を尋ねて、お前の難儀を助けたいと思つたら、危険を冒してここまでやつて來たのだ。それ程氣樂に暮して居るのなら、アタア呆らしい、ここまで來るのがやなかつたに」

と飛び込み、鷹依姫、龍國別を引摺り出さうとする刹那、ガラスに顔を打ちつけ、  
「アイタ、タ、タ、此高姫と同じ奴が向方に一人這入つてゐる、コラ化物！」  
と腕を振上げると、向ふも腕を振り上げる。此方が目を剥けば、向ふも目を剥く。

高姫は初めて鏡を見たのである。

「コレコレ常彦、ヨブさま、これ御覽！ 私に寸分違はぬ化物が居やがる。一寸

も油断はなりませぬぞや。屋氣樓の様に私の姿をソツクリ其儘に現はして居やが

る。油断のならぬ化物だぞ。一寸ここまでお出でなさい」

二人は「ハイ」と答へて、高姫の側にすりよつた。又もや常彦、ヨブの同じ姿

が立つて居る。高姫は二人を見比べて又もや頓狂な聲を出し、

「又しても化けよつたなア。コレコレ常彦、ヨブさま、しつかりせぬか。お前迄

が模型をとられて了つたぢやないか。是からキット此化物奴、高姫、常彦、ヨブ

と姿を變じ、其處等あたりを、「だま」し歩くに間違ひないから、今の間に亡ぼ

しておかねばなりませぬぞや。サア高姫が力一杯、此奴と格闘してこらしめてや

るから、お前はお前の模型と、一つ力比べをしなさい。……コレコレ鷹依姫、龍

國別、お前は化物の後に居るのだから、一つ加勢をしてお呉れ。さうすりや、私

の姿の化州を前と後からはさみ討ちに、こんな化物は一人と一人は到底互角の勢

で勝負がつくまい。人が口を動かせば動かす眞似をさらす、稀有とい奴、……コ

レコレ常彦、ヨブ、お前は後まはしにして、私の模型から叩きつけて御呉れ」

常彦、ヨブの兩人は、

「ハイ承知致しました」

と鏡に映つた高姫の頭を目がけて、力一杯になぐりつけた。高姫はビツクリ仰天、

「アイタ、、、、、コレ兩人何をする、私ぢやない、向方の化州ぢやがな」

二人は鏡の顔を目當に力一杯なぐりつける。

「又しても私をなぐるのんかいな。ソレ向方の奴ぢや」

常彦「向方の奴を擲つて居るぢやありませんか。あれを御覽なさいよ。化州をな

ぐると思へばお前が知らぬ間になぐられたのだ」

「エ、鈍な男だなア。それだから、まさかの時に間に合はぬと、何時も云ふのだ。

……痛いかなア、モウおいておくれ」

常彦「そんなら措きませうか」

ヨブ「何だかチツとも合點が往かぬぢやないか。エ、仕方がない、何と云つても、

鷹依姫、龍國別の奴、酒に魂を取られやがつて、兔や鰐を相手に遊んで居やがる。

モウかうなる上は第一の魔性の女を成敗致せ

「さうぢや さうぢや」

と兩人は高子姫の後を追っかけて行く。高姫はブツブツ呟き乍ら、自分と同じ姿に向つて睨めつけ乍ら、サツサと岩窟の入口指して走せ歸る。外に仁王の如く立つて居る春彦は大口あけて、

「アハ、、、、オホ、、、、」

と哄笑してゐる。高姫は之を眺めて、

「コレコレ春彦、お前は餘程馬鹿ぢやなア。何を氣樂さうに笑うてゐるのだい。

常彦、ヨブの兩人は、行方が分らなくなつて了つたよ。お前もチツトしつかりせないと、どんな事が此惡魔の岩窟には起るか知れぬ。エー工腑甲斐なや、足が立たないのかや」

春彦「アハ、、、、高姫さま、最前から随分泥水の葦原で能く踊りましたな。二人はあここに轉げて居るぢやありませんか」

斯かる所へ以前の三人の女、美しき姿となつて現はれ來り、



「高姫さま、誠に濟みませなんだねえ」

高姫「エ、化物奴、思ひ知れ！」

と拳を固めて、三人目がけて、打たむとする其刹那、パツと三人は煙となつて消えて了つた。白狐の姿目の前に三つ、のそりのそりと這ひ出し、あなたの森林目がけて一目散に逃げ去り、「コンコンカイカイ」と鳴き立てて居る。高姫は始めて気がつき、あたりを見れば、シクシク原に泥まぶれとなつて、立つて居る事が分つて来た。是より高姫は翻然として悟り、玉の執着心を悉く心の底より拂拭し去り、遂に時雨の森の邪神を言向け和し、目出度く自轉倒島をさして歸國の途に就けり。

(大正一一・八・二二 舊六・三〇 松村眞澄録)

第一章 人の裘(九〇二)

アマゾン河の南岸に展開せる大森林は、猛獸毒蛇の公然として暴威を逞しうするのみなれば、却て之が征服には餘り骨を折らなくてもよかつた。只表面的神力を發揮さへすれば獅子、狼其他の猛獸をも悦服させ得たのである。

鷹依姫、龍國別は兔の都の王となり、暫く此處に止つてゐた。然るに屢々、獅子、熊、虎、狼、大蛇、秃鷲、豺其他の獸、群をなして兔の都を包圍攻撃し、大いにそれが防禦に艱みつつありし處に、帽子ヶ嶽の山頂より危急存亡の場合は、不思議の靈光、猛獸の頭を射照らし、遂に流石の猛獸大蛇も我を折り、鷹依姫、龍國別の許に鷲の使を派遣し歸順を乞ひ、時雨の森の南森林は、全く鷹依姫女王の管掌する所となりぬ。

之に反し北の森林はすべての獸類、奸佞にして妖怪變化をなし、容易に其行動、端倪すべからざるものあり。そこへ動もすれば執着心を盛返し、心動き易き高姫を主として一行四人、鷹依姫を助けむと出で來りたるが、到底北の森林は、一通や二通で通過する事さへ出來ない事を大江山の鬼武彦が推知し、茲に白狐の高倉、月日、旭の眷族を遣はし、先づ第一に高姫の執着心を根底より除き、我を折らし

め、完全無缺なる神の司として、森林の探險を了へしめむと企畫されたるが、果して高姫は玉と聞くや、執着心の雲忽ち心天を蔽ひ、斯の如き神の試みに遇ひたるぞ淺ましき。

高姫は泥田圃の葦の中にアフィンとして、夢から醒めたやうな面をさらしてゐる。常彦、ヨブの兩人は、鼈に尻をぬかれた様な、ド拍子の抜けた面をさげて、高姫の體を不思議さうに、頭の先から足の先まで、まんじりともせず眺めながら默然として立つて居る。春彦は何時の間にやら、身體自由になつて居た。

春彦「高姫さま、私の云つた事は如何でした。違ひましたかなア」

高姫「違はぬ事もない、違ふと云つたら、マア違ふやうなものだ。チツトお前さま改心なさらぬと、私迄がこんな目に遇はなくちやなりませんよ」

「アハ、、、、何とマア徹底的に強いこと、世間へ顔出しがならぬ様になりて来るぞよ、われ程の者はなき様に申して、慢心致して居ると、眉毛をよまれ、尻の毛が一本もない所迄抜かれて了うて、アフィンといたし、そこになりてから、何程

神を頼みたとて、聞濟はないぞよ……と三五教の御教にスツカリ現はしてあるぢ

や御座いませぬか……スゴスゴと姿隠して逃げていぬぞよと

「コレコレ春彦、お前そりや誰に云つてるのだえ。そんなこた、チャンと知つてある者計りだ。高姫はそんな事は百も千も承知の上の事だから、モウ何にも云うて下さるな。エ、こんな男の側に居つて、ひやかされて居るよりも、どつかの木の下で一つ沈黙考と出掛けようか」

と云ひながら、一生懸命に尻ひきまくり、森林の奥深く驅入る。

常彦は高姫の姿を見失はじと、是亦尻ひとつからげ、後を慕うて従いて行く。

春彦、ヨブの二人は、二人の姿を見失ひ、

「又何れどつかで會ふ事があるだらう。吾々は鷹依姫一行を早く捜し求めて救ひ

出し、自轉倒島へ早く歸らねばならぬ」

と春彦は先に立つて高姫が走つて行つた反対の方向へワザとに歩を進めた。半時

許り森林の中をかきわけて、西北を指して進み行くと、そこに眞黒けの苔の生え

た、目鼻口の輪廓も碌に分らぬ様な三尺許りの石地藏が、耳が缺けたり、手が缺

けたり、頭半分あたまはんぶんわられたりしたまま、淋しさびげに横一よこいちの字じに立たつてゐる。

ヨブ「春彦はるひこさま、一寸御覽ちよつとごらん、此石地藏このいしぢざうを……耳みみの缺かけたのや、頭あたまの缺かけたの、手ての缺かけたのや、而も三體さんたい、能よくも不具ふぐがこれ丈揃だけそろうたものですな。一寸此邊ちよつとこのへんで一いつ服致ぷくいたしませうか」

春彦はるひこ「サアもう一休ひとやすみしてもよい時分じぶんだ。併しかし此石地藏このいしぢざうは決けつして正眞しやうまつぢやありません。氣きをつけないと、又高姫またたかひめさまの二にの舞まひをやらされるか知しれませぬワイ。神かみさまに吾々われわれは始終しじう氣きを引ひかれて修業しうげふをさせられますからな」

「春彦はるひこさま、私わたしはモウ三五教あななひけうが厭いやになりましたよ。高姫たかひめさまの正直しやうぢきな態度たいどに、船せん中ちゆうに於おいて感歎かんとんし、本當ほんたうに好よい教をしへだと思おもうて入信にふしんし、一切いっさいの欲よくに離はなれて財産ざいさん迄人までひとに呉くれてやり、ここ迄發起までほつきしてワザワザついて來きましたが、どうも高姫たかひめさまの執着しふちやく心の深ふかい事こと、あの豹變振へうへんぶり、ホトホト愛想あいざうがつきて、三五教あななひけうがサツパリ厭いやになつて了しまつたのですよ」

「あなたは神様かみさまを信しんずるのですか、高姫たかひめさまを信しんじてるのですか……人を信しんじて居をると、大變たいへんな間違まちがひが起おこりますよ。肝腎かんじん要かなめの大神様おほかみさまの御精神ごせいしんさへ體得たいとくすれば、

高姫さまが悪であらうが、取違ひをしようが、別に信仰に影響する筈はないぢやありませんか」

「さう聞けばさうですなア。併し高姫さまの行ひに惚込んで入信した私ですから、何だか高姫さまがあんな事を言つたり、したりなさるのを實地目撃しては、坊主憎けら袈裟迄憎いとか云つて、神様迄が信用出来なくなつて來ましたよ」

「そらそんなものです。大抵の人が百人が九十九人迄導いて呉れた人の言行を標準として信仰に入るのでから、盲が杖を取られたやうに淋しみを感ずるのは當然です。どうぞせう、是から吾々兩人が高姫さまに層一層立派な神柱になつて貰ふやうに努めようぢやありませんか。神様から吾々に對する試験問題として提供されたのに違ひありませんよ」

「兔も角入信間もなき私ですから、先輩のあなたの御意見に従ひませう。私もあなたには感心しました。高姫さま以上の神通力をお持ちになり、吾々三人が今の今迄神様の試みに會ひ、泡を吹いて苦しむ事を、先へ御存じの春彦さま、高姫さま以上ですワ」

「イエイエ、決して高姫さまの側へも寄せませぬ。併しながら如何したもののか、私の體が餘程靈感氣分になり、あんな事を言つたのです。つまり神様から言はされたのです」

と話して居る。後の石地藏はソロソロ歩き出し、二人の前に胡坐をかき始めた。

ヨブはビックリして、

「ア、春彦さま、大變ですよ。石地藏奴、そろそろ動き出して、此處に胡坐をかいて笑つてるぢやありませんか」

「アハ、是ですかいな。コリヤ【オホカミ】様ですよ。獸としては優良品ですよ。一つの奴は【アークマ】大明神と云ふ奴、一つの奴は【シシトラ】大明神と云ふ化神さまだから、用心なさいませや」

「何と能う化州の現はれる所ですなア」

「元より妖怪の巢窟だから、いろいろの御客さまが現はれて、面白い藝當を見せてくださいますワイ……オイ熊公、獅子、虎、狼、なんぢや猪口才な、石地藏や人間の姿に化けやがつて、四ツ足は四ツ足らしうしたがよからうぞ。勿體ない、人間

様の姿に化けると云ふ事があるかい、僭越至極にも程があるワ」

石地藏「ホツホ、俺達が人間の姿や佛の姿をするのが、夫程可笑しいのかい。又夫程罪になるのか。よう考へて見よ、今の人間に四足の容器になつて居らぬ奴が一人でもあると思ふか。虎や狼、獅子、熊、狐、狸、鷲、鳶、大蛇、鬼は云ふも更なり、下級な器になると、豆狸や蛙までが人間の皮を被つて、白晝に大都市のまん中を横行闊歩して居る世の中だよ。

これはしも人にやあるとよく見れば

あらぬ獣が人の皮着る

と云ふ様な今日の世界だ。そんな野暮な分らぬ事を云ふものでないよ。今の人間は神様の眞似をしたり、志士仁人、聖人君子、學者、宗教家、教育家などと、洒落てゐやがるが、大抵皆四足のサツクだ。どうだ、チツト合點がいつたか」

「お前がさう云ふとチツト考へねばならぬやうな氣分がするワイ。全くの惡口でもないやうだ。併し、お前の目から俺の肉體を見ると、神さまのサツクの様に見えるはせぬかな」



「見えるとも見えるとも、スツカリ神様だ」

「四足の容器のやうにはないかなア」

「四足所かモツトモツトだ。神は神ぢやが澁紙の様な面をし、心の中は貧乏

神、弱味につけ込む風邪の神、疱疹の神に麻疹の神、おまけに顔はシガミ面、人情うすき紙の如き破れ神……と云ふ様な神様のサツクだなア」

「そら、餘り酷評ぢやないか」

「どうでも良いワ。お前の心と協議して考へたが一番だ。お前は高姫を見棄てる精神だらうがな」

「イヤア決して決して見すてる考へぢやない。一日も早く改心をして貰つて、立派な神司になつて欲しいのだから、それでワザとに高姫さまが苦勞をする様に、二人こちらへ別れて來たのだ。此春彦が従いてゐると、高姫さまがツイ慢心をして、折角の改心が後戻りをするとならないからなア」

「アツハ、、、腰拔神の分際として、高姫さまに改心をして貰ひたいなどは、よう言へたものだ。お前の心の曇りが、みんな高姫さまを包んで了ふんだから、

折角改心した高姫が、最前の様な試みに遇うたのだぞよ。今高姫はモールバンドに取圍まれ、大木の幹を目がけて、常彦と共に難を避けてゐるが、上には澤山な狒々猿が居つて、高姫に襲撃して来る。下からはモールバンドが目目怒らして、只一打ちと狙つてゐる最中だ。オイ春彦、ヨブの兩人、是から高姫を救ひに行く」と云ふ眞心はないのか」

「そりやない事はないが、此春彦、ヨブの兩人が往つた所で、モールバンドのやうな、強い奴が目を怒らして待ち構へるとる以上は、吾々二人が救ひに行つた所で、駄目だ。否駄目のみならず、吾々の命迄、あの尻尾で一つやられようものなら、臺なしになつて了ふ。人間の體は神様の大切な御道具だから、さう易々と使ふ譯には行きませんまい。何分にも、お前の云ふ通り、人情うすき紙の様な神や、腰抜神の容器だからなア」

「アツハ、、、、口計り立派な事を云つて居つても、まさかの時になつたら尻込みを致す、誠のない代物計りだなア。それでは三五教も駄目だよ」

「喧しう云ふな。春彦の精神が石地藏のお化けに分つて堪らうかい。俺は高姫さ

まの様に有言不實行ではないのだ。不言實行だ。どんな事をやるか見て居つて呉れい。モールバンドであらうがエルバンドであらうが、誠と云ふ一つの武器で言向け和し、見事二人の生命を助けて見ようぞ。サア、ヨブさま、春彦に従いてお出でなさい

とあわてて、高姫の走つた方へ行かうとする。石地藏は、

「アツハ、、、たうとう俺の言に勵まされて、直日の靈に省みよつたなア。人に言うて貰うてからの改心は駄目だよ。心の底から發根と改心した誠でない役には立たぬぞよ。今にアフンと致して腮が外れるやうな事がない様に氣をつけたがよいぞよ。石地藏が氣を付けておくぞよ。此方はアキグヒの良の神、それに、良き獸の使はし女を澤山抱へて居る狼又アークマ大明神と云ふ立派な御方だ。ドレ、是から石地藏に化けて居つても本當の活動は出来ない。うしろから、お前の腕前を、實地見分と出かけよう。口と心と行ひの揃ふやうな誠を見せて貰はうかい

「エ、喧しい、化州、俺の御手際を見てから、何なと吐け。サア、ヨブさま行か

う  
と尻しりひつからげ、以前の谷川たにがはを免うさぎの如ごとくポイポイポイと身み軽く打渡りうちわた、轉こけつ輾まろ  
びつ、

「オーイオイ、高姫たかひめさまはどこぢやアどこぢやア、モールバンドのお宿やどはどこぢ  
や、春彦はるひこさまの御見舞おみまひだ、俺おれがこれ程ほどヨブのに、何故なぜ春彦はるひこともヨブさまとも返答へんたふ  
をせぬのか。高姫たかひめ、お前は聾まへになつたのか。オーイ、オイ」  
と聲こゑを限かぎりに叫さけび乍ながら、ドンドンと地響ぢひびきさせつつ、草原くさはらを無性むしやう矢鱈やたらに大木たいぼく  
の茂しげみを指さして走はしり行く。

(大正一一・八・二三 舊七・一 松村眞澄録)

## 第一二章 鰐わにの橋はし〔九〇三〕

春彦はるひこはヨブと共に高姫たかひめの危難きなんを救すくはむと、大聲おほこゑに叫さけびながら密林みつりんの中に驅かけ入い

り、呼べど叫べど、森の木靈に吾聲の反響するのみ、何の見當もつかず、已むを得ず大聲に歌ひながら、森林を何處彼處となく循環り始めたり。

春彦「吾等の師匠と頼みたる 高姫さまが又しても

金剛不壞の如意寶珠 其他の玉に魂ぬかれ

アタ恥かしや森林の 此正中で高倉や

月日、旭の明神に 心の底を查べられ

散々脂を搾られて 體は泥にまみれつつ

尚も取れない負惜み へらず口のみ言ひながら

吾等二人を振棄てて 元來し路へ引返し

鷹依姫の在處をば 捜さむものと出でましぬ

吾々二人は是非もなく 西北指して進み行けば

道の片方の石地藏 耳が取れたり手が千切れ

頭の缺けた立ちすくみ 黒い顔して道の邊に

罷り立つたる其前に

暫く息を休めつつ

高姫さまの噂のみ

爲せる折しも石地藏

ソロソロ立つて吾前に

胡坐をかいてすわり込み

不思議や物をべらべらと

喋り出したる可笑しさよ

化けた地藏の言ふことにや

高姫さまや常彦は

モールバンドに取巻かれ

大木の枝にかけ登り

避難してゐる最中に

狒々の群奴がやつて来て

無性矢鱈にせめかける

モールバンドは木の下に

目を怒らして控へ居る

進退茲に谷まりて

流石剛毅の高姫も

常彦諸共抱き合ひ

ア、ア、どうせう斯うせうと

吐息もらして居るだらう

春彦、ヨブの兩人は

こんな話を耳にして

如何して見捨てておかれうか

假令大蛇の巣窟も

モールバンドの棲處をも

恐れず撓まず進撃し

救ひ出さねばおかれぬ  
あゝ惟神々々

皇大神の御光に  
高姫さまの在處をば

てらして吾に見せ給へ  
高姫さまも是からは

心の底より改良し  
三五教の神柱

神の使と申しても  
恥かしからぬ魂となり

キット手柄を爲さるだらう  
一時も早く胸の戸を

開いて在處を明かに  
春彦、ヨブの兩人に

知らさせ給へ天津神  
國津神等國魂の

龍世の姫の御前に  
心清めて祈ぎまつる

あゝ惟神々々  
御靈幸はひましませよ

と歌ひながら、大樹の根元を  
一々巡視し、且つ空を仰ぎなどしつ  
つ、奥へ奥へと  
捜し行く。

春彦、ヨブの二人は漸くにして、  
高姫の避難せる大樹の  
間近に辿りつけば、石

地藏のお化けの云った通り、小山のやうな胴體をしたモールバンドが、森の樹立のマバラなる所を選び、目を怒らして高姫を睨めつけ、何とかして一打ちに打ちころさむと息まいてる其物凄さ。春彦は眞蒼になり、ソロソロ慄ひ出し「惟神靈幸倍坐世」も天の數歌も千切れ千切れになり、一向美はしき言靈を發射することが出来なくなつて來た。

モールバンドは春彦、ヨブの間近に來りしに氣付きしものと見え、小山のやうな胴體を徐ろに二人の方に向け直し、長大なる尾に撚りをかけ、今や一打ちに兩人を打たむとする形勢を示して居る。二人は命カラガラ傍の大木目蒐けて漸く登りつめ、後は兔も角、暫時の避難所と常磐樹の頂上にしがみついて、誰か助けに來てくれる者はなからうかと期待して居る。樹の上にて春彦は聲を慄はせながら、「コレコレ、ヨブさま、大變な事ぢや御座いませぬか。私も獅子、虎、熊、狼、大蛇位は、さうも恐れられないのだが、どれ丈肝を放り出して見ても、あのモールバンド丈は如何することも出來ない。腹の底から自然に戦いて來て、自分の體がどこにあるやら、分らなくなつて來ました。お前さまは如何ですかかな？」



「私だとして同じ事ですよ。併しながら、何時迄もああしてモールバンドに狙はれて居らうものなら、何時ここを下つて逃げ歸ると云ふことも出来ず、困つたものですなア。幸に此樹に固い果物がなつて居りますが、これさへ食べて居れば、假令十日や二十日、此樹の上に籠城したつて、別に困りもしませぬが、大風が吹いたり、大雨の時には實に困るぢやありませんか。此頃のように毎日毎日二三回づつ大きな雨が降つて來ると、第一身體が持てませぬワイ。モウ斯うなる上からは神様におすがりして、運を天に任すより方法はないから、一つ此處で一生懸命に、モールバンドが退却する様に御祈念を致しませうかい」

「ソリヤ結構です……併し、何だか、腹の底がワナワナして……聲が圓滿に出て來ませぬ……」

と千切れ千切れに話して居る。斯かる所へ、又もや宣傳歌が聞え來る。

□ 國依別の神司

御供をなしてはるばると

ヒルの國原立出でて

ブラジル峠を打ちわたり

果てしも知れぬ谷道を

辿り辿りてシーズンの

川の片方に来て見れば

戀の虜となりはてし

秋山別やモリスの司

二人の男が激流に

浮きつ沈みつ流れ来る

コリヤ大變と吾々は

國依別の命を受け

衣類をすぐに脱ぎすてて

ザンブと計り飛込めば

流石に名に負ふシーズンの

速瀨の波に漂ひて

溺れ死せむとせし所

思はぬ河中の岩石に

二人の身體は引つかかり

ヤツと息をば休めつつ

岩の眞下を眺むれば

秋山別やモリスの司

二人の身體は渦卷に

卷かれて浮きつ沈みつつ

人事不省の有様に

又もや身をば跳らして

安彦、宗彦兩人は

二人の身體をひつ抱へ

弱き川瀬を選びつつ

彼方の岸に救ひ上げ

介抱すればやうやうに

息吹返し兩人は

戀の虜の夢もさめ

國依別に從ひて

アマゾン河の森林に

潛みて世間に災の

靈を送る曲津見を

言向け和し世の中の

なやみを拂ひ清めむと

茲に五人の一行は

帽子ヶ嶽の頂上を

目當に進み登り行く

遠く彼方を見わたせば

アマゾン河の急流は

天津日影にてらされて

長蛇の如く光り居る

南と北の森林は

緑紅こき交せて

果てしも知らず茂り生ふ

此光景を眺めつつ

言依別の神司

國依別と諸共に

琉と球との神力を

遠く此方に照らしつつ

吾等一行が言靈の

戦の勝を守らむと

幽玄微妙の神策を

立てさせ給ふ有難さ

此森林は名にし負ふ

妖怪窟と聞ゆれば 八岐大蛇は云ふも更

虎狼に獅子や熊 其外百の怪物が

いろいろ雑多と身を變じ 吾等を誑かる事あらむ

あゝ惟神々々 神の御靈を身に受けて

如何なる曲も恐れなく 誠一つの神の道

撓まず屈せず進み行く モールバンドやエルバンド

假令幾千來るとも 吾言靈の神力に

言向け和し今よりは アマゾン河の底深く

潜みて百の災を 思ひとまらせくれむぞと

言依別の御言もて やうやう此處に來りけり

高姫さまを初めとし 常彦、春彦、今いづこ

果てしも知らぬ此森の いづこに彷徨ひ給ふらむ

神の御靈の幸はひて 一日も早く高姫が

在處を教へ給へかし 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも モールバンドは攻め來とも

虎狼や獅子熊の 勢いかに猛くとも

なにか恐れむ敷島の 大和心の益良夫が

神の光りを楯となし 神の恵を矛として

進みに進む森の中 實に勇ましき次第なり

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ

と歌ひつつ、安彦を先頭に、宗彦、秋山別、モリスの四人は、神の引合せか、期

せずして、高姫、春彦等が避難せる樹蔭近く進み來れり。

春彦、高姫の二組の避難者は樹上より此宣傳歌を聞き、未だ一度も聞きしこと

なき聲なれども、必ず途中にて、言依別、國依別の教に感じ入信せし者ならむ、

あゝ有難し辱なし、神の救ひの御手……と忽ち元氣恢復し、拍手し終り、樹上よ

り聲高らかに、天津祝詞を奏上し始めた。春彦の祝詞の聲に、はるか離れた樹の

上に避難して居た高姫、常彦は、始めて春彦の所在を知り、非常に心強さを感じ、

ますます元氣を出して天津祝詞を力一杯、天地も震撼せよと許りに宣り上げた。

安彦、宗彦の一行は雙方より聞え來る樹上の祝詞の聲に、始めて高姫一行のこ

こに居ることを悟り、歡喜斜ならず、尚も元氣を出して天津祝詞を宣り始めた。

モールバンドは少しも屈せず、目を怒らし、尾を振りしごき、縦横無盡に四人に

向つて突進し來る。四人は忽ち傍の大木に辛うじて避難し、樹上より祝詞を頻り

に奏上し、早く此怪獸の遁走して、吾等一行を救ひ給へと念じつつありぬ。

忽ち西北の空をこがして輝き來る琉、球の大火光、あたりは忽ち火の如く赤く

なりぬ。これ言依別、國依別の神司が、帽子ヶ嶽より救援の爲め發射する所の靈

光なりき。モールバンドは驚いて、尾を縮め、首をすくめ、コソコソと森林を驅

け出し、數十里の林を潜つて、アマゾン河に逃げ去りにけり。

安彦一行四人はヤツと胸をなでおろし、枝振のよい大木を下り來り、

安彦「高姫様々々々」

と呼ばはりながら、樹下を巡り、空を仰いで高姫の居所を搜して居る。

高姫は常彦と共にヤツと安心し乍ら下つて來た。春彦もヨブも亦一つの大木の

空より此處に漸く下り來り、互に顔を見合せ、嬉し泣きに抱き合ひて泣く。

是より八人は互に手を取り、無事を祝し、且つ高姫一行は安彦一行に向ひ厚く

感謝の詞を述べながら、アマゾン河の沿岸に向つて引返し、南岸の森林中に鷹依

姫一行が猛獸の王として住み居ることを、安彦を以て國依別より傳達したれば、

取る物も取り敢ず、河端に向つて進む。一行が一心をこめて奏上したる天津祝詞

の聲に、北の森林の猛獸共は争つて此處に集まり來り、八人の後に從ひ、これ亦

アマゾン河の岸迄、幾百千とも知れず、列を作つて從ひ來る。

これより高姫は、アマゾン河の急流を眺め、一生懸命に、南岸に無事渡らせ給

へ……と祈念した。忽ち川底より八尋鰐、幾千萬とも限りなく現はれ重なり合

て、忽ち鰐橋を架けたり。高姫は大神の神徳と鰐の好意を、一々感謝し、七人と共

に南岸に辛うじて渡ることを得たり。此間何里とも分らぬ位、廣き河幅なりけり。

北の森林に棲める猛獸は此處まで送り來り、此激流を眺めて稍躊躇の色ありし

が、忽ち鰐橋の架りたるに力を得、一匹も残らず、南森林に打渡り、高姫一行を

送りて兔の都に向ひ進み行く。

第一三章 平等愛〔九〇四〕

高姫外七人は鰐の橋を渡り、南の森林に數多の兔に迎へられ、漸くにして、青垣山を繞らせる森林の都、月の大神の鎮祭しある靈場に辿り着いた。鷹依姫は白髮の冠を頂き、凡ての猛獸を子の如くなづけ、普く獸の靈の濟度に全力を盡してゐる。

高姫は久し振りに鷹依姫に面會し、固く手を握りものをも言はず、嬉しさと懐しさに涙を兩頬より垂らしてゐる。ここに愈高姫一行八人と、鷹依姫の一行四人を加へ十二の身魂は、天地に向つて七日七夜の閒斷なき神言を奏上し、すべての猛獸を悉く言向け和し、肉體を離れたる後は必ず天國に到り、神人となつて再び此土に生れ來り、神業に参加すべき約束を與へ、所在猛獸をして歡喜の涙に酔は



しめたり。

如何に猛惡なる獅子、虎、狼、熊、大蛇、豺、豹と雖も、口腹充つる時は、決して他の獸類を犯す如き暴虐はなさないものである。只飢に迫り、其肉體の保存上、止むを得ずして他の動物の生命を奪り食ふのみである。

然るに萬物の靈長たる人間は、倉廩満ちても猶欲を逞しうし、他人を倒し、只單に自己の財囊を肥し、吾子孫の爲に美田を買ひ、決して他を憐み助くるの意思なき者、大多數を占めてゐる。併し乍ら、神代は社會上の組織、最も簡單にして、物々交換の制度自然に行はれ、金錢と雖も珍しき貝殻、或は椰子の實の種をいろいろの器になし、之を現今の金に代用し、又は砂金などを拾ひて通貨の代用にしてゐたのである。さうして一定の價格も定まつてゐなかつた。それ故神代の人是最も寡欲にして、如何に惡人と稱せらるる者と雖も、只々情欲の爲に争ふ位のものであつた。時には大宜津姫神現はれて、衣食住の贅澤始まり、貧富の區別漸く現はれたりと雖も、現代の如き大懸隔は到底起らなかつたのである。

大山祇、野槌の神などの土地山野を區劃して占領し、私有物視したる者も出で

來りたれども、これ亦現代の如くせせこましき者にあらず、實に安泰なものであつた。

高姫、鷹依姫、龍國別は、茲に猛獸に對し、神に許しを受けて、律法を定め、彼等をして固く守らしめた。其律法の大要は、

一、熊は熊、虎は虎、狼は狼、獅子は獅子、蛇は蛇、兔は兔として或地點を限り、其處に部落を作り、互に他獸の住所を侵さざる事

一、各獸族は一切の肉食を廢し、木の實又は草の葉、木の芽などを常食とし、而も身體少しも瘦衰へず、性質温良になり、互に吞噬の争ひをなさざる事

一、時々各獸團體より代表者を兔の都に派遣し、最善の生活上の評議をなす事

一、鰐をして、モールバンド、エルバンドの襲來に備へ、且つアマゾン河の往來

の用に任ずる事

一、鰐を獅子王の次の位と尊敬し、年々、各獸、月の大神の社前に集まりて、懇談會を開き鰐を主賓となし、年中の勞苦を犒ふ事

一、右の律法に違反したるものは、獅子王の命により、其肉體は取り喰はれ、其

子孫永遠に獸類の身體を受得して、地上に棲息するの神罰を與へらるる事  
等の數ヶ條の律法を定め、獅子王を始め各獸の王をして、之を其種族一般に布告  
せしめた。

これより其律法を遵守し、月の大神の宮に詣でて赤誠を捧げたるものは、一定  
の肉體の期間を経て歸幽するや、直に其靈は天國に上り、再び人間として地上に  
生れ來ることとなりぬ。

又此律法に違反したる各獸は、其子孫に至る迄、依然として祖先の形體を保ち、  
今に尚人跡稀なる深山幽谷森林などに、苦しき生活を續けてゐるのである。あゝ  
尊き哉、月の大神の御仁慈よ。

國治立大神は、あらゆる神人を始め禽獸蟲魚に至る迄、其靈に光を與へ、何時  
迄も淺ましき獸の體を繼續せしむることなく、救ひの道を作り律法を守らしめて、  
其靈を向上せしめ給へり。故に禽獸蟲魚の歸幽せし其肉體は、決して地上に遺棄  
することなく、直に屍化の方法に依つて天に其儘昇り得るは、人間を措いて他の  
動物に共通の特權である。猛獸は云ふも更なり。鳥、鳶、雀、燕其外の空中をか

ける野鳥は、決して屍を地上に遺棄し、人の目に觸るる事のなきは、皆神の恵に依りて、或期間種々の修業を積み、天上に昇り、其靈を向上せしむる故なり。只死して其體軀を残す場合は、人に鐵砲にて撃たれ、弓にて射殺され、或は小鳥の大鳥に掴み殺され、地上に落ちたる變死的動物のみ。其他自然の天壽を保ち歸幽せし禽獸蟲魚は残らず神の恵によりて、屍化の方法に依り天上に昇り得る如きは、天地の神の無限の仁慈、偏頗なく禽獸蟲魚に至る迄、依怙なく均霑し給ふ證據なり。只人間に比べて、禽獸蟲魚としての卑しき肉體を保ち、此世にあるは、人間に進むの行程であることを思へば、吾人は如何なる小さき動物と雖も、粗末に取扱ふ事は出来ない事を悟らねばならぬ。其精神に目覺めねば、眞の神國魂となり、神心となることは到底出来ない。又人間としての資格もない。

斯く曰はば人或は云はむ、魚を捕る漁師なければ吾等尊き生命を保つ能はず、獸を捉ふる獵夫なければ日常生活の必需品に不便を感じず、無益の殺生はなさずと雖も、有益の殺生は又已むを得ざるべし。斯かる道を眞に受けて遵守することとせば、社會の不便實に甚しかるべしとの反對論をなす者がキット現はれるであり

ませう。併し各自にその天職が備はり、猫は鼠を捕り、鼠は人類の害をなす恙を捕り喰ひ、魚は蚊の卵子を食し、蛙は稻蟲を捕り、山獵師は獅子、熊を捕り、川漁師は川魚を捕り、海漁師は海魚を捕りて、其職業を守るは皆宿世の因縁にして、天より特に許されたるものである。故に山獵師の手にかかると禽獸はすでに天則を破り、神の冥罰を受くべき時機の來れるもののみ、獵師の手に掛つて斃れる事になつてゐるのである。海の魚も川魚も皆其通りである。

然るに現代の如く、遊獵と稱し、職人が休暇を利用して魚を釣り、官吏その他の役人が遊獵の鑑札を與へられて、山野に獵をなすが如きは、實に天則違反の大罪と云ふべきものである。自分の心を一時慰むる爲に、貴重なる禽獸蟲魚の生命を斷つは、鬼畜にも優る残酷なる魔心と云はなければならぬ。人には各天より定まりたる職業がある。之を一意専心に努めて、士農工商共神業に参加するを以て、人生の本分とするものである。

ペストが流行すると云つては、毒藥を盛り鼠を全滅せむと謀る人間の考へも、理論のみは立派なれども到底之を全滅する事は出来ない。又鼠が人家になき時は

人間の寢息より發生する邪氣、天井に凝結して小さき恙蟲を發生せしめ、其蟲の爲に貴重な生命を縮むる様になつて了ふ。神は此害を除かしめ、人の爲に必要に應じて鼠を作り給うたのである。鼠は恙蟲を最も好むものである。故に其鳴聲は常に『チウチウ』と云ふ。チウの靈返しは『ツ』となる。併し乍ら鼠の繁殖甚しき時は、食すべき恙少き爲、止むを得ず、米櫃を齧り、いろいろと害をなすに至る。故に神は猫を作りて、鼠の繁殖を調節し給うたのである。猫の好んで食するものは鼠である。鼠の靈返しは『ニ』となる。猫の鳴聲は『ニヤン』と鳴く、『ヤ』は退ふこと、『ン』は畜生自然の持前として、言語の末に響く音聲である。故に『ニヤン』と云ふ聲を聞く時は、鼠の『ニ』は恐れて姿を隠すに至るは言靈學上動かすべからざる眞理である。人試みに引く息を以て、鼠の荒れ廻る時、『ニヤン』と一ニ聲猫の眞似をなす時、荒れ狂ひたる鼠は一時に静まり遠く逃げるべし。『ニヤ』の靈返しは『ナ』となる。故に猫の中に於て、言靈の清きものは『ナン』と鳴くなり。

すべて禽獸蟲魚は引く息を以て音聲を發し、神國人は吹く息を以て臍下丹田よ

り嚙喰たる聲音を發し、又引く息、吹く息の中間的言語を發する人種もあることを忘れてはならぬ。

又鳥の中にも、吹く息、引く息の中間的の聲音を一二聲發するものが、たまにはあるものである。馬は陽性の動物なれば、『ハヒフヘホ』と聲音を發し、牛は陰性の動物なれば、『マミムメモ』の聲音を發す。其他一切の動物、各特有の音を有し、完全に其意思を表示することは發端に述べた通りである。

馬は陽性の獸類なれば、人其背に跨がり『ハイ』と聲をかくれば、忽ち無意識に前進す。『ハ』は開き進むの言靈であり『イ』は左右の息である。即ち左右の脚を開きて進めと云ふ命令詞となる。牛は陰性の獸類なれば、人あり、後より

『シイ』と言へば前進す。『シ』は水にして且つ俯むき流れ動くの意である。

『イ』は前に述べた通りである。馬は頭をあげて、陽の息を示して進み、牛は頭を下げて陰の水火を示して進む。陽性の馬は『ドー』と言へば止まり、陰性の牛は『オウ』と言へば止まる。『ド』は陽的不動の意味であり、『オー』は陰的不動の言靈の意味である。

之を以て之を見れば、禽獸蟲魚一切、惟神的に言靈によりて動止進退すること  
は明白なる事實である。其他の禽獸皆然りである。

或古書にミカエル立ちて叫び給へば、山川草木、天地一切これに應ずとあるも、  
言靈の眞意活用を悟りたる眞人の末世に現はれて、天地を震撼し、風雨雷霆を叱  
咤し又は驅使し、山川草木を鎮定せしめ、安息を與ふる言靈の妙用を示されたも  
のである。あゝ偉大なる哉、言靈の妙用！

是より高姫、鷹依姫、龍國別、外九人は月の大神の御前に恭しく拜禮を了り、  
兔の王をして厚く仕へしめ、アマゾン河の畔に出でて、モールバンドを始めエル  
バンドの一族に向ひ、善言美詞の言靈を與へて、彼等を悦服せしめ、遂にモール  
バンド、エルバンドは言靈の妙用に感じ、雲を起し、忽ち龍體となつて天に昇り、  
風を起し、雨を呼び、地上の一切に雨露を與へ、清鮮の風を萬遍なく與へて、神  
人萬有を安住せしむる神の使となりたり。

併し乍ら、まだ悔い改めざる彼等怪獸及猛獸の一部は、今尚淺ましき肉體を子



孫に傳へて、或は森林に或は幽谷に潛み、海底、河底に潛伏などして、面白からぬ光陰を送つてゐるものもあるのである。

古の怪しき獸は、今日に比ぶれば、其數に於て其種類に於て最も夥しかつた。併しながら三五教の神の仁慈と言靈の妙用によつて、追々に淨化し、人體となつて生れ來ることとなつた。故に靈の因縁性來等に於て、今日と雖も、高下勝劣の差別を來たすこととなつたのである。併しながら何れも其根本は天御中主大神、高皇産靈神、神皇産靈神の造化三神の陰陽の水火より發生したるものなれば、宇宙一切の森羅萬象は皆同根にして、何れも兄弟同様である。

同じ人間の形體を備へ、同じ教育をうけ、同じ國に住み、同じ食物を食しながら、正邪賢愚の區別あるは、要するに靈の因縁性來のしからしむる所以である。或理窟屋の中には、總ての人間は同じ天帝の分靈なれば、靈の因縁性來、系統、直系、傍系などの區別ある理由なしと論ずる人がある。斯の如き論説は、只一片の道理に墮して、幽玄微妙なる靈魂の經緯を知らざる人である。人の肉體に長短肥瘠、美醜ある如く、靈魂も亦これに倣ふは自然の道理である。要するに人間の

肉體は靈魂のサツクのやうなものであるから、人間各自の形體は靈魂そのものの形體であることを悟らねばならぬ。靈魂肉體を離れ、靈界に遊ぶ時は、其脱却したる肉體と同様の形體を備へ居る事は、歐米靈學者の漸く認むる所である。物質文明の學は泰西人に先鞭をつけられ、靈魂學の本場たる我國は亦泰西人に靈魂學迄先鞭をつけられつつあるは、天地顛倒、主客相反する慘状と云はねばならぬ。我々は數十年來靈魂學の研究につき、舌をただらし、聲をからして叫んで來た。されど邦人は如何に深遠なる眞理と雖も、泰西人の口より筆より出でざれば、之を信ぜざるの惡癖がある。故に如何なる高論卓説と雖も、一旦泰西諸國に輸出し、再び泰西人の手を借りて、輸入し來らざれば、信ずること能はざる盲目人種たることを、我々は大に歎く者である。此物語も亦一度泰西諸國の哲人の耳目に通じ、再び譯されて輸入し來る迄は、邦人の多數は之を信じないだらうと豫想し、且つ深く歎く次第であります。惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・八・二三 舊七・一 松村眞澄録)

第一四章 山上の祝〔九〇五〕

神代の昔高天にて 五六七の神と現はれし

瑞の御靈の月神が 大海原に漂へる

高砂島の秘密郷 ブラジル國に名も高き

アマゾン河の南北に 聳り立ちたる大森林

廣袤千里の中心に 貴の聖地を形造り

月の御靈の天降り これの聖地を悉く

兔の王に與へられ 千代の棲處と定めつつ

月大神を朝夕に 心の限り伏し拜み

齋き祀れる折柄に 常世會議の其砌

武備撤回の制定に 翼はがれし猛獸は

常世の國を後にして ブラジル國に打渡り

此森林に襲ひ来て

心正しき兔の族を

虐げ殺して餌となし

日に日に募る暴虐に

正しき兔は九分九厘

彼等が毒牙にかりつつ

種族も絶えむとする時に

綾の聖地を後にして

現はれ来る三五の

神の司の鷹依姫や

龍國別の一行が

目無し堅間の船に乗り

大激流の氾濫し

伊猛り狂ふアマゾン河を

溯りつつ南岸に

辿りてここに一行は

兔の王に迎へられ

月の御神を祀りたる

聖地にやうやう辿りつき

虎狼や獅子に熊

大蛇禿鷲其外の

禽獸蟲魚に至る迄

神の恵の言靈に

言向け和し今は早

時雨の森は天國の

春を樂む眞最中

鷹依姫の後を追ひ

はるばる探ね來りたる

あななひけう 三五教の神司 高姫、常彦、春彦が  
かみ いぶき 神の伊吹に服従ひて 茲にいよいよ十二人  
がは たちい アマゾン河に立出でて 天津御神の賜ひてし  
うづ ことたまの 貴の言靈宣りつれば モールバンドやエルバンド  
その た くわいじここと 其他の怪獣悉く 神の恵に悦服し  
みたま きよ てんじやう 靈を清め天上に 雲を起して舞ひ上り  
たふと かみ みつかひ 尊き神の御使と なりて風雨の調節に  
つか まつ たふと 仕へ奉るぞ尊けれ テーリスタンやカーリンス  
たつくにわけ はじ 龍國別を始めとし 心の空も安彦や  
むねな わた むねひこ 胸風ぎ渡る宗彦が 清き心の秋山別の  
かみ つかさ もろとも 神の司と諸共に 教を固くまモリスの  
あない びやうぶやま 案内につれて屏風山 果てしも知らぬ山脈の  
そら ひい たか 空に秀でていと高き 帽子ヶ嶽の靈光を  
つゑ ちから たの 杖や力と頼みつつ 神の恵に抱かれて

山河渡り谷を越え 嶮しき坂をよぢ登り

ここに十二の生身魂 帽子ヶ嶽にをさまりて

時雨の森の神軍に 光を與へ助けたる

言依別の大教主 國依別の神司

二人が前に辿りつき 宏大無邊の神恩を

感謝しながらウツの國 都を指して進み行く

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ。

十二人の一行はアマゾン河の魔神を言向け和し、各自に靈魂の行末を明かに諭し、且つ救ひの道を開き、琉と球との靈光に照らされ、意氣揚々として宣傳歌を歌ひながら、山川溪谷を跋渉し、やうやくにして、帽子ヶ嶽に止り、種々の神策を行ひ、神軍應援に従事しゐたる教主言依別命、國依別命の前に歸り來り互に其無事を祝し、成功をほめ、感謝の涙を流しつつ互に打解け、喜び勇んで帽子ヶ嶽の頂上に、國魂神の神靈を祀り、感謝の祝詞を奏上し、凱旋の祝を兼ね、あたり

の木の実を採收し來りて各其美味をほめ、ここに山上の大宴會は開かれにける。  
然るに、時雨の森の北の森林に向ひたる正純彦、カール、石熊、春公の一隊は  
何の消息もなく、一日待てども二日待てども、歸り來るべき様子さへなかりける。  
ここに言依別命が國魂神を厚く念じ、一同神樂を奏し、言靈歌をうたひて、正  
純彦一行が、無事此處に歸り來るべき事を十二の身魂を合せて、熱心に祈願をこ  
めつつありぬ。

一行四人は大森林を右に左に驅巡り、高姫一行の在處を捜し求むれども、音に  
聞えし數百里の大森林、容易に發見すべくもあらず、殆ど絶望の淵に沈み、一行  
四人は雙手を組んで、以前春彦、ヨブが暫し休息したる頭缺け石地藏の傍に惟神  
的に引寄せられ、石地藏より、高姫、鷹依姫以下十人、アマゾン河の魔神を言向  
け和し、今や帽子ヶ嶽に向つて凱旋の途中なることを詳細に解き諭され、喜び勇  
んで、帽子ヶ嶽さして、三日遅れた夕暮に漸く山上に辿りつき、言依別命以下の  
無事を祝し、ここに一行十八人となり、賑々しく屏風ヶ嶽の山脈を降りて長き原  
野をわたり、ブラジル峠を乗越え、暑熱の太陽に全身をさらしながら、漸くにし

てウツの都みやこの末子姫すゑこひめが館やかたに凱旋がいせんする事こととなりたり。

(大正一一・八・二三 舊七・一 松村眞澄録)

### 第三篇

瑞雲ずゐん靉あい隲たい

### 第一五章

萬歳樂ばんざいらく〔九〇六〕

五六七みろくの神世みやよを松代姫まつよひめ  
一度いちどに開ひらく梅うめヶ香が姫かひめの

心こころも直すぐなる竹野姫たけのひめ  
貴うづの命みことの御父おんちちと  
現あらはれまして高砂たかさこの  
ウツの都みやこに神館かむやかた



開ひらきて世よ人を導みちきし

桃もも上がみ彦ひこの神かむつ司かさ

五さつ月の姫ひめと諸もろ共ともに

神かみの御言みことを蒙かかりて

黄よもつ泉しまの島しまに出陣しゆつぜんし

親おや子こ夫婦ふうふが拔群ばつぐんの

功いさをを立たてて其そのほまれ

四よ方もに輝かがき給たまひたる

正まさ鹿か山やま津つ見み神かみの主ぬし

教をしへの司つかさの國彦くにひこに

ウうヅづの館やかたを任まかせつつ

遠とほく海原うなばら打渡うちわたり

今いまは再ふた度たびエルサレム

貴うづの聖地せいちにましまして

三あな五な教ひけつの御教みをしへを

完う全まらに委曲つばらに開ひらきましぬ

心こころも清きよき國彦くにひこの

長子ちやうしと生あれし松若彦まつわかひこは

父ちちの言ことば葉はを畏かしこみて

ウうヅづの館やかたに謹つつしみて

皇すめ大神おほかみの正まさ道みちを

四よ方もに傳つたふる折柄をりからに

神かむ素す盞さ鳴の大神おほかみの

貴うづの御子おんことあれませる

八や人たり乙女をとめの末子すゑこ姫ひめ

捨子すてこの姫ひめを伴ともなひて

潮うしほの八や百ほ路ぢを打渡うちわたり

光ひかり輝かがき降くだりまし

神かみの教をしへは遠をち近こちに

榮さかえて四よ方もの國くに人びとは

神かみの惠めぐみと末すゑ子こ姫ひめが

尊たふとき政せい治ぢに悅えつ服ぶくし

互たがひに歡よろこび喜よろこびつ

松まつの神かみ世よを立たてゐたる

時ときしもあれや三あな五なの

神かみの教をしへの大だい教けう主しゆ

言こと依より別わけの神かむつ司かさ

錦にしきの宮みやを立た出ち出いでて

玉たま照てる彦ひこや玉たま照てる姫ひめの

貴うづの命みことの神しん勅ちよくを

守まもりてここにこ出いでいまししぬ

末すゑ子この姫ひめを始はじめとし

松まつ若わか彦ひこや其その外ほかの

神かみの司つかさは喜よろこびて

言こと依より別わけの教けう主しゆをば

生いきたる神かみと尊そん敬けいし

教をしへの花はなは四よ方も八や方もに

勻にほひ榮さかゆる折をり柄からに

アマあまゾンずん河がの森しん林りんに

神かみを言こと向むけ和やはさむと

立たち向むひたる神かむつ司かさ

國くに依より別わけを始はじめとし

鷹たか依より姫ひめや高たか姫ひめが

言こと靈たま戰せんを助たすけむと

正まさ純ずみ彦ひこの神かむつ司かさ

カかールール、石いし熊くま、春はる公こうの

四人の供を引率し  
夜を日についで山河を

いくつか涉り屏風山  
大山脈の中央に

雲を壓して聳え立つ  
帽子ヶ嶽に立向ひ

國依別に面會し  
琉と球との寶玉の

珍の靈光發射して  
時雨の森に潛みたる

猛獸大蛇は云ふも更  
モールバンドやエルバンド

其外數多の曲神に  
向つて戰ふ神軍を

帽子ヶ嶽より射照らして  
言向け和し大勝利

雲の上迄立て給ふ  
其言靈の尊さに

高姫一行其外の  
數多の司は勇み立ち

帽子ヶ嶽を指して  
ここに漸く寄り來り

アマゾン河の水流が  
帶の如くに流れたる

景色を眺めて言靈の  
太祝詞言奏上し

言依別や國依別の  
琉と球との神人を

始めて外に十六の

神の司と諸共に

末子の姫の守ります

アルゼンチンの大都會

ウヅの館に悠々と

凱歌を奏して歸ります

其御姿の勇ましき

末子の姫を始めとし

松若彦や捨子姫

其外數多の神司は

ウヅの都の國人を

數多伴ひ出で迎へ

無事の凱旋祝しつ

ウヅの館に迎へ入る

アルゼンチンの開けてゆ

かかる例しもあらたふと

此世を造り固めたる

國治立大神や

豊國姫大御神

金勝要大御神

日の出神や木の花の

神の命も勇み立ち

五六七の神世は目のあたり

開けましぬと喜びて

百の正しき神司

これの聖地に遣はして

神の軍の凱旋を

喜び祝ひ給ひけり

歡呼くわんこの聲こゑは天地あめつちに響ひびき渡わたりて高砂たかさこの

島しまもゆるがむ許ばかりなりあゝ惟かむながらかむながら神々々

御靈みたまさち幸さいはひましまして言依別ことよりわけや國依別くによりわけの

高砂島たかさこしまの大活動だいくわつどう神素かむすさの盞をのおほかみ鳴大神の

はるばる此處ここに現あれまして神世かみよの仕組しぐみをなし給たまふ

清きよき尊たふとき物語ものがたり完うまら美らに委曲つばらに細こまやかに

言靈ことたまぐるま車ち遅たい滞たいなくころばせ給たまへ惟かむながら神

神かみの御前みまへに瑞月ずみげつが畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる。

末子すゑこひめ姫ひめは、言依別命ことよりわけのみこと一行いつかうの凱旋がいせんを祝しゆくし、金扇きんせんを擴ひろげ、自みづから歌うたひ自みづから舞まひ給たまふ。

世よは久方ひさかたのいや尊たかき綾あやの高天たかまを立出たちいでて

高砂島たかさこしまの民草たみぐさを仁慈じんじ無限むげんの大神おほかみの

貴うづの光ひかりに照てらさむと言依別ことよりわけの神司かむつかさ

國依別と諸共に

目無し堅間の船に乗り

旭もテルの港まで

海路を渡り来りまし

ヒルとテルの國境

三座の山の谷間に

瀕死に悩む國人を

尊き神の御教に

靈肉共に救ひつつ

國依別に立別れ

あなた此方と廻りまし

數多の國人救ひつつ

虎狼や熊獅子の

伊猛り狂ふ荒野原

涉り給ひてやうやうに

ウヅの都に出でまして

玉照彦や玉照姫の

神の教をま詳さに

開かせ給ふ時もあれ

此世を洗ふ瑞御靈

父大神の御言もて

捨子の姫の口を借り

宣らせ給ひし太祝詞

畏みまつりて言依別の

神の命は神館

立出で給ひ正純彦の

教司を始めとし

カール、石熊、春公の

四人の供を従へて  
アマゾン河の南北に

展開したる大森林  
伊猛り狂ふ猛獸や

モールバンドやエルバンド  
言向け和し給ひつつ

兔の都に祀りたる  
瑞の御靈の月の神

尊き御稜威を畏みて  
帽子ヶ嶽の頂上より

琉と球との靈光を  
照り合はしつつ永久に

百の靈を治めまし  
凱歌をあげて今ここに

歸り來ませる嬉しさよ  
あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして  
ウヅの都は永久に

治まる常磐の松代姫  
清くすぐなる竹野姫

梅ヶ香姫の一時に  
御稜威も開きて桃の實の

大加牟豆美と現れまして  
黄泉戦に大殊勳

立てさせ給ひし其如く  
末子の姫を始めとし

言依別や國依別の  
貴の命の御功績

天地と共に永久に

月日の如く明かに

照らし給へよ天津神

國津神たち八百萬

國魂神の龍世姫

月照彦の御前に

末子の姫が慎みて

請ひのみまつり三五の

神の教はいつ迄も

すばまず散らず時じくの

香具の木の實の花の如

薰りしげらせ給へかし

あゝ惟神々々

皇大神の御前に

言靈清く願ぎまつる

と歌ひ終り、一同に會釋して、神素盞鳴大神の鎮まります奥殿さして進み入る。

(大正一一・八・二三 舊七・一 松村眞澄録)

第一六章 回顧の歌(九〇七)



ウヅの神館かむやかたの八尋殿やひろどのに、末子姫すゑこひめの發起ほつきとして大歡迎會だいくわんげいくわいは開ひらかれ、言依別命ことよりわけのみことは立たつて、簡單かんたんなる祝歌しゅくかを歌うたひ給たまふ。

☞ 此世このよを造つくり固かためたる

嚴いづの御靈みたまとあれませる

國立くにはるたちの大神おほかみは

百八十國ももやそくにの神人しんじんを

おいずまからず永久とこしへに

五六七みろくの神世みよに救すくはむと

天地てんちの律法りつぽふ制定せいていし

清きよき教をしへを立たて給たまひ

豊國とよくに姫ひめの大神おほかみは

瑞みづの御靈みたまと現あらはれて

錦にしきの機はたを織おらせつつ

天てん教けう地ち教けうの神かみの山やま  
堅かき磐は常とき磐はに鎮しづまりて  
貴うづの聖せい地ちと諸もろ共ともに  
教をしへを開ひらき給たまひける  
時ときしもあれや天あ足だる彦ひこ  
胞え場ば姫ひめ二ふ人たりの靈みたまより  
生うれ出いでたる曲ま津が神かみ  
八や岐また大を蛇ろちや醜しこ狐ぎつね  
曲ま鬼おに共どもの現あらはれて  
豊とよ葦あし原はらの瑞みづ穂ほ國くに  
隈くまなく荒すさび猛たけりつつ  
神かみの依よさしの八や王わう神かみ  
八や頭がしら神がみまで籠ろう絡らくし  
追お々お勢せい力り扶ふ植しして

鹽長彦を謀主とし

國治立の大神が

此世を遂に退隱の

餘儀なきまでに至らしめ

世は刈菰の亂れ行く

あゝ惟神々々

神の主なる嚴御靈

國治立の大神は

天教山の火口より

身を跳らして根の國に

一度は落ちさせ給へども

此世を思ふ眞心の

凝り固まりて身を下し

野立の彦と現はれて

豊國とよくに姫ひめの化身けしんなる

野立のだちの姫ひめと諸共もろともに

天教てんけう地教ちけうの兩山りやうざんに

現あらはれ給たまひて三五あななひの

教をしへを開ひらき給たまひけり

再ふたび嚴いづの御靈おんたまを

分わけさせ給たまひて埴安彦はにやすひこの

嚴いづの御靈みたまや姫命ひめみこと

時節じせつをまちてエルサレム

黄金山わうごんさん下に現あらはれて

救すくひの道みちを宣のべ給たまふ

其御心そのみこころを畏かしこみて

國大立くにひろたちの大神おほかみの

四魂しこんの神かみとあれませる

御稜威も殊に大八洲彦

神の命や大足彦の

神の命の神司

神國別や言靈別の

瑞の御魂と現はれて

茲に再び三五の

清き教を四方の國

開き給ひし尊さよ

國大立の大神は

神素盞鳴の大神と

現はれまして許々多久の

罪や汚穢を一身に

負はせ給ひて天地の

百神等の罪科を

我身わがみ一つひとに引き受ひけて

八洲やしまの國くにに蟠わたかまる

八岐大蛇やまたをろちや醜神しこがみを

天津誠あまつまことの大道おほみちに

言向ことむけ和やはして助たすけむと

いそしみ給たまふぞ尊たふとけれ

ウブスナ山やまの齋苑館いそやかた

此處ここに暫しばらく現あれまして

日ひの出別でのわけの命みことをば

後あとに残のこして皇神すめかみは

いろいろ雜多ざつたに身みをやつし

島しまの八十島やそしま八十やその國くに

大海原おほうなばらを打うちわたり

自轉倒島おのころじまに出いでまして

貴うづの靈場れいちやうと聞きえたる  
綾あやの聖地せいちに上のほりまし  
四尾よつをの山やまに潛ひそみます  
國治立くにはるたちの御化身おんけしん  
國武彦くにたけひこの大神おほかみと  
互たがひに心こころを合あはせつつ  
經たてと緯よことの絲筋いとすぢを  
整ととのへ給たまひて世よを救すくふ  
錦にしきの機はたを織おり給たまふ  
錦にしきの宮みやの神司かむつかさ  
玉照彦たまてるひこや玉照姫たまてるひめの  
貴うづの命みことにかしづきて  
八尋やひろの殿とのに三五あななひの  
神かみの教をしへを開ひらきつつ

教主けうしゆの役やくを任まけられて  
教をしへを開ひらきゐたりしが  
嚴いづの御靈みたまや瑞御靈みづみたま  
經たてと緯よことの大神おほかみの  
御言みことかしこ畏おそみ聖地せいぢをば  
後あとに眺ながめて和田わだの原はら  
涉わたりてここきに來きて見みれば  
思おもひがけなき瑞御靈みづみたま  
神かむすさのを素盞鳴うづの珍うづの子こと  
生うまれ給たまひし末子すゑこひめ姫  
桃ももがみひこ上彦しづの鎮しづまりし  
教をしへの館やかたに現あらはれて  
神かみの教をしへを楯たてとなし  
惠めぐみの露つゆを民草たみぐさの



頭に下し給ひつつ  
五六七の神世の有様を  
今日あたり開きます  
斯かる尊き靈場に  
参り來りし樂しさよ  
時しもあれや素盞鳴の  
神の尊ははるばると  
これの館に出でまして  
捨子の姫に歸神り  
アマゾン河の曲神を  
言向け和し救へよと  
の宣らせ給ひし言の葉を  
謹み畏み屏風山  
帽子ヶ嶽に立向ひ

國くに依より別わけに巡めぐり會あひ

琉りうと球きうとの靈れい光くわうに

數あまた多たの魔ま神がみを言こと向むけて

目め出で度たく凱がい歌かを奏そうしつづ

十じふ八はち柱しらの神かみの子こは

ウうヅづの館やかたに安やす々やすと

歸かへりて見みれば有あり難がたや

神かむ素す盞さ鳴のを大おほ御み神かみ

はるばる此こ處こに出いでまして

憩いこはせ給たまふ嬉うれしさよ

あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら

御み靈たま幸さちはひましまして

高たか砂さ島しまは云いふも更さら

豐とよ葦あし原はらの瑞みづ穗ほく國くに

百八十島の果て迄も

恵の露に潤ひて

世は泰平の花開き

梅の香りの五六七の世

松の操のいつ迄も

色も變らず永久に

榮えましませ惟神

神の御前に願ぎまつる

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

誠の力は世を救ふ

誠の神は今ここに

現はれ給ひし上からは

天地と共に永久に

神の言葉は失せざらむ

巖の御靈や瑞御靈

金勝要の大御神

日の出神や木の花の

咲耶の姫の神力は

龍宮海の底深く

天教山の空高く

千代に八千代に揺ぎなく

輝き渡り天地の

光となりて輝かむ

あゝ惟神々々

神の尊き御恵を

謹み感謝し奉り

神かみの司つかさを始はじめとし

四よ方もの民たみ草くさ悉ことごとくく

神かみの惠めぐみを嬉うれしみて

常とき磐はの松まつのいつ迄までも

變かはらざらまし高たかさ砂この

島しま根ねに生おふる青せい松しょうの

梢こずえに鶴つるのすごもりて

名なさへ目め出で度たき尉じやうと姥うば

龜かめの齡よはひのどこ迄までも

大おほ海うな原ばらの波なみ清きよく

吹ふく風かぜさへも朗ほがらかに

静しづまりませと祝ほぎまつる

あゝ惟かむ神な々ながら々かむ

御み靈たま幸さちはひましませよ』

と歌ひ了り、末子姫の後を逐ひて、神素盞鳴大神の休ませ給ふ奥殿指して進み入る。

國依別は立上り、金扇を開いて祝歌を歌ひ且つ舞ひ始めた。其歌、

錦の宮を立出でて  
言依別の大教主

高砂島に出でませる  
御供に仕へまつりつつ

波間に浮ぶ琉球の  
寶の島に上陸し

琉と球との玉を得て  
棚無し船に身を任せ

伊猛り狂ふ荒浪を  
乗り切り乗り切り高砂の

島の手前に来て見れば  
高姫一行暗礁に

船を乗上げ浪の上  
渡りて進む時もあれ

山なす浪に襲はれて  
命危く見えければ

高島丸の船長に  
命じて船に救はしめ

テルの港に来て見れば  
先頭一に高姫は

常彦、春彦伴ひて 姿を早く隠しける

言依別の神司 われを伴ひ三座山

國魂神を祀りたる 龍世の姫の神靈地

集まり來る國人の 靈と肉とを救ひつつ

暫く此處に止りて 誠の道を宣り傳へ

それより進んでヒルの國 楓の別の永久に

鎮まりいます神館に 出で行く折しも天地は

震ひ動きて山は裂け 河は溢れて人々の

住家は碎け諸人は 水と炎に包まれて

苦み悶ゆる憐れさよ 楓の別の妹なる

紅井姫の命をば 艱みの中より救ひ出し

ヒルの館に立向ひ 稜威の言靈宣り上げて

天變地妖を鎮定し 館を立ちてアラシカの

峠を越えて日暮しの 館に教を開きたる

ウラルの道の神司 かむつかさ      ブール其他の人々に そのたひとびと  
 神の教を宣り傳へ かみをしへのつた      紅井姫やエリナ姫 くれなゐひめひめ  
 二人の女性を預けおき ふたりぢよせいあづ      又もやここを立出でて またまたたちい  
 安彦、宗彦従へつ やすひこむねひこしたが      ブラジル峠に差しかかり たつげ  
 丸木の橋を危くも まるきはしあやふ      生命カラガラ打ちわたり いのちう  
 シーズン川を乗越えて がはのりこ      帽子ヶ嶽に立向ひ ぼうしがだけたちむか  
 別れて程經し神司 わかほどへかむつかさ      言依別に巡り會ひ ことよりわけめぐあ  
 手を握りたる樂しさよ てにぎ      琉と球との靈光に りうきつれいくわう  
 アマゾン河や森林の がはしんりん      數多の魔神を言靈の あまたまがみことたま  
 御水火に助けしづめつつ みいきたす      凱歌をあげて十八の がいかじふはち  
 神の柱は潔く かみはしらいさぎよ      ウヅの館に來て見れば やかたききみ  
 思ひ掛なき末子姫 おもがけすゑこひめ      捨子の姫と諸共に すてこひめもろとも  
 貴の教をひらきまし うづをしへ      松の神代と榮えゆく まつかみよさか  
 其目出度さは言の葉の そのめでたこと      盡す限りにあらし つくかぎ



心こころ静しづかな國くに彦ひこが  
 御み子この松まつ若わか彦かひこの神かみ  
 主あるじの君きみに能よく仕つかへ  
 治をさまるこれの神かむ館やかた  
 來きたりて見みれば瑞みづ御み靈たま  
 神かむ素す盞さ鳴の大おほ神かみは  
 是こゝにこゝに出いでまして  
 我われ等らが言こと靈たま軍いくさをば  
 遙はるかに守まもり給たまひつつ  
 光ひかり輝かがき給たまふこそ  
 實げに尊たふとさの限かぎりなれ  
 あゝ惟かむ神な々ながら  
 國くに依より別わけの神かむ司つかさ  
 嚴いづの御み靈たまや瑞みづ御み靈たま  
 日ひの出で神のかみや木この花はな姫ひめの  
 貴うづの命みことの御おん前まへに  
 國くに魂たまがみ神を通とほしつつ  
 嬉うれしみ尊たふとみ祝ほぎまつる  
 畏かしこみ尊たふとみ祝ほぎまつる  
 『

と歌うたひ終はり、欣きん然ぜんとして奥おく殿でんに進すすみ入いる。

(大正一一・八・二三 舊七・一 松村眞澄録)

第一七章 悔悟の歌（九〇八）

松若彦は銀扇を擴げて、自ら歌ひ自ら舞ひ祝意を表しぬ。其歌、

珍の都の神司 時めき給ふ桃上彦の

神の命のみまつりを 麻柱ひまつりし吾父の

後を襲ひて神館 心を清め身を淨め

謹み守り來る折 天の八重雲かき分けて

天降りましたる末子姫 捨子の姫と諸共に

これの聖地に來りまし 神の教を遠近に

開き給ひて國人に 恵の露を隈もなく

與へ給ひし尊さよ 松若彦は素盞鳴の

神の尊の貴の御子 末子の姫に朝夕に

仕へまつりて三五の 教に侍らふ折柄に

ことよりわけ  
言依別の神司

おのころじま  
自轉倒島の中心地

たかま  
高天の原より降りまし

かみ  
神の教はますますに

しげ  
茂り榮えて木の花の

いちど  
一度に匂ふ如くなり

かか  
かかる例しは古より

ゆめ  
夢にも聞かぬ瑞祥の

ひかり  
光は清く日月と

みいづ  
御稜威を争ひ給ひつつ

ふたた  
再び降り來ります

かむすさ  
神素盞鳴大神の

きよ  
清き御姿畏くも

をが  
拜みまつりし嬉しさよ

まつわか  
松若彦は云ふも更

もも  
百の司を始めとし

よも  
四方の國人喜びて

みとく  
御徳を慕ひまつりつつ

こふく  
鼓腹撃壤の神の世を

ことほ  
壽ぎまつる折柄に

かへ  
アマゾン河の曲神を

かみ  
神の教に言向けて

かへ  
歸り來ませる言依別の

みづ  
瑞の命の一行を

めで  
目出度く迎へ奉り

かれき  
枯木に花の咲く如く

あぶ  
炙りし豆に紫の

はな  
花咲き出でし如くなる

千代の歡び永久の

春の樂み末永く

高砂島の永久に

あらむ限りは忘れまじ

あゝ惟神々々

神の御水火の幸はひて

末子の姫の守ります

アルゼンチンの神國は

大三災の憂ひなく

小三災の曲もなく

いや永久に松の世の

五六七の神の御恵に

うるはせ給へ惟神

神の御前に千歳經る

松若彦が謹みて

心の丈を立直し

ひたすら念じ奉る

只管祈り奉る

あゝ惟神々々

御靈の幸を賜へかし

と歌ひ終り、蒼惶として一同に拜禮し、又もや奥殿に姿を隠しぬ。

鷹依姫は銀扇を開き、自ら歌ひ自ら舞ひ祝意を表する。其歌、

豊葦原の中津國とよあしはら なかつくに メソポタミヤの顯恩郷けんおんきやう

バラモン教の本山にけうほんざん 大國彦を奉齋しおほくにひこ ほうさい

バラモン教を開きたるけうひら 鬼雲彦に従ひておにくもひこ したが

教を四方に傳へつつをしへ よも つた 自轉倒島に渡り來ておのころじま わた きて

高春山の岩窟にたかはるやま がんくつ 又もやアルプス教を立てまた けう た

テーリスタンやカーリンスもも 百の司を呼び集へつかさ よ つど

紫色の寶玉をむらさきいん ほうぎよく 齋きまつれる折柄にいつ せりから

三五教の神司あななひけつ かむつかさ 高姫、黒姫兩人がたかひめ くるひめりやうにん

天の鳥船空高くあま とりふねそらたか 轟かせつつ出で來りとどろ きた

給ひし折を奇貨としてたま をり きくわ 手段をめぐらし岩窟のてだて いはやど

中に押し込めたる折なか お こ をり 玉治別や空助がたまはるわけ もくすけ

國依別や龍國別をくによりわけ たつくにわけ 先頭に立てて出で來りせんとう た きて

年端も行かぬ愛娘としは ゆ まなむすめ 初稚姫の言靈にはつわかひめ ことたま

厳しく打たれアルプスのきび うたれ 教を棄てて三五のをしへ す あななひ

神かみの教をしへに服従まつろひつ

龍國たつくに別わけは吾子わがこぞと

悟さとりし時ときの嬉うれしさよ

綾あやの聖地せいちに送おくられて

錦にしきの宮みやに朝夕あさゆふに

謹つつしみ仕つかへ居ゐたりしが

黄金こがねの玉たまの保管役ほくわんやく

托たくされぬたる黒姫くろひめが

思おもはず玉たまを紛失ふんしつし

ヤツサモツサの最中さいちゆうに

高姫たかひめ司つかさが現あらはれて

思おもひもよらぬ御難題ごなんだい

黒姫くろひめさまを始はじめとし

鷹依たかより姫ひめは龍國たつくに別わけの

教司をしへつかさを伴ともなひて

尊たふとき聖地せいちを立たちはなれ

テーリスタンやカーリンス

五いつつの身魂みたまは名自めいめいに

黄金こがねの玉たまの在處ありかをば

あく迄まで捜さがし求もとめむと

大海原おほうなばらを打渡うちわたり

龍宮りうぐう島じまや常世とこよ國くに

高砂島たかさごじまの果はて迄まで

さまよひ巡めぐりて探たづぬれど

探たづぬる由よしもなき寝入ねいり

アリナの瀧たきに現あらはれて

四方よもの國くにより種々くさくさの

大小だいせう無數むすうの品玉しなだまを

手段を以て呼び集め  
時を待ちつつありけるが

テーナの里より黄金の  
貴の御玉の納まりて

ヤツト心を治めつつ  
黄金の玉を逸早く

錦の袋に納め込み  
一行四人は烏羽玉の

暗に紛れてアリナ山  
漸くわたりてウツの國

荒野ヶ原に来て見れば  
木の花姫の化身なる

神に出會ひて村肝の  
心の駒を立直し

廣袤千里の大原野  
辿りてアルの港まで

駒を進むる膝栗毛  
折柄出で来る帆船に

身を任せつつ海原を  
渡る折しも過ちて

一度は海に陥落し  
大道別の分靈

琴平別の化身なる  
八尋の龜に救はれて

ゼムの港に上陸し  
天祥山を乗越えて

チンの港やアマゾンの  
河瀬を舟にて上りつめ

時雨の森の南側 兔の王の都なる

珍の聖地に安着し 月の大神まつりたる

清き湖水をめぐらせる 靈地に足を止めつつ

數多の猛き獸を 神の御水火の言靈に

言向け和しアマゾンの 兔の司と成りをへて

恵のつゆを隈もなく うるほし與ふる折柄に

アマゾン河を打渡り 探ね來ませる高姫が

一行八人と諸共に 不思議の再會祝ふ折

帽子ヶ嶽のあなたより 無限の靈光發射して

靈を照らし給ひけり 是より一同勇み立ち

アマゾン河に立出でて 醜の魔神を征服し

神の恵に言向けて 一行喜び勇みたち

十二柱の神の子は 不思議の靈光探ねつつ

帽子ヶ嶽によぢ登り 言依別の瑞御靈



國くに依より別わけと諸もろ共ともに 無ぶ事じの凱がい旋せんことほぎて

天てん地ちの神かみに太ふ祝との詞り とをなへを了はりて一行いっかうは

山さん野やを涉わたり坂さかを攀よぢ 清きよき流ながれの谷たにを越こえ

深ふかき惠めぐみもアルゼンチンの ウみヅやこの都みやこに恙つつがなく

凱がい旋せんしたる嬉うれしさよ ウやヅかたの館みやこに來きてみれば

神かむ素す盞さ鳴を大神おほかみや 八や人たり乙をとめ女の貴うづの子こと

生あれ出いでませる末すゑ子こ姫ひめ 松まつ若わか彦ひこと諸もろ共ともに

神かみの尊たふとき御み教をしへを 世よ人びとに廣ひろく傳つたへつつ

鎮しづまりいます尊たふとさよ 心こころにかかる村むら雲くもも

拭ぬぐふが如ごとく晴はれわたり 眞しん如によの日じつ月げつ心しん天てんに

輝かがき給たまひて三あ五なの 誠まことを悟さとり一いち同どうが

皇すめ大神おほかみの御おん前まへに 額ぬかづきまつる今け日ふの幸さち

あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら 御み靈たま幸さちはひましまして

國くに治はる立た大神おほかみや 豊と國よく姫に大神おほかみの

仕組<sup>しぐ</sup>み給<sup>たま</sup>ひし松<sup>まつ</sup>の世<sup>よ</sup>の 錦<sup>にしき</sup>の機<sup>はた</sup>の神業<sup>しんげふ</sup>に

仕<sup>つか</sup>へまつりて天地<sup>あめつち</sup>の 貴<sup>うづ</sup>の御子<sup>おんこ</sup>と生<sup>うま</sup>れたる

清<sup>きよ</sup>き務<sup>つと</sup>めを永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>に 盡<sup>つく</sup>させ給<sup>たま</sup>へ惟<sup>かむ</sup>神<sup>ながら</sup>

神<sup>かみ</sup>の御前<sup>みまへ</sup>に願<sup>ね</sup>ぎまつり 今日<sup>けふ</sup>の喜<sup>よろこ</sup>び心<sup>こゝろ</sup>安<sup>やす</sup>く

神<sup>かみ</sup>の御前<sup>みまへ</sup>に祝<sup>ほ</sup>ぎまつる あゝ惟<sup>かむ</sup>神<sup>ながら</sup>々々

御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>幸<sup>さち</sup>はひましませよ

と歌<sup>うた</sup>ひ終<sup>をは</sup>りて、座<sup>ざ</sup>に着<sup>つ</sup>き、一<sup>いち</sup>同<sup>どう</sup>に向<sup>むか</sup>つて、叮<sup>てい</sup>嚙<sup>ねい</sup>に挨<sup>あい</sup>拶<sup>さつ</sup>をする。

次<sup>つぎ</sup>に高<sup>たか</sup>姫<sup>ひめ</sup>は金<sup>きん</sup>扇<sup>せん</sup>を開<sup>ひら</sup>いて、自<sup>みづか</sup>ら歌<sup>うた</sup>ひ自<sup>みづか</sup>ら舞<sup>ま</sup>ふ。其<sup>その</sup>歌<sup>うた</sup>、

わねは高<sup>たか</sup>姫<sup>ひめ</sup>神<sup>かみ</sup>司<sup>つかさ</sup> フサの國<sup>くに</sup>なる北<sup>きた</sup>山<sup>やま</sup>の

隠<sup>かく</sup>れし里<sup>さと</sup>に神<sup>かむ</sup>館<sup>やかた</sup> 造<sup>つく</sup>り設<sup>まう</sup>けてウ<sup>う</sup>ラ<sup>ら</sup>ナ<sup>い</sup>の

神<sup>かみ</sup>の教<sup>をしへ</sup>を立<sup>た</sup>てながら 瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>の大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>の

御<sup>み</sup>心<sup>こゝろ</sup>疑<sup>うたが</sup>ひ怪<sup>あや</sup>しみて いろいろ雜<sup>ざつ</sup>多<sup>た</sup>と氣<sup>き</sup>をいらち

國くに治はる立たち大おほ神かみの  
經たての教をしへを主おもとなし

緯よこの教をしへをことごとく  
損そこなひ破やぶり松まつの世よの

五み六ろ七くの神かみ世よを來きたさむと  
思おもひし事ことも水みづの泡あわ

瑞みづの御み靈たまの眞ま心ごころを  
取とり違ちがひたる愚おろかさ

前ぜん非んを悔くいて三あ五なの  
神かみの教をしへに立たち歸かへり

變へん性じやう男なん子しの御み教をしへや  
變へん性じやう女にょ子しの教をしへをば

經たてと緯よことに織おりなして  
尊たふとき神かみの神かむ業わざに

仕つかへまつりし折をり柄からに  
金こん剛ごう不ふ壊えの如に意い寶ほつ珠しゆ

紫むら色らむの寶ほう玉ぎよくを  
失うしなひ心ごころは顛てん倒たふし

あらゆる島しま根ねをまもぎ求もとめ  
遂つひには龍りう宮ぐうのひと一いつ島しま

地ち恩おんの郷さと迄まであらははれて  
心こころを碎くだき身みをくだき

搜さがしまはれど影かげさへも  
波なみの上へ渡わたり自おの轉ころ倒の

又またもや島しまに立たち歸かへり  
執し念ふねん深ふかくもさまざまと

再ふたび玉たまの行ゆく方かたをば  
搜さがし求もとむる時ときも時とき

龍宮島より現はれし  
玉依姫の御寶

天火水地と結びたる  
青赤白黄紫の

麻邇の寶珠の點檢に  
又もや不審を起しつつ

言依別の後を追ひ  
高砂島に來て見れば

鏡の池の片畔  
架橋御殿に黄金の

玉は更なり如意寶珠  
紫玉や麻邇の玉

隠しあらむと氣をひがみ  
いろいろ雑多と争ひつ

常彦、春彦伴ひて  
テルとウツとの國境

アリナの山を乗越えて  
荒野ヶ原に來て見れば

ポプラの上にはブラブラと  
黄金の玉は輝きぬ

天の與へと雀躍し  
喜び勇む折もあれ

木の花姫の御化身  
日の出姫の現はれて

天地の道理をこまごまと  
教へ給ひし嬉しさに

いよいよ迷ひの夢醒めて  
執着心を脱却し

荒野を渡り河を越え  
湖水をめぐりて漸うと

アルの港に安着し  
折柄来る帆船に

乗りて海原渡る折  
ふとした事より船中の

ヨブの真人に巡り會ひ  
師弟の約を結びつつ

ゼムの港に上陸し  
天祥山やチン港

アマゾン河を横ぎりて  
時雨の森の北野原

鷹依姫の在處をば  
探ねてさまよひるたりしが

さも恐ろしきモールバンド  
勢猛く攻め來り

命からがら常磐樹の  
梢に難を避けながら

天津祝詞を奏上し  
嚴の言靈宣る折に

秋山別を始めとし  
モリス、安彦、宗彦が

三五教の宣傳歌  
聲も涼しく歌ひつつ

此方に向つて進み來る  
時しもあれや西北の

雲押分けて光り來る  
琉と球との靈光に

モールバンドは驚きて スゴスゴ逃げ出す嬉しさよ

茲に一行八人は 無事の奇遇を祝しつつ

アマゾン河の岸の邊に 森林分けて辿りつき

鰐の架橋打渡り 南の森に現れませる

鷹依姫や龍國別の 珍の住家に立向ひ

ここに一行再會を 祝し合ひつつ大神の

御前に祝詞を奏上し 虎狼や獅子に熊

其外數多の禽獸に 稜威の律法制定し

固く守らせおきながら 再び岸邊に立出でて

モールバンドやエルバンド さしもに猛き曲神を

言向け和し十二人 琉と球との靈光を

目當てに進み歸り來る 心の駒の勇ましさ

言依別や國依別の 貴の命に迎へられ

感謝祈願も胸の中 嬉し涙に暮れながら

一行ここに十八の神の司は勇み立ち

夜を日についでウツの國 これの館に立向ひ

數多の人に迎へられ 八尋の殿に來て見れば

五六七の神世の救主 神素盞鳴大神や

貴の御子なる末子姫 その他數多の神司

天つ御空の星の如 居並び給ふ尊さよ

あゝ惟神々々 神の恵を蒙りて

心曇りし高姫も 眞如の月日に照されて

身魂も清き増鏡 伊照り輝く身となりぬ

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令天地は覆るとも 天津御空に日月の

輝く限り大神の 深き恵みは忘れまじ

尊き神の御教を 朝な夕なに麻柱ひて

今迄犯せし罪科を 悔い改めて惟神

尊たふとき神かみの御前おんまへに 功いさをを立てたむ永久とことはに  
松まつの五み六ろ七くの末すゑ迄までも あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々  
御靈みたま幸さちはひましませよ〆

と歌うたひ終をはり、莞爾くわんじとして座ざに着つく。

(大正一一・八・二三 舊七・一 松村眞澄録)

## 第一八章 龍國別たつくにわけ〔九〇九〕

龍國たつくにわけ別はは銀扇ぎんせんを開ひらき、自みづから歌うたひ自みづから舞まふ。其歌そのうた、

☐ われは龍國たつくにわけ別は司つかさ ウラナイ教けうの高たか姫ひめが  
教をしへを尊たふとみ畏かしこみて 心こころの駒こまを立たて直なほし



高城山の麓なる

松姫館の門番と

仕へまつりて朝夕に

鐵門を守る折柄に

三五教の教の御子

馬と鹿との兩人が

訪ね來れる様を見て

門番共は猛り立ち

いろいろ雑多の亂暴を

加へて懲せど兩人は

忍耐強く何事も

神の心に任せゐる

其眞心に感動し

傲慢無禮を恥ぢながら

忽ち龍の眞似をなし

奥殿深く這ひ込めば

神罰忽ちめぐり來て

吾々一同は畜生の

體と忽ち變じけり

神の御國に生れたる

凡ての人は言靈や

身を行ひを慎みて

清き人格保てよと

示させ給ふ神教に

迷ひの雲も晴れ渡り

松姫、お節の目の前で

神の使の神人に

天地自然の眞理をば

説とき示しめされて三五あななひの神かみの教をしへに入にふしん信し

龍たつ若わか司つかさと呼よばれたる昔むかしの名なをば改あらためて

龍たつ國くに別わけと名なを賜たまひ茲こゝに尊たふとき宣せんでん傳し使し

玉たま治はる別わけや國くに依より別わけの教をしへの司つかさと諸もろ共ともに

高たか春はる山やまに捉とらはれし高たか姫ひめ、黒くろ姫ひめ兩りやう人にんを

救すくひ出ださむと立たち向むかひ空もく助すけ、お初はつの應おう援えんに

アルプス教けうの神かむつかさ司つかさ鷹たか依より姫ひめを言こと向むけて

紫むら色さきいろの寶ほう玉ぎよくや高たか姫ひめ、黒くろ姫ひめ兩りやう人にんを

此こ方なたに受う取けとり鷹たか依より姫ひめの神かみの司つかさをよよく見みれば

思おもひ掛がけなき垂たら乳ちね根ねの生うみの母ははぞと判はん明めいし

驚おどろき喜よろこび神しん恩おんを感かん謝しゃしながら親おやと子こが

三あ五な教ひのと人びと々と手てを携たづへて綾あや錦にしき

高たか天あま原はらの靈れい場ぢやうに大おほ宮みや柱ばしら太ふ知とりて

建たち竝ならびたる神かむどこ床どこに赤あかき心こころを捧ささげつつ

朝あさな夕ゆふなに親おやと子こが

心こころの限かぎり身みの限かぎり

仕つかへまつれる折をりもあれ

黒くろ姫ひめさまの保ほく管わんせし

黄こが金の玉たまはいつの間まか

行ゆく方も知しらず消きえ失うせぬ

黒くろ姫ひめさまに疑うたがはれ

高たか姫ひめさまに追おひ出だされ

親おや子は悲かなしきさすらひの

旅たびに上のほりて寶ほう玉ぎよくの

在あり處かを捜さがし高たか姫ひめの

疑ぎ念ねんをはらし清きよめむと

棚たな無なし船ぶねに身みを任まかせ

當あて所ども波なみの上うへを漕こぎ

廣くわう袤ぼう千里せんりの海うな原ばらを

難なん行ぎやう苦く行ぎやうの末すゑ遂つひに

高たか砂さ島のテてルの國くに

テてーリスタりンヤカかーリりンす

茲ここに四よ人にんの行いつかうは

恙つつがもあらず上じやう陸りくし

玉たまの在あり處かを捜さがせども

果はてしも知しらぬ大たい國こくを

假たとへ令ひやく百ねん探さぐるとも

いいかかででかか捜さがし得うべべけけむむや

親おや子は首かっを傾かたむけつ

千せん思し萬ばん慮りよの其その結け果くわ

見み込こみはアあリりナなの瀧たきの上うへ

親おや子この心こころを照てらすなる

鏡かがみの池いけに現あらはれて

猿世さるよの彦ひこの舊蹟地きうせきち

岩窟いはやの側そばに草庵さうあんを

結むすびて神かみを祀まつりつつ

鷹たか依より姫ひめの吾母わがははを

岩窟がんくつ深ふかく忍しのばせて

權謀術けんぼうじゆつ數すうの惡業あくげふと

心こころを惱なやませ痛いためつつ

一ひとつの策さくをねり出だして

われは審神者さにはの役やくとなり

母ははは月照彦つきてるひことなり

テーリスタンやカーリンス

二人ふたりを言觸ことふれ神かみとなし

高砂島たかさじまの全體ぜんたいを

月照彦つきてるひこ大神おほかみに

玉たまを獻けんぜし者ものあらば

すべての願ねがひを叶かなへむと

宣のらせ給たまふと觸ふれまはし

其效そのかうむな空からしからずして

遠とほき近ちかきの國々くにくにの

種々しゆじゆの玉たまをば携たづさへて

詣まうで來きたれる可笑をかしさよ

心こころの底そこは何なんとなく

ウラ恥はづかしく思おもへども

黄金こがねの玉たまの行方ゆくへをば

探さくらむ爲ための此手このて段だて

吾眞心わがまこころを天地あめつちの

神かみも照覽せうらんましまさむ

あゝ惟神々々かむながらかむながら 廣ひろき心こころに宣のり直なほし

善よきに見直みなほし聞直ききなほし 黄金こがねの玉たまを一日いちにちも

早はやく取寄とりよせ給たまへよと 祈いのる折をりしもヒルの國くに

テーナの里さとの酋長しゅうちやうが 獻たてまつりたる黄金わうこんの

玉たまに喉のどをば鳴ならしつつ 夜陰やいんに紛まぎれてアリナ山さん

一行いつかう四人打よにんちわたり 荒野あらのヶ原がはらに露つゆの宿やど

借かる折をりもあれ木この花はなの 神かみの命みことの御化ごけしん身に

戒いましめられて改心かいしんし 原野げんやを涉わたり海うみを越こえ

アマゾン河がはを溯さかのぼり 時雨しぐれの森もりの南森みなみもり

兔うさぎの一族いちぞく住すまひたる 青垣山あをがきやまの聖場せいぢやうに

立現たちあらはれて諸々もろもろの 鳥獸とけだものに三五あななひの

誠まことを諭さとし言靈ことたまの 威力ありよくを示しめす折柄をりからに

帽子ぼうしヶ嶽がだけのあたりより 輝かがやき來きたる靈光れいくわうに

吾等われら一同勇いちどうみ立ち 月大神つきおほかみの御前おんまへに

感謝祈願をなせる折

三五教の高姫が

數多の司を従へて

波立ち狂ふ激流を

鰐の族に助けられ

嚴言靈を宣りながら

進み來るぞ嬉しけれ

ここに吾等は雀躍し

大森林の禽獸に

神の教を蒙りて

一定不變の律法を

制定しながらアマゾンの

河邊に潛む怪獸を

言向け和し天國の

惠の光りを與へつつ

茲に一行十二人

琉と球との靈光を

目當となして西北の

雲間に近き大高山

帽子ヶ嶽に驅け登り

言依別や國依別の

神の命に面會し

嬉し涙に暮れながら

互に無事を祝しつつ

前途の光明樂みて

茲に一行十八の

身魂は山野を打渉り

日數を重ねて漸くに

ウヅの館やかたに來きて見みれば げありがたに有あ難たき末すゑ子こ姫ひめ

捨すて子のこ姫ひめと諸もろ共ともに 遠とほき浪なみぢ路ぢを打うち渡わたり

ここに降かうりん臨りんましまして 治をさめ給たまへる尊たふとさよ

國くに彦ひこ司つかさの貴うづの御み子こ 松まつ若わか彦かひこが忠ちうじつ實じつに

いそしみ給たまふ功いさをし績しは 月つき日ひの如ごとく輝かがやきて

怪あやしき雲くもの影かげもなく 國くに人びと歡あぎ睦むつびつ

高たかさ砂さ島じまの名なに恥はぢず ウうヅの都みやこの名なも清きよく

榮さかえいませる其その中なかに 言こと依より別わけの大だい教けう主しゆ

はるばる此こ處こに下くだりまし 神しん德とくますます赫い灼ちに

輝かがやきわたり給たまひけり アマゾン河がはに迷まよひたる

吾われ等ら一いつ行かう助たすけよと 神かむ素す盞さん鳴なる大神おほかみの

清きよき尊たふとき神かむ懸がり 其その御み教をしへを畏かしこみて

自みづから言こと依より別わけ神かみ 帽ぼうし子がヶだけ嶽のほに登のぼりまし

吾われ等ら一いつ行かうは云いふも更さら アマゾン河がはや森しん林りんに

潛む曲津に無限なる  
仁慈の恵を垂れ給ひ

其神徳はいや高く  
帽子ヶ嶽の頂上に

光り輝き給ひけり  
頃しもあれや現世の

救ひの神と現れませる  
神素盞鳴大神は

高砂島に蟠まる  
醜の靈を言向けて

安きに救ひ助けむと  
天降りましたる尊さよ

思へば思へば罪深き  
吾等親子がはしなくも

尊き神にめぐり會ひ  
御影を拜する嬉しさは

假令天地は變るとも  
千代に八千代に忘れまじ

あゝ惟神々々  
御靈幸はひましまして

今日の親子が喜びを  
幾千代迄も變りなく

恵ませ給へ惟神  
神の御前に願ぎまつる

神の御前に願ぎまつる



と歌ひ終り、自席に着きぬ。

(大正一一・八・二四 舊七・二 松村眞澄録)

第十九章 輕石車〔九一〇〕

今までバラモン教の教主となり、高照山の山麓に宏大なる館を造り、其勢力を四方に擴充したる石熊は、乾の瀧に襖をなす折柄、大蛇に魅入られ、身體強直し、今や危機一髪の際、末子姫の一行に言靈を以て救はれ、茲にいよいよ三五の教に歸順し、テル山峠を乗越え、巽の池の魔神を言向け和さむとして大失敗を演じ、腰を抜かし、一時は兩脚の自由を失ひ困窮の折柄、カールの奇智によりて助けられ、カールの後を追っかけ、末子姫の御後を慕ひて此處に參る詣で、バラモン教の信徒を悉く三五教に導き高照山の靈場をウツの館の末子姫が出張所となし、捨子姫、カールの兩人をして、此神館を守らしめ居たりしが、此度言依別命、ウツ

の館へ降り來れるを機會に、石熊はカールを招き、春彦を伴ひ、言依別の教主に  
從ひ、アマゾン河に立向ひ、漸くにして一行一八人と共に、ウヅの都に凱旋し、  
見れば思ひもかけぬ神素盞鳴大神の御降臨と聞き、歡喜の念に堪へず、茲に祝歌  
をうたつて舞踏し始めた。其歌、

□ 常世の國の自在天

大國彦や大國別の

神の命の樹て給ふ

バラモン教の御教を

此上なき救ひの道となし

心の限り身の限り

神の御前に仕へつつ

沐雨櫛風の勞を積み

教を四方に開きつつ

三五教を目の上の

敵と思ひあやまりて

教の御子をウヅの國

これの館に忍ばせて

いろいろ雑多と畫策を

めぐらし來りし愚かさよ

テル山峠の中腹に

高くかかれる大瀑布

乾の池より降り來る

水に身魂を清めつつ  
天眼通の神力を

授け給へと祈る折  
吾身體は強直し

身動きならぬ不思議さに  
仰いで瀑布を眺むれば

さも恐ろしき大蛇奴が  
眼を怒らしつ口開き

呑み喰はむと構へ居る  
其恐ろしさ身も震ひ

胸も轟き悩む折  
忽ち聞ゆる三五の

誠の道の宣傳歌  
近付き来る嬉しさに

以前の心を取直し  
私に感謝し居たりしが

三千世界の救世主  
神素盞鳴大神の

八人乙女の末子姫  
捨子の姫を伴ひて

吾側近く仕へたる  
カールの司を先頭に

悠悠進み来りまし  
九死一生の危難をば

安々救はせ給ひつつ  
大蛇に向つて言靈の

恵も深き露の玉  
注がせ給へば流石にも

犍猛なりし曲神は

涙を流し喜びて

執着心を解脱なし

恵の綱に曳かれつつ

雲を起して天上に

喜び勇み昇りゆく

あゝ惟神々々

神の恵の尊さよ

末子の姫に従ひて

テル山峠の峻坂を

登りつ下りつ楠の

樹蔭に一夜の雨宿り

末子の姫の一行と

巽の池に立向ひ

世人を惱め喰ふなる

大蛇を言向け和さむと

心も勇み進み行く

神徳足らぬ石熊が

宣る言靈は忽ちに

大蛇の怒を激發し

風吹き荒び浪猛り

雨は車軸と降り來り

何と詮方なき儘に

兜を脱いで三五の

神の司の御前に

心の罪を謝しければ

末子の姫は忽ちに

嚴の言靈宣り上げて

雲霧四方に吹拂ひ

波をば鎮め雨を止め

稜威の神力目のあたり

示させ給ふ尊さよ

忽ち大蛇は解脱して

巽の池の波を割り

姿を此處に現はしつ

感謝しながら空高く

雲を起して昇り行く

末子の姫の一行は

神業終へて池の邊を

後に眺めて去り給ふ

いかにやしけむ石熊は

兩脚自由を失ひて

行歩も自由にならざれば

カールの司を呼びとどめ

救ひを求め鎮魂の

其神業を頼めども

カールは如何思ひけむ

口を極めて嘲弄し

尻をからげて逃げ出す

其無念さに腹を立て

カールの司思ひ知れ

仇敵を討たねばおかないと

雄健ぶ機に兩脚は

思ふが儘に活動し

カールの後を追ひながら

ウツの館に来て見れば

末子の姫や捨子姫

松若彦の眞心を

こめさせ給ひし御待遇

嬉し涙に暮れ果てて

殊恩を感謝し忽ちに

バラモン教の信徒を

三五教に導きて

歸順の誠を表しつつ

朝な夕なに神前に

仕へまつりし折柄に

げに有難き三五の

言依別の神司

此處に現はれ給ひつつ

尊き教を宣り給ふ

あゝ惟神々々

神の恵の有難や

辱なしと眞心を

捧ぐる折しも瑞御靈

神素盞鳴大神は

捨子の姫の口を藉り

アマゾン河の森林に

立向ひたる高姫や

鷹依姫の應援に

早く向へと宣り給ふ

其神勅を畏みて

言依別の大教主

正純彦を始めとし

カール、石熊、春公を

伴ともなひ館やかたを立たち出いでて

千里せんりの原野はらのを打うち渉わたり

帽子ぼうしヶ嶽だけに立たち向むかひ

國くに依より別わけの神かむづ司かさに

對面たいめんされて琉りゅう、球きゅうの

玉たまの光ひかりにアマゾンの

河かはの魔ま神がみや森しん林りんの

猛たけき獸けものの荒すさびをば

言こと向むけ和やはし靈れい光くわうに

照てらさせ給たまふ有あり難がたさ

鷹たか依より姫ひめや高たか姫ひめの

神かみの司つかさと諸もろ共ともに

帽子ぼうしヶ嶽だけに相あひ會くわいし

教けう主しゆの君きみに從したがひて

身みも勇いさましくウツ館やかた

凱がい旋せんしたる目め出で度たさよ

あゝ惟かむ神ながら々々かむながら

神かみの惠めぐみの淺あさからず

朝あさな夕ゆふなに戀こひしたふ

瑞みづの御み靈たまの救きう世せい主しゆ

神かむす素さ盞の鳴を大お神ほは

齋い苑その館やかたを立たち出いでて

自みづから此こ處こに降くだりまし

汚けがれ果はてたる吾われ々われが

身み魂たまを清きよめ與あたへむと

御み幸ゆきありしぞ有あり難がたき

あゝ惟かむ神ながら々々かむながら

神かみの惠めぐみを蒙かうむりて

心こころきたなき石熊いしくまの 重おもき罪つみをば赦ゆるせかし

千代ちよに八千代やちよに神恩しんおんの 尊たふとき限かぎりを忘わすれずに

孫子まごこに傳つたへていや固かたく 仕つかへまつらむ惟神かむながら

瑞みつの御靈みたまの大御神おほみかみ 國魂くにたまがみ神おんまへの御前に

神壽かむほぎ言ことを宣のりあげて 畏かしこみ畏かしこみ願ねぎ申まをす

あゝ惟神かむながらかむながら々々 御靈みたまさち幸さいはひましませよ』

と自分じぶんの懺悔ざんげや経歴けいれきを語かたり、且かつ瑞みつの御靈みたまの大神おほかみの降臨かうりんありし事ことを感謝かんじやし、自席じせき  
に復ふくしぬ。

カールは又またもや立上たちあがつて兩手りやうてを拍うち、腰こしを振ふり、面おも白しろく踊をどりながら歌うたふ。

罪つみもカールの神司かむづかさ 口くちもカールの神司かむづかさ

手て足あしもカールの神司かむづかさ カールガール皆みなさまが  
尊たふとき歌うたを誦よみながら 踊をどつて舞まうて來歴らいれきを



すうせんまんげんなら  
數千萬言竝べ立て  
さいご  
最後に至つて救世主

かむすさのをおほかみ  
神素盞鳴大神の  
ウヅの館やかたに天降あまくだり

ましましたりと聞きくよりも  
手の舞まひ足の踏ふみ所どころ

し  
知らぬ許ばかりの嬉うれしさを  
得意とくいの言靈運轉ことたまうんてんし

かうしやういづが  
高尚優雅のに述あべ上あぐる  
あゝ惟神かむながらかむながら々々

カールも一ひとつ驥尾きびに附ふし  
何か歌うたはにやなるまいと

このば  
此場にスツクと立上たちあがり  
得意とくいの手踊てをどりお目めにかけ

ことたまくるま  
言靈車押おしませう  
バラモン教けうの神司かむつかさ

あたま  
頭の固かたき石熊いしくまが  
高照山たかてるやまの山麓さんろくに

をしへ  
教の館やかたを構かまへつつ  
猜疑さいぎの心深こころふかくして

あななひけつ  
三五教じやますけを邪魔助あそびと  
朝あさな夕ゆふなに思おもひつめ

ウヅの館やかたにまはし者もの  
信者しんじやに化ばかして入いりこませ

あらゆる手て段だてをめぐらして  
漁夫ぎよふの巨利きよりをば占しめむとす

そのにく  
其憎にくさげな行かうど動どうを  
顛覆てんぷくさしてくれむとす

松若彦の前に出で

心の丈を打開けて

願へば松若彦の神

暫し首を傾けて

吐息をもらし宣らすやう

あゝ是非もない是非もない

カールの勝手にするがよい

石熊館に忍び込み

偵察するのはよけれども

虜になつてくれるなよ

お前の心はブカブカと

信仰きまらぬ浮草よ

昨日はこちらの岸に咲き

今日は向方の岸に咲く

安心ならぬと宣へば

カールは左右に首をふり

私も男で御座ります

石熊如何に辨舌を

揮つて籠絡しようとも

どうしてどうして動きませう

必ず心配遊ばすな

細工は流々仕上がり

見てゐて下されませいやと

バラモン教に化けこんで

石熊さまにお氣に入り

お側の重き役となり

信任されたる苦しさを

頃しもあれや素盞鳴の

神かみの尊みことの貴うごの御み子こ

末子すゑこの姫ひめや捨子すてこ姫ひめ

遠とほき波路なみぢを打渡うちわたり

ウヅの館やかたに出いでますと

天てん眼力がんりきかは知しらねども

石熊いしくまさまが前知ぜんちして

吾々われわれ五人ごにんをテてル山やまの

峠たうげを越こえてハはル港みなと

二人ふたりの女をんなを待伏まちぶせて

ものをも言いはせずフふン縛しばり

高たか照山てるやまに歸かへれよと

さもいかめしき御命令ごめいれい

心こころそぐはぬ五人ごにん連づれ

黄たそ昏がれ過すぐる芝しばの上うへ

息いきを休やすらふ折柄をりからに

片方かたへの木蔭こかげに怪あやしくも

細ほそく聞きこゆる怪聲くわいせいに

伴つれの奴等やつらは肝きもつぶし

バラバラバラと逃にげて行ゆく

カールは後あとに只ただ一人ひとり

木蔭こかげに佇たたずみ伺うかがへば

これこそ確たしかに末子すゑこ姫ひめ

捨子すてこの姫ひめと知しつた故ゆゑ

テル山峠やまたうげの案内あんないに

仕つかへまつりて登のぼる折をり

水音みなおと高たかき瀧たきの聲こゑ

末子すゑこの姫ひめの命令めいれいに

乾いぬの瀧たきに往いて見みれば

豈計らむや石熊の

神の司は瀧の下

化石の如く固まりて

两眼計りキヨ口つかせ

苦み居たる氣の毒さ

末子の姫の言靈に

大蛇の靈を解脱させ

石熊さまを従へて

テル山峠の急坂を

節面白く歌ひつつ

降り降りて楠の森

短き夏の一夜を

明かして巽の池の邊に

迎への人と諸共に

一行七人立向ひ

石熊さまの言靈に

大蛇の神は怒り立ち

形勢不穩となりければ

末子の姫は嚴かに

貴の言靈宣り給ひ

大蛇を言向け和しつつ

天に救はせ給ひける

石熊さまは腰抜かし

アイタ、タツタアイタ、

どうしたものが俺の足

一寸も云ふ事きよらぬ

助けて呉れよと泣き出す

妙なことをば云ふ人ぢや

耳なら如何に遠くても  
耳の代りをするものか  
言靈車を押しつれど  
身動きならぬ氣の毒さ  
愛想づかしの數々を  
目を釣り上げて立腹し  
今にぞ思ひ知らせむと  
大地をドンドン響かせて  
足もカールの石熊は  
心の底より諒解し  
御禮を云うて下さつた  
御禮は言うて下さるな  
尊き神の御恵とお前  
足が立つたに違ない  
私にお禮を言ふよりは

聞くであらうが足が又  
早く立て立て早立てと  
壁になつた石熊は  
直してやらねばなるまいと  
竝べ立つれば石熊は  
おのれカール奴馬鹿にすな  
足の痛みを打忘れ  
始めてカールの眞心を  
嬉し涙を流しつつ  
コレコレモウシ石熊さま  
私が直すぢやない程に  
私の心が引立つて  
私にお禮を言ふよりは

あななひけつ 三五教の神様に 感謝祈願の太祝詞

奏上なさるがよからうと 一寸教へてやつたれば

石熊さまは手を拍つて カールさまお前の云ふ通り

寔に感服しましたと ニツと笑うた其顔は

今も吾目にちらついて どしても斯しても忘れぬ

カール、石熊兩人は いよいよ心を合せつつ

末子の姫や松若彦の 教の司に能く仕へ

誠を勵む折柄に 言依別の大教主

突然此處に天降りまし 尊き神の御教を

朝な夕なに宣り給ひ 天の岩戸の開けたる

やうに心も勇み立ち これでいよいよ夜があけた

心にかかる雲もない 嬉し嬉しと喜んで

いそしみ仕ふる時もあれ 神素盞鳴大神の

貴の教に言依別の 瑞の命は吾々を

伴ともなひたま給たまひたまてたま屏風山びやうぶやま  
帽子ぼうしケが嶽だけにたちむか立た向むかひ

時雨しぐれのもり森もりやアマゾンのかは河かはにひそ潜ひそめるまが曲まが神かみを

言こと向むけやは和やはしい悠い々うとう  
再ふたびふた館やかたにがい凱がい旋せんし

喜よろこびい勇いむい時ときももああれ  
肉にく體たい持もつもたも正しやう眞まの

神かむ素す盞さ鳴の神かみ様さまがが  
此こ處こにあら現あらはあられあらまあらしあらまあらすあらと

聞きいたきるき時ときのうれ嬉うれしうれさうれよ  
あかむゝかむ惟かむ神かむ々かむ々かむ

賤いやしわきれ吾われ等らもあ天あめ地つちのの  
惠めぐみのつゆ露つゆにうるるほほひひて

瑞みつのみ御み靈たまのき救きう世せい主しゆ  
神かむ素す盞さ鳴の大おほ神かみに

間ま近ぢかくつか仕つかへまつつるつとつは  
天あめ地つち開ひらけけしは始はじめめよより

これまにま優まさりきしえ喜き悦えつななし  
あかむゝかむ惟かむ神かむ々かむ々かむ

嬉うれしゆきめ夢ゆめはい何いつ時つ迄までも  
醒さめさずさにあれあやあウあツあ館やかた

一い度ちどにひら開ひらくこ木このは花はなのの  
匂におひにめにでまたくまいまつま迄までも

散ちらかずかにあれあやあ惟かむ神かむ  
神かみのみ御み前まへにほ祝ほぎまつまつまり

國くに魂たま神がみのの御おん前まへに  
謹つしみみ敬やまひね願ねぎまつまつまる

謹み敬ひ願ぎまつる』

と歌ひ終り、さも嚴肅なる宴席をドツと許り笑はせける。

(大正一・八・二四 舊七・二 松村眞澄録)

## 第二〇章 瑞の言靈(九一一)

神素盞鳴大神は奥殿より、末子姫、言依別、國依別其他の主なる神司を従へ、  
宴席に現はれ給ひ、一同に向ひ、さも愉快氣に目禮を與へ、座の中央に立たせ給  
ひて、喜びの歌をうたひ給うた。其大御歌、

久方の天津御空のいや高く  
雲押分けて降ります



神伊奘諾の大御神 かむいざなぎのおほみかみ  
神伊奘册の大御神 かむいざなみのおほみかみ  
筑柴の日向の橘の つくしひむかたちばなの  
小戸の青木が原と聞えたる をどあはぎはらきこ  
天教山の中腹に てんけうざんちうぶく  
撞の御柱いや太く つきみはしらふと  
御立て給ひしあが御祖 みたたまたまみおや  
國治立の大神は くにはるたちおほかみ  
天地百の神人の あめつちももしんじん  
百の罪科負ひ給ひ ももつみとがおたま  
烈火の中に身を投じ れつくわなかみとう  
根底の國に至りまし ねそこくにいた  
豊國姫の大神は とよくにひめのおほかみ  
阿波の鳴門に身を投じ あはなるとみとう

又もや根の國底の國  
完美に委曲に取調べ  
ここに二柱の大神は  
再び地上に現はれて  
野立の彦や野立姫  
神の命と世を忍び  
天地百の神人を  
安きに救ひ助けむと  
心悩ませ給ひつつ  
黄金山やヒマラヤの  
峰に現はれましまして  
三五教を樹て給ひ  
再び五六七の神の世を  
開き給ひて萬有を

一切いっさい残のこらず救すくはむと  
經たてと緯よことの機はたを織おり  
深遠しんゑん微妙びめうの神業かむわざを  
開ひらかせ給たまふぞ尊たふとけれ  
豊國とよくに姫ひめの分靈わけみたま  
神素かむす蓋さ鳴ののあが魂たまは  
神伊かむい奘ざ諾なの大神おほかみの  
教をしへの御子みこと生うまれ來きて  
大海おほうな原ばらに漂ただよへる  
島しまの八十やそ島しま八十やその國くに  
完美うまらに委曲つばらに治しらす折をり  
八岐やまた大蛇をろちの醜身しこみ魂たま  
勢猛いきほき醜狐しこぎ  
曲鬼まがおになどの此處ここ彼處かしこ

現あらはれ來きたりて八洲國やしまぐに  
世よは刈菰かりごもと紊みだれ果はて  
山やま河草木かはくさきは枯かれほして  
常世とこよの闇やみとなりにける  
神伊奘諾かむいざなぎの大神おほかみは  
此この慘狀さんじやうをみそなはし  
日ひの稚宮わかみやを出いで立たちて  
天教山てんけうざんに降くだりまし  
我あれに向むかつて宣のたまはく  
汝いましの治しらす國くにならず  
月つきの御國みくにに到いたれよと  
涙なみだ片かたてに宣のり給たまふ  
千せん萬まん無量むりやうの御心みこころを  
拜はいしまつりて久方ひさかたの

高天原に参上り  
姉大神の御前に  
到りて心の清きこと  
詳さに現はし奉らむと  
御側に参りさむらへば  
姉大神は怪しみて  
八洲の河原を中に置き  
誓約をせよと宣り給ふ  
われは畏み忽ちに  
姉のまかせる美須麻琉の  
五つの玉を請ひ受けて  
天の眞名井にふり滌ぎ  
姉大神はわが佩ける  
十握の剣を手に取らせ

天あめの眞ま名な井ゐにふり滌そぎ  
高たか皇みむすび産おほ靈かみの大神の  
御み前まへに畏かしこみ侍さむらひて  
善ぜん惡あく邪じゃ正せいの魂たまわ分けを  
祈いのり給たまへば姉あね神がみは  
嚴いづの御み靈たまとあれましぬ  
清せい明めい無い垢むくのあが靈たまは  
瑞みづの御み靈たまと現あらはれぬ  
嚴いづと瑞みづとの靈たましらべ  
善ぜん惡あく邪じゃ正せいは明あきかに  
鏡かがみの如ごとくなりけり  
さはさりながら八十やそ猛たける  
神かみの命みことは怒いからして  
あが大神おほかみは誠まことなり

瑞みづの御みたま靈たまの救きう世せい主しゆ

いづくに曲まがのあるべきか

答いらへあれよと詰つめよつて

畔あはな放なち溝みぞう埋め頻しき蒔まきし

其他そのほか百ももの荒すさび事こと

伊いたけ猛けり狂くるふ恐おそろしさ

姉あね大神おほかみは畏かしこみて

天あまの岩いはと戸とに隠かくれまし

豊とよ葦あし原はらの瑞みづ穂ほ國くに

再ふたび常とこよ世よの暗やみとなり

黒あや白めも分わかぬ悲かなしさ

百ももの神かみたち等あひはか相あひ議はかり

八や洲すの河かはら原らに集あつまりて

五いつ伴ともの男をの神かむつかさ司

鈿女うづめの神かみの演技わざをぎに

目出度めでたく岩戸いはとは開ひらきける

神素盞かむすさの鳴の我あが魂たまは

天地あめつち百ももの神人かみびとの

千座ちくらの罪つみを負おひながら

高天原たかあまはらを退やはれて

豊葦原とよあしはらの瑞穂國みづほくに

當所あてども知しらぬ長ながの旅たび

此世このよを忍しのぶ身みとなりぬ

さはさりながら伊奘諾いざなぎの

皇大神すめおほかみの御心おんこころ

祕ひそかに我われに傳つたへまし

八岐やまたの大蛇をろちを言こと向むけて

天地てんちを塞ふさぐ村雲むらくもの



大蛇の劍を奪ひ取り

姉大神に獻れ

豐葦原の神國は

頓て汝の治らす國

心を煩ふ事勿れ

斯く宣り終へて久方の

御空に高く去りましぬ

瑞の御靈と現はれて

百八十國を驅けめぐり

フサの國なるウブスナの

大山脈の最高地

我隠れ家と定めつつ

新木の宮を建て竝べ

日の出の別に守らせて

八人乙女を中津國

メソポタミヤの顯恩の

郷に遣はしバラモンの

教の司を三五の

誠の道に言向けて

心を平に安らかに

世界の神人睦び合ひ

松の神世の瑞祥を

千代に八千代に立てむとて

心を配る我が身魂

八人乙女の末の子と

生れ出でたる末子姫

仕組の絲に操られ

高砂島に渡り來て

アルゼンチンのウツ館やかた

現幽二界の救主ぞと

敬うやまはれつつ神かみの道みち

開ひらきいますと聞ききしより

齋苑いその館やかたを立たち出いでて

鳥とりの磐樟船いはくすふねに乘のり

やうやう此處ここに來きて見みれば

言こと依別よりわけの神司かむつかさ

國くに依別よりわけや高姫たかひめや

鷹たか依姫よりひめや龍國たつくに別の

神かみの司つかさの相あひ竝ならび

アマゾン河がはに潛ひそみたる

八岐大蛇やまたをろちの殘黨ざんたうや

猛たけき獸けものを悉ことごとく

あが三五の大道に

言向け和し歸り來る

其勇ましき有様を

見るより心も勇み立ち

汝等正しき神の子に

神祝ぎ言葉を述べむとて

此場に現はれ來りしぞ

あゝ惟神々々

神の大道をよく守り

五六七の神世の神政に

清く仕へて天地の

神の柱となれよかし

神は汝と俱にあり

人は神の子神の宮

小ちひさき欲よくに踏ふみ迷まよひ

寶たからの宮みやを汚けがすなよ

心こころの空そらは冴さえわたり

眞しんによ如よの日月じつげつ晃わう々と

いや永とこしへ久へにかがやきて

下げ界かいの暗やみを照せう臨りんし

神かみの御み子こたる天てん職しよくを

堅かき磐は常とき磐はに立たてよかし

あゝ惟かむ神ながら々かむ々ながら

神かみに誓ちかひて宣のり傳つたふ

神かみに誓ちかひて宣のり諭さとす

朝あさ日は照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

如い何かなる惱なやみに遇あふとても

神かみより受うけし眞心まごころを  
汚けがし損そこなふ事こと勿なれ  
これ素す盞さん鳴をが汝等なんぢらに  
眞心まごころこめて宣のり傳つたふ  
誠まことの道みちの言こと靈たまぞ  
世界せかいを救すくふ神言かみごとぞ  
あゝ惟かむ神々々ながら  
御靈みたま幸さちはひましませよ  
』

と歌うたひ終をはり給たまひて、正座しやうざに着つかせ給たまふ。

（大正一一・八・二四 舊七・二 松村眞澄録）

第二章 奉答歌（九一二）

末子姫を始め、一同の神司は大神の此宣示に感謝の涙堪へ難く、只俯むいて神恩の廣大無邊なるに驚喜するばかりなりき。

捨子姫は一同を代表し、大神に對し、答禮歌を謹嚴なる口調にて歌ひ上げ奉る。其歌、

神伊奘諾大神の御鼻に生れます貴の御子

一度に開く梅の花 結ぶみのりも豊やかに

其味はひも素盞鳴の 澄み切り給ふ神身魂

救ひの神と現れまして 天地百の罪科を

御身一つに負はせつつ 八洲の國に蟠まる

八岐大蛇や醜狐 探女醜女や曲鬼を

誠の道の言靈に 言向け和し救はむと

尊き御身も厭はずに 雪積む山を打渡り

虎伏す野邊を乗り越えて 大海原をはるばると

巡り給ひて人草の

災拂ひ病氣の

神を言向け和しつ

天の鳥船空高く

雲霧分けてテルの國

テル山峠を下に見て

アルゼンチンの神館

八人乙女の貴の御子

末子の姫の現れまして

靈と肉との教もて

世人を救ひ給ひつつ

月日を送る神館

厭ひ給はず天降りまし

三五教の神司

教の御子は云ふも更

青人草の末までも

恵の露を與へむと

出でさせ給ひし尊さよ

末子の姫や捨子姫

言依別の神司

國依別や高姫や

鷹依姫や龍國別の

教司は神恩の

いやちこなるに感歎し

感謝の詞さへ口籠る

實にも嬉しき此聖場

厭はせ給はず何時迄も

身魂を寛ぎ給ひつつ



高砂島の國人に

瑞の御靈のうるほひを

恵ませ給へ惟神

神の司を代表し

捨子の姫が畏みて

御前に願ひ奉る

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

誠一つを立て通し

此世を守り恵みます

神素盞鳴大神の

大御心を慎みて

夢寐にも忘れず三五の

教を四方に擴充し

大御惠の萬一に

酬い奉らむ吾々が

清き心を諾なひて

ウヅの都に末永く

御跡を垂れさせ給へかし

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と簡單に挨拶を述べ終る。

神素盞鳴大神は、満足げに微笑み給ひながら、末子姫、言依別命を従へ、再び

奥殿深く進み入り給ふ。

安彦、宗彦、秋山別、モリス、正純彦、常彦、春彦、ヨブ、テーリスタン、カー

リンス、春公などの祝歌あれども、餘りくだくだしければ、省略する事となしぬ。

一同は神殿に詣で天津祝詞を聲も涼しく奏上し、終つて天の數歌をうたひ上げ、

神言を奏上し、神恩を今更の如く深く厚く感謝し、各々與へられたる席に着き、

暖かなる一夜の夢を結ぶ事となりぬ。

茲に神素盞鳴大神は、奥殿に於て言依別命、松若彦の司と謀り、末子の姫の一

身上に關する大問題につき協議を凝らし給うた。果して如何なる協議が纏まつた

であらうか。あゝ惟神靈幸倍坐世。

今日は大正十一年八月二十四日舊七月二日、昨夜來の豪雨に狩野川は濁水氾濫

し、水聲轟々として、川邊の館に於ける口述は聲低き物語、聞取り難きを慮り、

新築されし臨時教主殿の奥の間に於て、筆者松村氏と共に第三十二卷の靈界物語

を編むこととなつた。湯本館の二階には綾の聖地より、福島、星田兩女史出張し、

何事か筆を走らせ例の筆先を認めて居られる。忽ち飛電あり。二代教主、瑞月に急々相談あり、昨夜八時の急行にて來ると。瑞月は雨の館に身を横へながら人待顔に述べ立つる。惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・八・二四 舊七・二 松村眞澄録)

#### 第四篇 天祥地瑞

#### 第二二章 橋架(九一三)

國依別、高姫、鷹依姫、龍國別其他の宣傳使は各休息室を與へられ、夜は其處に眠り、筋骨を休ませて居た。翌朝早々國依別の一室に松若彦は訪ね來り、

「國依別様、御早う御座います。就いてはあなたに折入つて御相談が御座います。早くから御邪魔を致しました。」

と心ありげに笑を含んでゐる。國依別は、

「これは又改まつた御言葉、私に對し、御相談とはどんな事で御座いますか。明智の言依別様が居らせられる以上は、どうぞ命様に御相談下さつたら、如何でせうかなア。」

「實の所は夜前神素盞鳴大神様の御召しに依り、言依別様及び私と三人三つ巴になつて、御相談あつた結果、私が特命全權公使に選まれて参りましたので御座います。萬一此使が、不成功に終るやうな事があれば、此松若彦は海外旅行券を交附された手前、腹を切らねばならないのです。」

「そりやマア大變な御使命と見えますが、どうぞ早く仰有つて下さいませ。私の力の及ぶ事ならば、神様に捧げた此體、如何なる御用も承はるで御座いませう。」

「實は私の父國彦は、正鹿山津見神様が五月姫様と共に黄泉比良坂の戦ひに御出陣の砌、ウツの國の人民は申すも更なり、此神館を御預け遊ばし、やがて時來ら

ば、神素盞鳴大神様の瑞の御霊の貴の御子、此國に降り給ふことあるべし。それ迄汝は我命を守つて、此國及び神館を預り呉れよとの嚴命で御座いました。父は幸か不幸か、最早幽界に参りましたが、後に残つた私が父の後を繼ぎ、此館を守つて居ります所へ、正鹿山津見の神様の御仰せの如く、瑞の御霊の大神様の御娘子、末子姫様が御越し遊ばしたので、直ちに御館を姫様に御渡し申し、此國をも御渡しをして、私は御存じの通り總司として仕へて参りました。然るに此度、御父君神素盞鳴尊、突然天降り給ひ、大變に御悦び遊ばし、且つ末子姫も最早良い年頃であるから、適當な夫を持たせたいのだが……との御尋ね、招かれた吾々始め言依別命様は、言下に國依別様を御婿様になされましたら如何でせうと申し上げし處、大神様は大變に御悦び遊ばされ、實は其事に就て、はるばるとここまで出て來たのだ。どうぞ神徳の強き國依別を末子姫の夫になつて呉れる様、其方は取り持てよ……との御命令取る物も取り敢ず、あなたに於ても御異存は御座いますまいと思ひまして……へ、へ、へ、一寸全權公使の役を拜命し、御伺ひに参つた次第で御座います。どうぞ善は急げですから、早く善き御返事を御願ひ申します」

國依別は案に相違の面持にて首を傾け、雙手を組み、太き息をつきながら、ものを言はず兩眼より涙さへ滴らしつつ居る。

「モシ國依別さま、あなたは何それ程御思案なされますか、見れば涙を御垂らしになつてゐるやうですなア。如何しても御氣に入らないのですか？」

「イエイエどうしてどうして氣に入らぬ所か、餘りの事で、勿體なくて、申し上げる言葉も御座いませぬ。私は若い時より道樂の有文を盡し、澤山の女殺し、御家

倒し、家潰しをやつてきた罪の塊で御座います。今日は三五教の宣傳使として、女と一切の關係を絶ち、生涯獨身生活を續ける覺悟を致して居るので御座います。

如何に大神様の思召しなればとて、私の様な横着者の成れの果て、何程魂が研げたと申しても、白い布に墨が浸んだのと同様に、いくら洗つても元の白い生地には

はなりません。つまり靈魂上の疵者で御座います。斯様な疵者が水晶身魂の生の處女なる末子姫様の夫になるなぞと云ふ事は、どうしても良心が咎めてなりません。

ぬ。冥加の程が恐ろしくなつて参りました。どうぞ右様の次第で御座いますから、悪しからず、大神様に私の素性を素破ぬいた上、宜しく御斷り下さいませ」

「左様な御遠慮はチツとも要りませぬ。神素盞鳴大神様は、あなたがバラモン教の信者であつた事も、女泣かしの御家倒し、家潰しをなさつた事も、大の悪戯者で居らつしやつた事も、松鷹彦様のお宿を知らず識らずに訪ね、お勝殿といろいろのローマンズのあつた事、それから眞浦様の弟なる事、一切萬事御取調の上の事で御座いますから、決してそんな御遠慮は要りませぬ。言依別様も口を極めてあなたの美點をあげ、又悪い癖を一つも残らず、大神様に申上げられました。所が大神様は大變な御機嫌で……あゝ其奴は益々面白男だ、氣に入つた、どうぞ早く末子姫の夫にしたいものだ……との思召して御座いましたよ……國依別様、あなたは言依別様から承れば、随分からかひの上手な御方ぢやさうですから、私がおんな事をいつて、あなたをからかつてゐると思はれるか知りませぬが、今日は眞劍ですから、どうぞ眞面目に聞いて下さい」

「から買ひも豆腐買も、厄介も喧譁買も、法螺貝もドブ貝も心靈研究會も、大日本修齋會も、議會も日本海も皆目ありませぬワイ。眞正銘の偽りなきあなたの御言葉、國依別、實に光榮に存じます。併しながら貴族と卑族との結婚は提燈に

釣鐘、釣合はぬは不縁の元ですから、要らぬ苦勞をさせずに、どうぞ體よく斷つて下さい」

「エ、國依別さま、眞劍ですよ。又例の癖を出して、正直な私をじらしなさるのですか。あなたの本守護神はキツト契約濟の實印を押捺して御座るに間違ありませんよ。又世の諺にも、戀に上下の隔てなしと云ふぢやありませんか。隔のないのが所謂戀の神聖なる所以です」

「私は一旦婦人との關係を心の底より斷念して居ますから、戀なんか心に起した事はありません。鯉が瀧上りをし、夕立に乗つて天上する様な險呑な結婚問題は、どうぞ御頼みですから、早く撤廢して下さい」

「又しても【鮒】々と埒のあかぬ、あなたの御言葉、末子姫様があの【飯鞘】、【尻目】で、お前さまの後姿を睨んで、あの男を【鱈】なとして、私の【オツトセイ】に持たいたいものだ、明けても暮れても、【つばす】を呑みこんで、【あかえ】年だから、【鯉】の炎をもやして御座るのだから、どうぞ色よい【あぢ】のよい返事をして下さい。あなたも【鱒】々【鯖】けた人間だと云つて、【鱧】



はまりしてゐられるのだ。それにお前さまが【尾】をふり、【鰭】をピンとはねるやうな事をなさつたら……あゝ私も折角の【鯉】が叶はねば、一層の事、【ちぬ鯛】、小【鮒】な浮世に【生鰈】したかて、【サヨリ】がないからと云つて淵川へ身を投げて了はれたら、お前さま何程【魚】々とうろついて悔んでもあとの祭り、大神様からは、是程事を分けて言ふのに、【鯉】の様にはねつけるとは、【ギギシイラ】ぬ奴だと御立腹遊ばすかも知れませぬ。私はこれ程【白魚】もやさして、お前さまはそれでも氣が済むの【貝】な。マア厭でも添うて見なさい。仕舞にや【すすき】になりますぞや、【ヤマメ】で暮すより【鮎】らしい奥さまと【ガザミ】に手を引いて、山野を時々跋涉なさるのも乙ですよ。これ程私に八【カマス】【鰯】ておいて、だまつてゐるとは、餘りぢやありませんか。今日は大神様の思し召だから、瓢箪【鯰】では通りませぬぞや」

「【エエ八モ】【鰈】【ヤガラ】腥い厄介坊主の自墮落上人で御座いますから、どうぞ今日限りそんな事を言つて下さるな。女の【スキ身】も【刺身】もモウ若い時から食ひあいて來ました。夜も晝も【レコ貝】に【蛤】だつたものだから、

どうぞ、「カマス」において下さい。此事に付ては、「イカナゴ」とも「飯蛸」致す譯には参りませぬ。アハ、ハ、ハ、ハ、

松若彦は國依別の背中を、後へまはつてポンと叩き、

「コレ國依別さま！ 又しても、あなたは、からかひ病が起りましたね」

「カラカギ」でも、「鯰」でも「フンゾクラヒ」でもありませぬよ。小雲川で

石の魚を釣つて「フンゾクラヒ」だと云つて、高姫さまに贈つた事があります。

随分固い魚でした。其通り私は今は鯉の欲が化石してしまひ、石地藏の様な冷酷な

人間ですから、到底此縁談は温まりますまい。鯉と云ふ奴は水の中に常住してゐ

ますから、随分體が冷えてゐますからね、アハ、ハ、ハ、

「コレ國依別さま、大國主の神さまの妻呼びの歌を知つてますだらう、男子たる

者はさうなくては到底世に立つことは出来ませぬ。情を知らずして、どうして

宣傳使が完全に勤まりますか。八千矛の神さまを御覽なさい。はるばると出雲の

國から越の國まで、腰辨當でお出でになつただちやありませんか。其時のお歌に、

八千矛の神の命は 八洲國 妻求ぎかねて  
遠々し 越の國に 賢し女を ありと聞かして  
麗し女を ありと聞こして さよばひに ありたたし  
結婚にあり通はせ 太刀が緒も 未だ解かずて  
襲ひをも 未だ解かねば 乙女の 鳴すや板戸を  
押そぶらひ 吾が立たせれば 引こずらひ 吾が立たせれば  
青山に 鶺鴒は鳴き 野鳥 雉子は響む  
庭つ鳥 鷄は鳴く 慨たくも 鳴くなる鳥か  
此の鳥も 打ち惱めさせね いしたふや 天はせづかひ  
ことの語り言も こをば

と歌はしやつて、越の國の沼河姫様の板の戸を、夜の夜中に押開け這入らうと遊ばす、沼河姫さまは這入られては大變と、男と女が押そぶらひ、引こづらひを永らく遊ばした末、遂に大國主命さまの熱心なる戀に感じ、沼河姫さまは戸の中か

八千矛の神の命 軟え草の女にしあれば

吾が心 浦渚の鳥ぞ 今こそは 千鳥にあらめ

のちわ 和鳥にあらむを いのちは な死せ給ひそ

いしたふや 天はせづかひ

ことの語り言も こそば

青山に 日が隠らば 烏羽玉の 夜は出でなむ

旭の 笑み榮え来て 栲綱の 白き腕

沫雪の 弱かやる胸を そ叩き 叩き拱がり

眞玉手 玉手さしまき 股長に 寝はなさむを

あやに 勿戀聞こし 八千矛の 神の命

ことの語り言も こそば

と歌つて沼河姫がたうとう降参つて了ひ、實に神聖なローマンスが行はれたぢや  
ありませぬか。それに何ぞや、お前さまは、八千矛の神一名大國主の神さまとは  
反對で沼河姫様よりズツと綺麗な賢女麗女にラバーされて、それを何とも思はず、  
すげなくもエツパツパを喰はす考へですか。本當に人の悪い唐變木だなア……オ  
ツトドツコイ、餘り一心になつて、ツイ言靈が濁りました。どうぞ早く、

綾垣のふはやが下に 蟲衾 柔やが下に  
拷衾 亮ぐが下に 沫雪の弱かやる胸を  
拷綱の白き腕 そ叩き 叩き拱がり  
眞玉手 玉手差纏き 股長に 寢をし宿せ  
豊御酒 獻らせ

と云ふやうに御返事をして下さい。外の方の御使と違ひ、大神様の思召だから、  
これ計りは邪が非でも聞いて貰はなくちや、松若彦の男が立ちませぬ」

「大神様を始め末子姫様に於て、御異存なければ御世話になりませう。其代りに古疵だらけの國依別ですから、何時持病が再發して、御姫様に眉氣を逆立てさしたり、牙をむかせたり、死ぬの走るの、ひまをくれのと亂癡氣騒ぎをさすかも知れませぬから、それが御承知なら、宜しく御取持願ひます」

「アハ、ハ、ハ、面白い面白い、私もそれがズンと氣に入つた……國依別さま、いよいよ御結婚が整へば、あなたはウツの國の司、私は御家來で御座いますから、どうぞ末永くお召使ひ下さいませ。今迄の御無禮な申し様、只今限り御忘れの程を願ひます」

「サア忽ちさうなるから、窮屈でたまらぬ。それだから獨身生活がしたいのだよ。あんたはん（阿彌陀はん）、ぶつたはん（佛陀はん）、大將さんと皆の連中にピヨピヨ頭を下げられ、敬遠主義を取られるやうになつて了つちや、根つから世の中が無味乾燥で、面白くも何ともなくなつて了ふ。あゝ折角自由の世界へ解放されたと思つたら、又もや窮屈な、お慈悲の獄屋に繋がねばならぬのかいなア。エ、こんな事なら紅井姫でも伴らつて來て、自分の女房のやうに見せて居つ

たら、こんな問題は起らなかつただらうに、エ、有難迷惑とは此事だ。女が男にお膳を末子姫と来てゐるのだから、さう無下に無愛想に捨子姫する譯にも行こまい、アハ、ハ、ハ、ハ、

「なるべく、お氣樂な様に持ちかけますから、どうぞ取越苦勞をなさらずに、決心をして下さいませ」

「ハイ、是非に及びませぬ。大神の御言葉、あなたの御取持、謹んで御受け致します」

とキツパリ答ふれば、松若彦はニコニコしながら軽く一禮し、急ぎ奥殿指して進み入る。

(大正一・八・二四 舊七・二 松村眞澄録)

第二三章 老婆心切(九一四)

國依別、末子姫の結婚の噂は、忽ち館の内外に雷の如く駄賃取らずの飛脚の口から喧傳されて了つた。之を聞いた高姫はムツクと立上り、言依別命の居間を訪ねた。言依別命は結婚の準備に就いて、いろいろと獨り心を働かせて居た所である。高姫は襖をソツと引開け、叮嚀に頭を下げ、

「言依別様、御邪魔を致しますが、一寸貴方に御相談申したきこと、否御尋ね申したき事が御座いました。お差支は御座いますまいかなア」

「ハイ、別に大した用も御座いませぬ。どうぞ御這入り下さいませ」

と氣乗りのせめ様な言葉附きである。高姫はツカツカと言依別の前に進み、行儀よく膝を折つてすわり、兩手を膝の上に乗せ、極めて謹嚴な態度で、

「言依別様、承はりますれば、末子姫様に對し國依別の宣傳使が養子婿になられるにきまつたとか云ふ専らの噂ですが、それは實際の御話で御座いますか？」

「ハイ、實際で御座います。私と松若彦兩人の肝煎で漸く婚約が成立致しました」

「それは又怪しからぬ事ぢや御座いませぬか。三千世界の救ひ主、水晶玉の神素盞鳴大神様の御娘子、生粹の大和魂の末子姫様に娶はすに、人もあらうに、國依



別の様な悪戯者を御周旋なさるとは、餘りぢや御座いませぬか。能う考へて御覽なさい、女だましの御家倒し、家潰しの天則違反者、瓢輕者、擲掄上手の、至極粗末に出来上つた男……丸で鷲と烏の夫婦ぢやありませんか。其様な汚れた身魂を水晶の生の末子姫様に御世話をするなんて、折角の結構な身魂を又紊して了ふぢやありませんか。さうすれば、折角ウツの國が五六七の世になりかけてゐるのに、再び泥海となり、上げも下しもならぬやうなことが出来致します。私は此縁談ばかりは假令大神様が何と仰せられようとも、神界の爲御道の爲御家の爲に、どこ迄も反對せなくては置きませぬぞえ。まだ幸ひ結婚の式も擧げてゐらつしやらないのだから、今の間ならば如何でもなります。縁談と云ふものは、飯たく間にも冷ると云ふ事だ。此話を取消した所で、今ならば何のイサクサも起りますまい。國依別が若しもゴテゴテ云ふならば、及ばずながら高姫が物の道理を説き諭し、納得させて見せませう。又末子姫様が如何してもお聞きにならなければ、高姫の老婆心と言はれるか知りませぬが、此道にかけたら千軍萬馬の功を経た高姫、三寸の舌鋒を以て、どちらも得心の行く様になだめすかし、此結婚問題を蛇尾に

して見せませう。……言依別さま、此事はどうぞ私に一任して下さいませ。キツと成功させて見せませうから……」

一旦男子と男子が契約した以上は、今となつて動かすことは出来ませぬ。私も男です。一旦言ひ出した事は後へは引きませぬ。第一大神様の御所望ですから」

假令大神様の御所望であらうとも、なぜお前さまは御忠言申上げないのだ。お髭の塵を拂つて自分の地位を安全に守らうと云ふ御考へだらう。良薬は口に苦し、諫言は耳に逆らふとやら、至誠を以て諫め奉り、もし聞かなければ、潔く死を以て決すると云ふ、お前さまに誠意がありさへすれば、こんな不都合な話は持上らない筈だ。あんな者を末子姫様の夫にしようものなら、それこそ三五教の權威は忽ち地に落ち、末子姫様の御信用はサツパリ、ゼロとなつて了ひますよ」

「あんな者が斯んな者になつたと云ふ仕組でせうかい、アハ、アハ、」  
「コレ笑ひごつちやありません。千騎一騎の國家興亡に關する此場合、氣樂さうに面をあげてアハ、とはソリヤ何と云ふ心得違ひな事ですか。それだから年の若い者は困ると云ふのだ。何程憎まれても、此高姫が構はねば三五教はサツ

パリ駄目だ。アア、氣のもめる事だ。肩も腕もメキメキ云うて来たわいのう」  
「折角の御親切な御注意、實に有難う御座います。併し乍ら此問題に就いては、一分たりとて動かす事は出来ませぬ。……高姫様、どうぞ貴女もゆつくり御考へ下さいませ。私は少し取急ぐ用事が御座いますから、失禮を致します」  
「チト煙たうなつて来ましたかなア。ドレドレ若い方のお側へ、齒拔婆アが出て来て熱を吹き、煙たがられて居るよりも、是から國依別の居間へ行つて、一つドナ意見だか叩いて来ませう。將を射むと欲する者は先づ其馬を射よだ。何と云つても言依別さまは、年が若いから、こんな事の談判は厭だらう。それも無理もない、憎まれ序に高姫が、お道の爲に、國依別の改心する所まで、居すわり談判をやつて来ませう」

と呟きながら、イソイソと此場を立つて出でて行く。

國依別は高姫の意見に来るとは夢にも知らず、  
「あゝ是から俺も窮屈な生活に入らねばならぬか。今の間に氣樂のしたんのうをしておかうかい」

と窓の戸をガラリとあけ、赤裸になつて、仰向けになり、手足をピンピンさせて、座敷運動に餘念なかつた。そこへ高姫はあわただしくガラリと戸を開け入り來り、此態を見て目を丸くし、口を尖らせ、

「マアマアマア國さまかいな。其態は一體何の事だい！ 誰も知らぬかと思つて其態は何ぢやいな。ヤツパリ人の居る所では鹿爪らしうしてゐても、鍍金が剥げて三つ兒の癖は百迄とやら、お前は若い時から、そんな不規律な生活をして來たのだらう。エ、困つたものだ。時々刻々に愛想がつきて來た。……コレ國依別どの、高姫ですよ、起きて貰ひませう」

「高姫さま、一寸ここを寫眞にうつして、大神様や末子姫様の御前に御覽に入れて下さいな。國依別も實にトチ面棒をふつてゐますワイ」

「エ、又しても、四ツ足の正體をあらはし、其態は何の事だい。大神様や末子姫様に寫眞にとつて見せてくれなんて、ヘン、自惚にも程がある。誰だつてそんなところを見ようものなら、三年の戀が一度に醒めますぞや。或處に若い娘が綺麗な若い男を戀慕ひ、よい仲になつて居つたが、其男が女の前で尻をまくり、庇を一

つブンと放つたが最後、其女はそれきり、戀しい男が見るも厭になつて了うた例  
しがありますぞえ。それにそんな態を末子姫様に御覽に入れてくれとは餘りぢや  
ないか。色男氣取で結構な結婚を申し込まれ、餘り嬉しいので逆上して了ひ、赤  
裸になつて、一角よい姿と思ひ……此姿を戀女に見せ……とはよい加減に呆けて  
おきなさい。エ、見つともない、早く着物を着なさらぬか！

何分お門が廣いものだから、こんな風でもして撃退策でも構じなけりや、やり  
切れませぬワイ。ア、あちらからも此方からも、目ひき袖ひき連中が澤山で、國  
依別も實に迷惑致して居るぞよ。男は裸百貫と申して、飾りのないのが値打であ  
るぞよ。元の生れ赤兒になりて神の御用を致して下されよ。生れ赤兒と申せば、  
みんな丸裸ばかりであるぞよ。アツハ、ハ、ハ、

コレ國どの、お前は一國の大將にでもならうと云ふ千騎一騎の大峠に差掛つて  
居り乍ら、チツと謹んだら如何だいなア。油斷を致すと、坂に車を押すが如く後  
へ戻りますぞえ

あとへ戻るやうに逆になつて、油斷でなうて冗談をして逆様車を押してゐるの

だ、アツハ、。ア、ア、早う此處を誰か、一寸覗いて愛想をつかして呉れな  
いかな。高姫さまに愛想つかされても、根つから目的が達しませぬワイ」

「コレ國どの」

と聲を高め、國依別の太腿を三つ四つ平手でピシヤピシヤと擲りつける。國依別  
は此機みに、ガバとはねおき、慌しく窓際にかけておいた單衣をひつ被り、三尺  
帯を無雑作にキリキリとまきつけ、ドスンと高姫の前にすわり込んだ。

「高姫様、何の御用で御座いますかな。どうぞ實際の事を仰有つて下さい」

「お樂みでせうな！ 此頃は半日の日も百日も経つやうな氣がするでせう。イヤ  
もう御心配御察し申しますワイ。併し乍ら、月にも盈つる虧くるがあり、村雲の  
かくすこともあり、綺麗な花には蟲がつき、嵐が夜の間に吹いて来て、無残にも  
散らすことがありますぞや。もう大丈夫此方の者だと、笑壺に入つて居ると、夜  
の間に天候忽ち激變し、女の方から秋の空、凧の冷たい風が吹いて来ぬとも限り  
ませぬぞや。さうなつてから、梟鳥が夜食に外れたやうな、約らぬ顔を致しても、  
何程アフンと致しても、後の祭り、取返しは出来ませぬぞや。それよりも男ら

しく今の間に、花の散らされぬ間に、お前さまの方から、キレイサツパリと縁談を御断りなさい。國依別どののやうな、……言ふとすまぬが……ガンガラと水晶の生粹のお姫様と夫婦になつても、末子姫が遂げられますまい。悪い事は云ひませぬぞえ。今の間に男らしう破談をなさい。さうしたら天晴れ國依別の男前が上りますぞや。此廣いウヅの國の第一美人で、而も評判のよい御姫様を、國依別が一つポンと肱鐵をかましたと云ふことが世間に擴がつて見なさい。それこそどれ丈お前さまの威徳が上るか知れたものぢやない。さうして牛は牛づれ馬は馬連れと云つて、似合うた女房を貰ひ、誰憚らず天下を横行闊歩する方が、窮屈な籠の鳥の様な目に遇ひ、一人の姫様に忠勤振りを發揮するよりも何程徳か分りませぬぞえ。お前さまが姫様の夫になり、天下の權利を握るやうな事があつたら、それこそ天地がひつくりかへりますぞや、いかな高姫も神様の御用はやめねばなりませぬワイ。かうズケズケと私が云ふので、お前さまは御氣に入らぬだらうが、チツとは私の言ふ事も、聞きなさつたがよからう。随分お前さまもいたづらぢやないか。野天狗か何か知らぬが、如意寶珠の玉や其他二つの玉は、近江の國の竹生

島に隠してあるなどと、大それた嘘を言つて、はるばると年を老つた吾々をチヨ口まかすと云ふ腕前だから、私の言葉がチツト位きついても辛抱しなさい」

「アツハ、面白い面白い、私も實は今度の結婚は厭でたまらないのだけれど、餘り大神様や言依別様、其外の方々の御熱心な御取りなしで斷る譯にも行かず、義理にせめられ承諾したのだから、さうけなりさうに法界恪氣をして下さるな。國依別も實に迷惑致しますワイ」

「オツホ、厭で叶はぬなどと、よう言へたものだ。此縁談を蛇尾にされるのが、イヤでイヤで叶はぬのだらう。そんなテレ隠しを云つたつて、日の出神の生宮……オツトドツコイ、是は云ふのぢやなかつた……高姫の黒い目でチヤンと睨んだら間違ひつこはありませぬぞや」

「アア、困つた事が出来て来たワイ。どうしたらよからうな、この國どのも何程困つても仕方がない。此縁談ばかりは言依別が何と言はうと、假令天地がかへらうと、金輪際水をさして、グチャグチャにして了はなくちや、折角大神様が艱難苦勞なされてお造り遊ばしたウツの國が總崩れになつて了ひますワイ。お



前一人さへ改心が出来たら、國中の者が喜ぶのだから、女の一人位は男らしい思ひ切つて數多の人民を助けた方が、何程立派か知れませぬぜ。又何程愉快か分りますまいがなア」

「アア、最早幽界も神界もいやになつて了つた。現界の悪い……高姫さま、私の腹の底が如何しても、神界（眞解）出来ませぬのかい」

「それは何を【ユーカイ】……皆目お前さまの腹の底を諒解することが出来ぬぢやないかい」

「アア、仕方がない……私は一寸急用がありますので、そこ迄往つて來ます。どうぞ又四五日したら、ゆつくりと遊びにお出で下さりませ」

「最早明日に迫つた此結婚、四五日してから來て下さい……なんて、ヘン、甘いことを仰有りますワイ。どうでも斯うでも、今夜の間に前所の所存をきめさせて、其上末子姫さまに御意見をして來ねばならぬのだから、さう逃腰にならずに、ジツクリと聞きなさい」

「聞きなさいつても、危機一髪でも聞きませぬワイ……御免候へ、高姫さま、私

は結婚の用意が急ぎますから、髪を梳いたり、髯をそつたり、チツクを一寸つけたり、頬紅もさしたり、口紅もチツとあしらはねばならず、鏡も一寸見て來ねばなりませぬ。そんな色の黒い顔のお婆アさまに相手になつてをると、ますます末子姫さまが戀しうなつて來る。左様なら……」

とあわてて飛び出さうとする。高姫は後よりグツと抱きとめ、

「コレコレ國どの、何處へ行くのだい。マア待ちなされ、ジツクリとすわつて、天地の道理を聞いて下さい。決して悪いことは申しませぬぞや」

「どうぞ離して下さい。そんな固い手で握られると痛くて仕方がない。一時も早う末子姫さまのお側へ行かねばならぬワイなア。岩に抱かれるか、眞綿に抱かれるかと云ふ程懸隔があるのだから堪らない……高姫さま、どうぞ後生だから放して頂戴な」

「エ、是が放してなるものかい」

「高姫さま、今これが放してなるものか、と云ひましたな。そんならヤツパリ二人の仲を離さぬといふ御意見ですか？」

「そりや話が違ふ。離れさすと云ふ話だ。今がお前の運のきめ所、サアさつぱりここでツンと思ひ切りましたと立派に言擧げしなさい」

「そんなら……スツカリ思ひ切りました」

「ヤレヤレ嬉しや、お前は本當に見上げたものだよ」

「スツカリ思ひ切つたのは、皺苦茶婆アの高姫さまとの交際だ、アハ、ハ、ハ、」

「エ、國どの、覺えて居なさいや。明日の晩にはアフンとさして上げますぞや、女の一心岩でもつきぬく、これが通らいでなるものかい！」

と目をつり上げながら、あわただしく此場を立去る。

（大正一一・八・二四 舊七・二 松村眞澄録）

## 第二四章 冷氷（九一五）

高姫は國依別の室を立出で、應援を求めて此目的を達せむと、鷹依姫、龍國別

の一室を訪問した。

「御免なさいませ……鷹依姫さま、龍國別さま、何とマア親子仲のよいこと、あなたも孝行な息子を持つて幸福ですなア。私の様な獨身者は親子睦まじう、さうして御座る所を拜見致しますと、實に羨ましくなつて來ました。本當に親子の圓滿なのは見よいものですワイ……時にお二人さまに至急御相談したい事があつて參りました。どうぞ暫くの間御邪魔をさして下さいませ」

「それはマア能う來て下さいました。倅の龍國別が孝行にして呉れますので、私も全く神様のお蔭だと思ひ、朝な夕なに感謝を致して居ります。若い時には随分極道で、何べんも親を泣かせたもので御座いますが、年の藥で此様な孝行な息子になつてくれました。子が無うて泣く親は無いが、子がある爲に泣く親は、世界に澤山御座いますでなア。私は神様のおかげで、子がある爲に日々勇んで暮して居ります」

「それは何より結構で御座います。併しお二人さま、一つ聞いて貰はねばならぬことが突發して來ました」

龍國「高姫さま、ソリヤ大方國依別さまのお目出度い話でせう。本當に結構ですなア。不斷から一寸變つた偉い男だと感服してゐましたが、ヤツパリ梅檀は二葉より馨し、蛇は寸にして人を呑むとやら、ヤツパリ身魂の性來は争はれぬものですワイ。私は今迄心易い友だちとして、ワレかオレかでつき合つて來ましたが、モウ是からは態度を改めねばならなくなつて來ました。本當に人の出世は分らぬものですな……高姫さま、あなたは國依別さまの結婚について御祝をしたいから、どんな物を送つたらよからうと云ふ同情ある御相談でせう……なアお母アさま」

「何から何まで、耳から鼻まで、目から口までつきぬけるやうな高姫さまが御座るのだから、メツタに仰有る事に抜目はありませぬ。高姫さまの御意見に御任せなさい」

「ハイ」

「コレ龍國別さま、お前さまのお母アさまの仰有つた通り、何事も私の意見に従ふのだよ」

「ハイ、従ひますよ。何を祝うたら宜しいでせうなア」

「工、辛氣臭い、お祝ひ所の騒ぎですか。國家の興亡危機一髮の間に在り、地異天變の大騒動、何を氣樂な、悠然として控へて御座るのだい。マア能う考へて御覽、女たらしの御家倒し、家潰しの國依別のやうなガラクタ身魂と、誠水晶の生粹の大和魂の末子姫様と夫婦にでもしようものなら、それこそ白米の中へ砂を混ぜたやうなものだ。どうにもかうにも「ママ」になりませぬぞや。何とかして此縁談を冷す工夫をせなくては、國家の一大事だから御相談に來ましたのぢや」

「冷す相談ですか？ 此暑いのに俄に方法もありませぬワ。何しろ百度以上に逆上せ上つてゐるのですからなア。併し冷さぬと腐敗の虞があります。あなた御苦勞だが、一つ龍紋氷室へ走つて行つて、百貫目程氷を買つて來て下さいな」

「コレ龍どの、氷の話ぢやありませんや。お前さまは此暑さで氷の事計り思つてゐるものだから、何を云つても皆氷に聞えるのだよ」

「チツとカチワリにして、細かう云つて下さらぬと、氷解することが出來ませぬ

ワイ」

「コレコレお前さまは私がこれ程熱心に話をしよるのに、頭から冷かすのかいな

ア

高姫さま、今冷さうと云つて来たぢやないか。さうだからお前さまの意見に従つて、冷かしかかかつて居るのだよ。冷笑冷罵の言靈を一つ進上致しませうか。

今朝から井戸の中へ吊り下しておいたのだから……

エ、譯の分らぬ男だなア。西瓜の事を誰が云つていますか！

コレコレ龍國別……勿體ない、高姫さまに向つて、さうツベコベと口答するも

のぢやありませんえ……なア高姫さま、若い者と云ふものは、實に側に聞いて

居つても、氷の側に居るやうに、ヒヤヒヤするやうな事計り申します。どうぞ冷

静にお聞き下さいませ

高姫さま、お前さまは善言美詞の言靈を忘れましたか？ 國依別さまがモウ一

息で成功すると云ふ閒際になつて、昔のアラをさらけ出したり、反對運動をする

と云ふ様な非人道的な事が御座いますか。私は左様な相談には眞平御免ですよ

私だとして國依別のアラをさらけ出すのは實に辛い、熱鐵を呑むやうな心持がす

るけれど、多勢の人民と一人には替へられませぬから、止むを得ずイヤな事を

云はねばならぬ因果な身の上……コレ鷹依姫さま、高姫の心の中を推量して下さ  
いませなア」

「御尤もで御座います。併し乍ら神素盞鳴大神様の御所望に依り、言依別神さま、  
松若彦の神司のおきめ遊ばしたと、吾々がどうかう申す権利もなければ場合で  
も御座いませぬ。どうなるのも皆神様の御仕組で御座いませうから、吾々として  
は只お目出度いと御祝ひ申すより外に道はなからうかと存じます」

「エーエ、親子共、揃ひも揃うて分らぬ人だなア。是では何程變性男子の系統……  
オツトドツコイ、是は云ふのぢやなかつた……高姫が、シヤチになつてきばつ  
ても、此濁流はせきとめる事は出来ないかなア……ア、惟神靈幸倍坐世。どうぞ  
神様、早く善と悪とを立別け下さいまして、神素盞鳴大神様の貴の御子の結構な  
身魂を、國依別の泥身魂が汚しませぬ様に、夜の守り日の守りに守り幸はひ下さ  
いませ。偏に御願申上げ奉ります」

「高姫さま、今となつて、何程ジリジリ悶えをしたつて駄目ですよ。私も餘り國  
依別さまの悪口をきかされて、腹が龍國別となつて了つた。サアサア一時も早く



此處を龍國別として下さい。是から國依別さまの所へ御祝ひに行かねばなりません。ぬ……お母アさま、高姫さまに失禮して、親子揃うて、このお目出度い結婚の前祝に行つて来ようぢやありませんか」

「どうなつと、御勝手になさりませ。後で後悔せぬ様に一寸氣を付けて置きますぞえ」

「後で後悔どころか、最早此結婚の話は前以て公開された筈だ。アハ、ハ、ハ、」

斯かる所へカールは勢ひよく走り來り、

「今言依別様の御居間へ招かれて行つて來ました所、【タカ】とか鳶とかの雌鳥がやつて來て、畏れ多い大神様の思召に依つて成立つた結構な結婚問題を冷かさうとして、百萬陀羅泡を吹いて歸つたと云ふことで御座いましたよ。何れ鷹依姫様や龍國別様の御宅へもタカがケチをつけに行くだらうから、お前一つタカや鳶が出て來ても相手にならず、ぼつ返せと仰有いましたからお使に出て參りました。グズグズしてると、タカや鳶に油揚をさらはれ、アフンとしても後の祭りだから、一寸言依別様の御命令に依つて御知らせに參りました……オツトドツコイ、此處

に夕力とか高姫さまとか云ふ御本尊が御座つたのかなア……大神様、何卒神直日  
おほなほひ  
大直日に見直し聞直し下さいませ。ア、惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世  
おほなほひ  
みなほ  
ききなほ  
くだ

(大正一一・八・二四 舊七・二 松村眞澄録)

~~~~~

靈界物語 第三二卷 海洋萬里 末の卷

終り